



Title	持続としてのイマージュ：ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について
Author(s)	平光, 哲朗
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士論文

持続としてのイメージ

—— ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について ——

大阪大学大学院文学研究科

平光哲朗

平成20年12月

博士論文

持続としてのイメージ

—— ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について ——

大阪大学大学院文学研究科

平光哲朗

平成20年12月

持続としてのイメージ

序 論

外部知覚はベルクソンの哲学にとってどのような問いの場であっただろうか。一九〇一年、フランス哲学会で彼が行った報告、「実証的形而上学と物心並行論」は、外部知覚の研究が彼の思考においてどのような問題であったかをはっきりした形で述べている。

然りと否は哲学においては不毛である。興味深く、有益で、稔り豊かなもの fécond は、どの程度かということである。精神と物質というような二つの概念が互いに対して外的なものであると確認しても何の得にもならない。反対に、二つの概念が接触しあう点に、それらの共通の境界に身を置いて、接触の本性と形式を研究するならば、重要な発見をすることができるだろう。確かに、最初の操作がいつも哲学者たちを魅了した。というのは、それは純粋な諸々の観念について直ちに行われる弁証法の仕事だからである。それに対して第二の方の操作は事実上、経験に一経験は明らかに概念が触れあい、浸透しあう場所だからである—基づいて漸進的にのみ成し遂げられるところの骨の折れる操作である¹。

ベルクソンにとって外部知覚の問題は、「精神と物質」という二つの概念の「共通の境界」を研究する場であった。その研究は精神と物質の「接触の本性と形式」を問うものである。『物質と記憶』において、ベルクソンはそれらの「接触の形式」を時間とのかかわりから捉えようとしていた。時間とのかかわりにおいて、というのは、ベルクソンの場合、意識の持続を原理として問題化するということである。したがってベルクソンが自らの考察を「事実上」、「経験上」基づいて為されると言うとき、それは持続の経験としての事実である。

本稿第一章は、『物質と記憶』第四章の考察を研究する。ベルクソンはそこで心身関係における二元論の問題を考察しながら、「精神と物質」という二つの概念が触れあう場としての「経験」を、縮約としての記憶に求めている。それはわれわれの外部知覚における感覚的性質について、時間とのかかわりにおいて概念化するものである。ただそれはベルクソンの言う経験の転回点に位置する経験である。

この記憶の概念はドゥルーズによって注目され、近年、ウォルムスによっても新たに言及されている。しかしこの概念が真に問題となる『物質と記憶』の外部知覚論における研

¹ Henri Bergson: *Mélanges*, Paris, 1972, p. 477.

究は十分に深められてはいない。この記憶の概念が重要な役割を果たすのは、『物質と記憶』第一章におけるイメージの概念と純粋知覚の想定においてであり、第四章での物質の形而上学においてである。われわれはこの記憶の概念の縁取りと位置づけを明確にしつつ、彼の外部知覚論の中心を為すものとして焦点化し、物質とその知覚を巡るベルクソンの考察を研究する。

ベルクソンは、この概念とともに意識の緊張の「程度」という観念を得ている。彼はその観念とともに、精神と物質をその程度として把握し、持続の相の下に包括的に理解する観点に立つ。これはベルクソンにとって持続として存在全般を捉えていこうとする思考の新たな契機となるものである。精神と物質の接触を問うことが彼の哲学にもたらした豊饒さは、まずこの点に見出されるだろう。

本稿第二章は持続の存在論化の問題を扱う。縮約としての記憶から出発し、精神について、それを意識の緊張の程度として把握することを明示的に示す論述は、しかしベルクソン自身によっては為されていない。そこでわれわれはドゥルーズによる縮約としての記憶の解釈を参照し、それによりベルクソンがこの記憶の概念に基づいて持続の存在論を語ることの根拠を求める。そのために『物質と記憶』第二、三章を構成するベルクソンの記憶理論を舞台に、縮約としての記憶の所在を議論することになる。またウォルムスもこの記憶の概念について独自の解釈を行っている。彼は縮約としての記憶に、ベルクソンの有名な記憶の倒立円錐の図式化の根拠を見出している。こうした諸解釈を参照しつつ、われわれは再び『物質と記憶』第四章にこの概念を引き戻し、その存在理由から再考する。

ここでベルクソンの哲学における外部知覚論を研究するわれわれの問題意識を示しておきたい。それはベルクソンの哲学における時間についての問いにある。ベルクソンは『時間と自由』第二章で、彼の哲学すべての始まりとなる持続の概念を提出するのだが、それとともに時間について問いを残している。

意識的事象を数えるためには、われわれはそれらを空間のなかで象徴的に表象しなければならないが、こうして象徴的に表象することで、内的な知覚の通常諸条件を変えてしまうようなことになるのではないか。ある種の心理的な諸状態の強度について少し前にわれわれが述べてきたことを思い起こしてみよう。表象的な感覚は、それ自体として観察すれば純粋な質である。しかし、延長を通して見ると、この質はある意味では量となる。これが強度と呼ばれているものである。この様に、われわれは自らの心理的な状態を空間のなかへ投射することで、判明な

多様性を形成することになるのだが、この投射は心理的状态そのものに影響するはずであり、また反省的意識のなかで心理的諸状態に新たな形態を与えるはずである。こうした新たな形態は、直接的な知覚が心理的諸状態に与えなかったものである。ところで注目してほしいのは、われわれが時間 *le temps* について語るとき、たいていの場合は、われわれの意識的な事象が列を為し、空間のなかで並置され、判明な多様性を形成することに成功する、等質的な媒体のことを考えているのである。この様に解された時間と私たちの心理的な状態の多様性との関係は、強度とそれらの状態のなかのあるものとの関係に等しいのではないか。そしてこのような時間とは真の持続 *durée* からは絶対的に区別される記号、象徴ではないだろうか (61) ²。

ベルクソンは第一主著で質的多様性と量的多様性とを区別する。質と量とでは多様性のあり方が異なる。それはまず心理的事象と延長（空間）との違いである。この著作第一章でベルクソンは心理的事象について用いられる強度という概念のあいまいさを指摘する。質的な経験である感覚的あるいは感情的な事象を、量化し数的に区別して捉えるところに生まれるのが心理的状态の強度という概念である。しかしこの概念は、心理的状态と物体的事物とでは多様性のあり方が異なること、このことにわれわれが盲目であるため生じる誤った概念である。ベルクソンは、心理的な事象は数的に判明に区別されるような多様性として存在しているのではないと主張する。

この引用でわれわれが注目したいのは、ベルクソンが時間の観念を、持続について思考する際に躓きの石となるかのように捉えている点である。ベルクソンの議論は次の様なものである。われわれは心理的な諸事象を思い浮かべるとき、それらを相互に区別し前後の区別をつけた仕方で順序づけて思考しようとする。この様に自らについて反省的に思考しているとき、われわれは時間とのかかわりにおいて、心理的事象を扱っているように思っている。しかしこのときわれわれは、時間ではなく空間のなかで思考しているに過ぎない。そして「この様に解された時間」は、「われわれの心理的な状態の多様性」を数的多数性の形式で捉えることから生じるものである。つまり時間は、先の強度と同じように、質的事象と量的事象を混同することから生じる誤った概念ではないか、ということになる。こうしてわれわれの心理的な状態の多様性の存在と見做される持続は、空間を離れた自我の深

² ベルクソンの主要著作からの引用は生誕百年記念版著作集の頁付けを本文中に記す。Henri Bergson: *Œuvres*, Paris, 1959.

い層において、純粹な状態で見出されるべきものであることになる。

ここでは時間の観念が、真の持続を空間的に表象することによって生じる媒体、等質的時間として捉えられている。そしてこの等質的時間が、意識の持続のみではなく、それに外的な事象について思考しようとするとき繰り返し問題化される。第一主著においてベルクソンは、意識に外的な諸事物についてその持続を思考しようとするとき、等質的時間を媒介せざるを得ないと述べている。

外的世界における継起的と言われる諸状態のそれぞれだけが存在しているのであって、それらの多様性が実在性を持つのはただ、まずそれらを保存し、次いでそれらを互いに外在化して並置することのできる、そのような意識に対してのみである (80)

意識に外的な継起、外的な事象の時間は、観察者としての意識の内部において記憶のなかに保存され、相互に外在化されることで存在する。ベルクソンはこの著作で意識に外的な諸事物は数的多数性の形式の下、空間という媒体のなかに存在すると考えている。継起するように思われるその時間的経験は、空間において諸状態が保存されるとは考えられない以上、それを観察する意識の内部においてのみ生じ、外的な諸事象の時間性は意識において等質的時間性として扱われることになる。

しかし、先の引用のあとで、ベルクソンはまた次の様にも続けている。

意識が外的世界のこれらの状態を保存するのは、外的世界の多様な諸状態が、相互に浸透しあい、気づかぬほど徐々に全体を有機化し、まさにこの連帯の効果によって過去を現在に結びつけるところの意識的諸事象を引き起こすからである (80)。

このベルクソンの記述は、意識が外的世界の諸状態を保存するのは、その原因として外的な諸状態が意識的事象に働きかけるからである、と述べているように見える。ここには等質的時間という媒体に配分され並置される以前の外的諸事象と意識との関わりが、その原的な接触が語られているように思われる。しかし「引き起こす」ということの含意は不明である。『時間と自由』では純粹持続が内的自我の深層において認められる。それとともに意識に外的な諸状態について、あるいは感覺的諸性質の継起的な到来について、それら

自身の持続は、その存在を予感されつつも、それ自体において思考しようとする等質的時間を媒介させることになる。時間の継起はこの等質的な媒体において空間的な表象のなかで展開されることになる。

本稿第三章ではこうした問題意識から『創造的進化』における砂糖水の比喩に注目する。時間の継起がベルクソンによって、現実的な持続として認められるのは、砂糖水の比喩においてである。そこでベルクソンは、「生命」と「物質」が連帯することで時間は継起すると考えている。そしてその具体的全体が、われわれの生きるこの現実的世界であることになる。

われわれはこの比喩とともに考察される時間の観念を、「精神と物質」の二つの概念について、その「接触の本性と形式」を「経験」から考察する彼の問題系、外部知覚論における問題展開の一つの頂点と見做す。ベルクソンはそこで、意識と外的諸事物が「接触しあう点に」身を置き、等質的時間を媒介することなく、時間が継起することの意味を持続として捉えようとしている。ここで初めて持続の思想は、時間をその哲学の中心に見出すことになる。そしてそのときベルクソンは時間を創造として捉えている。

われわれは、ベルクソンの哲学における外部知覚論を、その考察が「砂糖水の比喩」を頂点として見出していくような思考の展開を辿るものとする。本稿全体の課題は、精神と物質が接触する外部知覚の経験において、その本性と形式を現実的生成という観点から捉え返し、ベルクソンの哲学に新たな問題提起を目指すことにある。

目次

序論.....	1
第一章 イメージの持続.....	11
序.....	11
1 縮約contractionについて.....	12
2 イメージの概念.....	16
観念論と実在論への批判.....	19
行動の不確定性.....	20
3 純粹知覚とイメージの総体.....	22
プラドによる解釈、「超越論的経験の領野」の「開示」はどこで為されるか.....	24
イメージと縮約としての記憶.....	26
4 『試論』から『物質と記憶』第四章への問題の展開.....	29
5 物質の形而上学を巡る「四つの命題」と「一つの動的連続性」としての物質的世界.....	32
6 時間とのかかわりにおける問題提起.....	39
縮約の所在について、科学と意識との連絡.....	39
「等質的時間」を媒介させるとはどういうことか.....	41
縮約と存在論的感情としての意識の緊張.....	42
7 イメージの持続.....	45
結論.....	49
第二章 縮約の概念について.....	51
序.....	51
1 縮約の概念を巡る諸解釈について.....	51
2 『物質と記憶』の記憶理論の概略.....	54
3 ドゥルーズによる縮約解釈の展開.....	56
縮約の解釈から差異と反復の存在論へ.....	56
純粹記憶の潜在性.....	60

潜在的共存としての記憶と縮約	62
行為における性格の存在と縮約としての記憶.....	65
4 ウォルムスによる縮約の解釈、「第三の記憶」	67
5 外部知覚における縮約、自由と必然性について.....	72
結論.....	76
第三章 創造の持続	79
序	79
1 「形而上学入門」における持続の多様性の問題.....	79
2 砂糖水の比喻、具体的全体としての現在の持続.....	85
3 『創造的進化』における形而上学の動態化.....	92
縮約としての記憶と意志、生命の直観	93
意志の中断と「物質の理念的発生」	95
動態的形而上学、自己解体と自己創造の連帯.....	96
4 意識一般について	98
生命の進化過程における意識の出現と意識一般.....	100
視覚と眼.....	102
5 時間が自らに未来を与える.....	106
結論.....	107
結 論.....	109
文献表.....	113

持続としてのイメージ

第一章 イメージの持続

序

本章の目的は 縮約としての記憶についての『物質と記憶』第四章の考察に基づいて、ベルクソンがイメージという概念の下に指示していた経験を、持続の観点から明らかにすることである。

ベルクソンは『物質と記憶』第一章で「純粹知覚」を想定し、物質的世界はイメージの総体として概念化されると主張する。そしてこの想定の中、物質の知覚は物質的世界全体の部分として理解されることが示される。この点に外部知覚論においてベルクソンがイメージという概念を用いる理論的な意図がある。

しかし「イメージ」という知覚概念も、「イメージの総体」という物質的世界の概念も、純粹知覚の想定が瞬間的な観照であることと伴って、ベルクソンの哲学的体系の中での位置づけが宙に浮いたままである。

われわれは『物質と記憶』第四章でのベルクソンの考察に基づいて、イメージという概念を持続の経験から捉え返すことを試みる。その手がかりになるのが縮約としての記憶である。ベルクソンは第四章で物質とその知覚についての形而上学的考察を「四つの命題」の中、なかで展開し、物質的世界を改めて「一つの動的連続性」として概念化する。そしてその先の「持続と緊張」と題される節の中、縮約という記憶の働きについて考察が為される。その成果とともにベルクソンは、記憶の働きの内側から思考実験を行うことで、「純粹知覚」と「イメージの総体」、そして「一つの動的連続性」を持続として再発見している。この点に外部知覚理論の根底を為すベルクソンの直観があるように思われる。

そこでまず、縮約の概念がこうした考察の理論的な結び目となっていることを『物質と記憶』第一章の末尾に確認する。次いで第一章のイメージの概念について、観念論と実在論とのあいだをとるといふベルクソンの意図から考察する。すると行動の不確定性を知覚理論の原理とすることと相関的に、物質的対象がイメージと呼ばれることは理解できるように思われる。

次に、純粹知覚の想定によって二つの記憶が知覚から取り除かれることについて、それぞれの想定が持つ形而上学的意味の違いを確認する。そのなかでベルクソンは縮約としての記憶を除外すると述べていた。この点にまず「純粹知覚」の想定と「イメージの総体」という物質的世界の概念の時間性を窺うことができる。純粹知覚は瞬間的で静的なヴィジ

オンである。しかし純粹知覚のこうした理念性は、そもそもベルクソンが「縮約」から出発して外部知覚を考察していたことを表してもいるだろう。物質的対象をイメージとすることと、縮約としての記憶との関わりが、第一章における光点Pの考察のなかで改めて示されている。

イメージを、持続の観点から明らかにするというわれわれの試みは、『試論』におけるベルクソンの問いを引き継ぐものである。「われわれの外部に、持続の何が存在するか」、ベルクソンはこのような疑問を残していた。われわれの議論は全体としてこの問いに答えようとするものであり、『物質と記憶』第四章にその答えを求めるものである。

1 縮約contractionについて

一九一一年の講演「意識と生命」のなかで、ベルクソンは「縮約」と「諸事物の持続」の関係について簡単にまとめている。

これらの単調で輝きを欠いた出来事は、物質が自己意識を持つならその三十世紀を満たすことになるだろうが、私にとっては私の意識の一瞬間を占めるに過ぎず、私の意識はこれらの出来事を絵のような光の感覚に縮約する contracter ことができる。諸他の感覚すべてについてもそれぞれ同じ様に言われうるだろう。感覚は、物質と意識との合流点に位置し、われわれに固有なものでありまたわれわれの意識を特徴づける持続のなかで、莫大な期間を凝縮する condense。この莫大な期間は、言葉の意味を拡張すれば、諸事物の持続と呼びうるだろう (826)。

単純化された仕方で述べられているが、ベルクソンの外部知覚についての理解の中心に「縮約」という概念が置かれていることが分かる。それ自体では「莫大な期間」に渡るであろう「諸事物の持続」をわれわれは「意識の一瞬間」に「凝縮」することでさまざまな感覚的性質として知覚している。感覚的性質は「縮約」という働きによって成立しているとベルクソンは理解している。それによって出現する「絵のような光の感覚」は『物質と記憶』のなかで「イメージ」と呼ばれていたものに重なるだろう³。物質的対象の存在を「イメージ」として概念化していた『物質と記憶』の議論について、この要約は理解の雛形を提供している。

³ 「感覚」をベルクソンは物質と意識という二元性の「合流点」に見出している。このことは実在における二元性とその中間に現実的多様性を捉えるベルクソンの形而上学の構図を理解させる。

『物質と記憶』で主題化された問題は心身関係である。ベルクソンにとって心身関係は、「記憶」と「物質」との区別と統一に関わる問題である。区別については、まずはたんに強度の違いとして理解されていた記憶と知覚とのあいだに、本性の差異を改めて発見することが問題となる。この問題をベルクソンは失語症の実証的な研究に基づいて立て直そうとする。これは『物質と記憶』第二章と第三章を構成する問題である。十九世紀後半の失語症研究の解釈に基づいて、ベルクソンは純粹記憶を、現在の意識にそのものとして顕在的ではない仕方で存在する記憶の実在性を主張する。対して統一の問題は第四章で取り上げられる。第一章では記憶なき知覚、純粹知覚の想定が為されていた。それによりわれわれの知覚は記憶とは本性的に異なる物質的世界で成立することが示される。この想定とともに物質的世界はイマージュの総体と解されることになる。しかしこの想定と物質的世界の概念は、第一章の思考圏では宙に浮いた状態に留まる。つまり、持続というベルクソンの根本的な立場から考察されてはいない。その考察をベルクソンに可能にするのが「縮約」の概念だとわれわれは考える。第四章では、純粹知覚において主張されていた事柄、われわれの外部知覚は純粹な状態では物質と一致するという主張が、形而上学的に展開されるのだが、そこで彼は記憶の「縮約」という働きに注目することで、「物質と意識の合流点」に立ち、「実在との接触」(321)を取り戻すことを目指していく。ベルクソンは物質と意識との「接触の本性と形式」を、それが「どの程度において」重なりあうかを問おうとする⁴。

この概念についてベルクソンは第一章の末尾で触れている。そこでベルクソンは「直観」による「観念論と実在論」を巡る問題の解決を予告する。そしてその「直観」は「縮約」という記憶の働きと密接に関わることが示されている。

しかし、直観によってまた、われわれは観念論と実在論とのあいだで採るべき立場を、いずれも物質のなかに、精神によって為された構成あるいは再構成をしか見ないまでに還元された観念論と実在論のあいだで採るべき立場を、はっきり認める。われわれが提起した原理を実際に端まで辿ることで、そしてその原理によれば、われわれの知覚の主観性は何よりも記憶のもたらすものによるのだが、次の様に言いたい。物質の感覚的諸性質そのものは、もしわれわれの意識を特徴づけている持続の特殊なリズムからそれらを解放することができるなら、もはや外側からではなく内側から、それ自体において *en soi* 知られるだろう (216)。

⁴ *Mélanges*, puf, 1972, p. 477.

「われわれの知覚の主観性は記憶のもたらすものによる」とベルクソンが述べているもの、それが「縮約」である。「物質の感覚的諸性質そのもの」を「内側から、それ自体において」われわれが直接的に把握していることの可能性は、この記憶の概念にかかっている。縮約ということでベルクソンが何を考えていたか、まず簡単にまとめておこう。

物理学的には赤色という感覚的性質は単位的な諸振動に分割される。もしその諸振動が呈している諸瞬間を数え上げるとすれば、莫大な期間に渡ることになるだろう。ベルクソンによれば意識はこうした「諸瞬間」を「互いの内に引き継ぐ」ことで「凝縮」し、現実的に赤という感覚的性質として知覚している。この「凝縮」を行っているのが「縮約」という記憶の働きであり、こうした形而上学的な記憶が「われわれの知覚の主観性」を為しているとベルクソンは考えているのである。

こうした考えに立てばこの「縮約」という記憶の働きを「観念的に」解除することで、われわれは「実在との接触」を「直観」において取り戻すことになる。「われわれの意識を特徴づけている持続の特殊なリズム」から「感覚的諸性質」を「解放する」ならば、「諸事物の実在性」(216) *réalité des choses* が「それ自体において」露呈するだろう。

同じ第一章末尾からの次の引用には、「縮約」という記憶から改めて「純粹知覚」の議論を捉え直そうとするベルクソンの思考の展開が下書きされている。ここには心身関係における統一の問題を、空間的な区別から離れ、時間とのかかわりにおいて再考しようとするベルクソンの意図が現われている。

宇宙についてのわれわれの継起的な諸知覚の質的な異質性は、これらの知覚のそれぞれが持続の一定の厚みにそれ自身広がっている *s' étend* ことに、記憶がその持続の一定の厚みに非常に多くの諸震動、継起的ではあるにしてもわれわれには全部一緒に現れる諸震動を凝縮する *condense* ことに起因する。知覚から物質へ、主観から客観へ移るためには、この時間の分割されざる厚みを観念的に分割し、そこに諸瞬間の必要なだけの多様性を区別し、一言で言うなら、記憶をすべて取り除けば、十分だろう。こうして物質はわれわれの延長的な *extensives* 諸感覚がより多くの諸瞬間に分配されていくにつれて、次第に等質的になっていき、実在論が語る等質的な諸震動の体系に際限なく向かうだろうが、実際には、等質的な諸震動と決して完全には一致しない。一方に覚知されることのない諸運動とともに空間を置き、他方に非延長的な *inextensives* 諸感覚を置く必要はまったくない

だろう。反対に、延長的な extensive 知覚のなかでこそ主観と客観はまずもって結合するだろう。知覚の主観的な相は記憶が行う縮約 contraction のなかに存しており、物質の客観的実在性はこの知覚が内的に分解される継起的で多様な諸震動と混ざりあうのだから。(217-8)。

知覚と物質は、知覚から記憶を取り除いた状態を想定すれば、一致している。この主張はまず『物質と記憶』第一章において、物質はわれわれに知覚されるがまま、それがあつた場所に存在しているという常識の観念を「イマージュ」として概念化することで示されていた。そして「純粹知覚」において記憶なき知覚を想定することで、物質の世界が権利上はイマージュの総体に他ならないことが確認される。純粹知覚は「物質について直接的で瞬間的なヴィジョン」を示すものである(184)。上記の引用で予告されるのは、記憶を除外することで得られていた理念的な「瞬間」における物質と知覚の一致を、再びわれわれの意識の持続から把握し直そうとする第四章の考察である。そうであるならば「記憶が行う縮約」は、予告された「直観」と「純粹知覚」とのいわば理論的な結び目に置かれていることになる⁵。

ベルクソンは記憶の縮約に注目することで『物質と記憶』第一章の分析での、純粹知覚の想定における「イマージュの総体」としての物質的世界と、第四章の物質の形而上学における「一つの動的連続性」としての物質的世界とを媒介している。「イマージュ」という概念の実質を、感覺的諸性質の所与性に見出すならば、諸震動を性質として現れさせている縮約のなかで、つまりある限定された持続として感覺的諸性質を考察することのなかで、ベルクソンはイマージュという概念を立ち上げていったと考えることができる。

実際、「イマージュ」と「縮約」の概念の理論的な布置は重なりあっている。イマージュという概念を用意する意図は、『物質と記憶』第七版の序文で述べられているように、観念論と実在論における行き過ぎた物質観を柔軟化することにあつた。観念論は「物質をそれについてわれわれが持つ表象に還元」し、他方実在論は「物質を一つの事物に、われわれの内に表象を生じさせるが、これらの表象とは本性の異なる事物にしてしまう」(161)。そこでベルクソンは「事物」と「表象」の「中間に位置づけられたある存在」を「イマージュ」として概念化する(161)。その意図は、「感覺的諸性質」に実在性を認め、それらを意

⁵ ベルクソンが純粹知覚の時間性を「瞬間」として規定していることの二重性について、すでに石井の研究が明らかにしている。石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社、二〇〇一年、一四頁。

識に内的な現象にすることなく、物質的世界にそのまま残すことにある⁶。こうした概念化の可能性は、先取りして示すなら、第一章における純粹知覚の想定のただなかで為される光点Pの分析に明らかのように、意識に外的な「運動」を持続として理解することと、「縮約」としての記憶にかかっている。

われわれはこの研究を通して次のことを示そうと思う。科学も意識もどちらも正しく、またこの光とこれらの諸運動のあいだには本質的な差異はない。運動に、抽象的力学が拒否する統一性を、分割不可能性を、質的異質性を帰し、また感覚的諸性質のなかにわれわれの記憶 *mémoire* によって行なわれる同じだけのさまざまな縮約を認めるならば、科学と意識は瞬間において一致するだろう (191)。

「イマージュ」は实在論と観念論との「中間に位置づけられたある存在」を指示し、「縮約」は運動と性質の概念を媒介することで「科学と意識の一致」を用意する。そうであるならば両者は同じ理論的な布置のなかに置かれていると見ることができる。

2 イマージュの概念

ベルクソンの外部知覚論はイマージュの概念とともに始まる。改めてイマージュとは何か、その概念の縁取りを明確にしておこう。

哲学の議論に関わらない限り誰もが物は見えるがままそこにあると思っている。そして自らがそのような思いのなかにいること自体気につけないだろう。われわれは感覚的確信のなかで行動している。心理学的には「实在信憑」と呼ばれる態度のなかで、あるいはフッサール現象学がその出発点において括弧に入れる「自然的態度」のなかでわれわれは行動している。

ベルクソンが物質をイマージュと呼ぶことで概念化し肯定するのはこのような常識的な知覚に対する態度である。「外的対象はそれ自体として存在し、他方で対象はそれ自体において、われわれが覚知するとおり絵のようにある。それはイマージュだが、それ自体で存在するイマージュである」(162)。物は見えるがままにそこに存在する。知覚はわれわれの

⁶ 「本当は、唯物論を論駁する一つの方法が、たった一つの方法がある。それは物質は絶対にそれが存在するように見えるがままであると明らかにすることであるだろう。そうすることで、物質からあらゆる潜在性が、あらゆる隠された力が取り除かれるだろうし、精神の諸現象は独立した实在性を持つだろう。しかしそのためには、物質にこれらの諸性質を、唯物論者と唯心論者が物質から切り離すことで一致している諸性質を物質に残さねばならないだろう」(219)。

心のなかの像ではない。われわれが知覚しているのは事物そのものである。ベルクソンはこのような常識的確信を概念化し、物質的対象はそれ自体で存在するイマージュなのだと主張する。そして物質的世界はイマージュの総体としてしか考えられないのではないかと問い、この着想を徹底化していく。

イマージュは知覚についてのどんな科学も前提することになると主張される。そしてこの主張がイマージュの総体という概念になる。この主張は実証科学的に知覚の発生を考察しようとする心理学に対する批判のなかで示される。こうした批判の根底にあるのは、行動から知覚を捉えるベルクソンの観点であるようにわれわれには思われる。まず実証的な知覚理論に対する批判を取り上げて、ベルクソンが事物をイマージュとして理解する立場を確認しておこう。イマージュの概念が心身関係を扱う諸科学に対して持つ意義は、次の箇所に要約されている。

これは仮説ではない。われわれはどんな知覚理論もなしで済ますことのできない所与を定式化しているに過ぎない。実際、いかなる心理学も、少なくとも物質的世界の可能性、つまり結局は、あらゆる事物の潜在的な知覚を想定することなく、外部知覚の研究に取り組むことはないだろう (189)。

知覚を説明しようとするだけで、始めから物質的世界は「イマージュの総体」として想定されている。つまり「外部知覚の研究」には「あらゆる事物の潜在的な知覚」が前提されることになる。ベルクソンは一種の循環論を指摘することで、「イマージュの総体」としての物質的世界の所与性を主張している。

実証的な心理学は知覚の発生を脳のなかに求め、刺激が神経組織を伝わり脳に達したところで「表象」が生ずるかのよう説明する。

このたんに可能なだけの物質の全体から私が私の身体と呼ぶ特殊な対象が孤立化される。そしてこの身体の中で知覚中枢が孤立化される。こうして私に空間の任意の点から生じる震動が示され、神経組織に沿って伝わり、諸中枢に達する。しかしここでどんでん返し *coup de théâtre* が起る。身体を取りまくこの物質的世界が、そして脳を収容するこの身体が、そして諸中枢が見分けられていたこの脳が、突然お役御免になる。そして魔法の杖が振られたかのように、始めから想定されていたものの表象が、絶対的に新しいものの姿で出現させられる。この表

象は空間の外に押し出され、もはやそこから出発した物質とは何も共通なものを持たないことになる (189)。

実証的な心理学はまず、物質界の全体から系を孤立化する。例えばこの宇宙のなかのどこかに赤い林檎が置かれる。赤の光の震動は網膜に伝わる。この震動は身体の神経組織を介し、脳の諸中枢に至る。そこで表象が生ずる。しかしこの表象の出現が「どんでん返し」になってしまう。震動として空間内に置かれたものとは「何も共通なものを持たない」像が、つまり非延長的な「表象」が生ずることになる。しかしその表象は「始めから想定されていたもの」ではないだろうか。このような説明は、身体を、神経系を、震動を物質的世界から孤立化させ、その震動が脳に伝わったところでそれが非延長的な表象に転換されると考えるものである。しかしそもそも表象は「始めから想定されていたもの」であり、それをまったく新たに出現したかのように扱っているだけなのだ。そしてベルクソンの批判のもう一つの点はここにある。それは空間内の任意の点に置かれた震動がいつのまにか空間のなかに広がりを持たない像に変えられているということである。延長から非延長へのこの転換は「魔法の杖」がどこかで振るわれたかのように為されている。この批判のなかにはベルクソンの知覚理論の積極的な主張がある。

ベルクソンは「振動」や「作用」という説明様式を否定するのではないし、それらが従う物理法則自体を否定するわけではない。彼が要求するのは、「ただ魔法の杖を振るうのをやめること」(190)、そして「最初に入っていた道を進み続けること」(190)である。つまり「表象」が生じているなら、始めから「事物」を「イマージュ」として措呈していただけのことであって、脳はイマージュの一つに過ぎないということである。したがってそれは新しいものの出現を認めるべき場所ではない。対してベルクソンは知覚が引き継がれる反作用の「不確定性」に新しさの出現を捉える。ここを基準にして、行動の観点から知覚は考え直さなければならない。感覚—行動という生成のなかでベルクソンは知覚について考察しようとするのである。身体的に受容された作用は、神経系を通して脳に伝わり、不確定な行動となって物質的世界へと返されていく。そこでベルクソンにとって脳は反作用が複雑化する通過点として理解されることになる。

あなたがたは外的イマージュが感覚諸器官に到達すること、神経組織を変化させること、そして外的イマージュの影響が脳に伝播することをわれわれに示してくれた。そのまま最後まで進みなさい。運動は脳実質を通過しようとするだろうが、

そこに留まらなかったのではなく、意識的行動へと開花するだろう。これが知覚の機構のすべてである。知覚そのものについては、イマージュである限りその発生を跡づける必要はない。知覚は予め措定されていたのだし、そもそもそれを措定しないわけにはいかないのだから (190)。

知覚は、作用と反作用の物理的な法則のなかに置かれた脳という特殊な器官において新たに出現するもの、物理法則へは還元されないような性質の出現ではない。ベルクソンは身体を介して為される行動に「真に新しいもの」の産出を見るのである (170)。行動に「不確定性」を、「予見不可能性」を認めることで、行動へと向かう生成の起点として知覚は捉え直される。そこで「知覚そのものについては、イマージュである限り」その発生を跡づける必要はない、と結論されることになる。

確かに、こうした概念としてのイマージュは発生を考察する必要はない。純粹知覚の想定は、知覚の極限をとれば、知覚と物質は一致していることを確認するものである。純粹知覚の想定において、イマージュの総体としての物質的世界と知覚とは外延をぴったり同じくしていることが明らかになる。しかし物質を持続として考察する観点からは、改めて知覚の「発生」は問い直されることになる。そのとき知覚は「発生」するものではなく物質的事物の時間性を「縮約」しているものとして考えられることになる。その考察を行なうのが『物質と記憶』第四章である。

観念論と実在論への批判

いまは観念論と実在論の批判を行うベルクソンの意図を改めて見直すことで、行動から知覚を考察する彼の立場を確認しておきたい。ベルクソンにとって、物質はカントの様に「物自体」にする必要はなく、唯心論の様に「不可解な神秘的存在」(219)にする必要もない。物質については、現にわれわれの感覚に与えられているもの「より以上のもの」ではあるが、それと「異なるもの」ではない、こう認めてやればよい (218)。ベルクソンは物質的世界をイマージュの総体として措定する。そこで物質の知覚がその総体より少ないだけのものと考えられるなら、物質から知覚への移行は連続的に、そこに新たなものを何も付け加えることなく理解することができるだろう。ベルクソンは観念論も実在論も外部知覚を説明するなかで、「奇蹟」*miracle* (174)、「機械仕掛けの神」*deus ex machina* (178)、「偶発事」*accident* (178)、「神秘」*mystère* (178, 209)、「予定調和」*harmonie préétabli* (178)、「魔法の杖」*baguette magique* (189, 190) をどこかで差し挟むことになると批判

する。

「实在論と観念論」についてのベルクソンによる批判を要約し、批判の論点を明らかにしておこう（176-179）。観念論も实在論も一方の体系から他方の体系を導出しようと、あるいは一方の体系に他方の体系を還元しようとする。「主観的観念論は、第一の体系から第二の体系を派生させ、唯物論的实在論は第二の体系を第一の体系からひきだすことにある」（177）。観念論は意識の体系から科学に属する体系を、唯物論は科学の体系から意識の体系を、それぞれ導出しようとする。

实在論において物質的世界は、質点系相互に働いている秩序の恒常性が認められ、自然法則に基づいて作用と反作用が厳密に釣りあう体系として理解される。しかし「この体系の外に、さまざまな知覚があることを認めざるを得ない」。さまざまな知覚があるというのは、次のような諸体系もあるということである。「そのなかのただ一つの」物体（例えば私の身体）に関係づけられることで、その同じ秩序に属する諸物体が、その「周囲でそれぞれ異なる諸平面の上に配列され」、「この中心的イマージュの僅かな変容によってその全体の相貌が変わる」ような諸体系である。このような意識に現れる体系を、实在論は自らの説明体系の外部に認めざるを得ない。

対して観念論は意識に現れる体系から出発して物質的世界を考察する。しかし観念論も、「現在を過去に結びつけ、未来を予見しようと欲すると、この中心的位置を捨て、あらゆるイマージュを同じ平面の上に置き直さなければならない」。そうしなければ、「宇宙の科学」は可能にならないだろうし、また「この科学が存在し、それが未来の予見に成功している以上、それを基礎づける仮説は単なる恣意的な仮説ではない」はずである。

そして实在論も観念論も、「二つの体系の一つを措定し、そちらから他方の体系を演繹しようと努める」のだが、この演繹にはどこかで必ず「機械仕掛けの神」か「予定調和」が差し挟まることになる。实在論は、「意識一附随現象という唯物論的仮説のような機械仕掛けの神を召還せねばならない」し、实在論は「精神と事物のあいだに、カントの様に言うなら、感性と悟性のあいだに、何だか分からない予定調和を想定する」ことになり、「知覚を偶発事に、結局は神秘にってしまうだろう」。この様に批判するベルクソンの知覚理論の根底には、自らの体系に還元不可能な事象の出現を、知覚に見るのではなく、むしろ行動に見る視点がある。

行動の不確定性

観念論、实在論双方にベルクソンは「共通の公準」を見出す。それは「知覚はまったく

思弁的な関心を持っている。知覚は純粹認識である」という観念である (179)。対してベルクソンは生物としての行動から知覚を捉える。作用と反作用が厳密に釣り合い必然性が支配する物質的世界のなかでは、生物は作用に対する反作用が不確定な諸点として理解されることになる。有機体の神経系と運動機構の発達、その複雑化に目を向ければ、その高まりは行動に向けられていることが理解される。そして知覚世界の広がりもこうした行動の自由度の増大と相関して考えることができる。行動の観点から知覚を捉えるならば、それは「純粹認識」に向けられたものではない (181)。ベルクソンは知覚を考察する原理を、生物における行動の不確定性に置くべきであると主張する⁷。

この知覚それ自身が次第に豊かになっていくことは、諸事物を前にして生命体の行動の選択に残された不確定な部分が増大することを、単に象徴しているに過ぎないのではないか。だから、この不確定性 *indétermination* を真の原理としてそこから出発しよう (181-2)。

この観点に立つことで「私の身体」は、「周囲の諸対象に現実的な新しい作用を及ぼしうる」点で「特権的」なイマージュであると認められる (172)。そして「私の身体」を中心として諸他の物質的対象は、私の身体の可能的な行動を反映しているものと見做される。つまり知覚は、行動の不確定性が物質界に反映されたものと考えられることになる。ベルクソンの主張は物質的世界に新しい運動がもたらされること、つまり行動にいわば創造を見ることに基づいて知覚を考察すべきだということである。

知覚の広さは、引き続く行動の不確定性を正確に測ると主張することができるし、次のような法則を述べることができる。知覚が空間を自由にすることは行動が時間を自由にすることと正確に釣り合っている (183)。

常識の観点に立つことで、物質的対象はイマージュであると考えられていた。この立場が徹底され、科学的实在論に対する批判から物質的世界はイマージュの総体としてしか概念化されないことになる。ベルクソンは観念論に傾いたのだろうか。イマージュという概念によってベルクソンは、観念論と实在論のあいだをとると主張していた。この主張を知

⁷ こうした観点には進化論の内部で知性の発生を跡づけていく『創造的進化』の考察への助走が見られる。ベルクソンは『進化』序論で「認識論と生命論」が同時に進められるべき探求であると述べる (492)。

覚理論の原理から再考するなら、行動との相関性において物質の知覚がイメージとされていると考えられる。次の定義には知覚についてのこの原理が反映されている。

私は物質をイメージの総体と呼ぶ。そしてある特定のイメージすなわち私の身体の可能的行動に関係づけられたこれら同じイメージを、物質の知覚と呼ぶ(173)。

問題として残るのは「イメージの総体」という物質概念である。物質的世界をイメージの総体として概念化することの根拠は「純粹知覚」の想定において、とりあえず示される。しかしこの想定は記憶を除外するのだから、意識の持続を排除することになる。それはいわば非ベルクソンの想定である。この純粹知覚の想定と「イメージの総体」としての物質的世界という概念との連関を次いで取り上げる。この想定について議論することで、縮約としての記憶とイメージの経験との関係を窺うことができる。

3 純粹知覚とイメージの総体

「純粹知覚」は記憶なき知覚の想定である。ベルクソンはこの想定のために知覚から記憶の二つの働きを取り除くと述べている。一方には現在の知覚に呼び出され、そこに絶えず混入している過去の経験のイメージの除外があり、他方には知覚のなかで働いている記憶の働き、自らに外的な諸瞬間を凝縮することで感覺的性質をそれとして生じさせている「縮約」としての記憶の除外がある。この二重の仮定によってベルクソンはわれわれの知覚の時間的な生成をいったん停止し、知覚それ自体を観照する意識を想定する。つまり意識の持続を排した知覚を考える。

この二つの仮定は記憶なき知覚の想定として一括りに提示されているが、それぞれの仮定がもつ形而上学的な意味は異なる。

日常的な知覚の大部分は記憶が寄与するものに覆われている⁸。われわれの知覚の主要な役割は、あるものをそれとして同定すること、すなわち再認にある。再認は「過去の経験の無数の細部」によって可能になる。ベルクソンはまず過去の経験としての記憶の除外を想定する。それにより取り除かれるのは、知覚における人称性である。この想定によって

⁸ 「実際、記憶 *souvenir* に浸されていない知覚は存在しない。われわれの感官の直接的な現在の諸与件に、われわれは過去の経験の無数の細部を混ぜている」(183)。

ベルクソンは知覚と記憶との本性の差異を見届けようとする⁹。そうすることでベルクソンは「精神」に「独立した実在性」(219)を確保しようとする。この記憶の除外の想定は、この著作第二、第三章で考察される純粹記憶の実在性に関わるものである。

他方、ベルクソンは縮約として働いている記憶 *mémoire* を除外する。こちらの想定は知覚そのものの時間性に関わることになる。

知覚をどれほど短いものと想定しても、実際知覚はある程度の持続をつねに占める。したがって、記憶の努力 *effort de la mémoire* を必要とする。それは多数の諸瞬間を互いに引き継いでいる。さらに、後ほど明らかにしようと思うが、感覚的諸性質の《主観性》はとりわけわれわれの記憶によって行われる実在の一種の縮約 *contraction* からなっている (184)。

ここで取り上げられるのは、いわば知覚それ自体の持続に関わる記憶の働きである。この記憶の働きは感覚的諸性質がわれわれに与えられていることについて、その「主観性」を構成するとベルクソンが見做す力として働く記憶である。先の想定で捨象されるのは外部知覚へと混入する個別的な、人称的な記憶 *souvenir* である。対してこの想定に関わるのは外部知覚そのものの「主観性」を構成する記憶である。この記憶を解除するという想定は、物質そのものと知覚とを「緊張の程度」として理解する、この著作第四章での議論に直接関わる。

こうして記憶の除外を想定することで純粹知覚が現れる。

純粹知覚 *perception pure* とは、事実上というよりもむしろ権利上存在する知覚、私がいる場所に置かれ、私が生きているように生きているが、現在のなかに吸収され、さらにあらゆる形の記憶を排除されることで、物質について瞬間的で直接的なヴィジョンを獲得できる存在が持つような知覚である (185)。

上述の二つの想定から極限の知覚を導き出すことで、ベルクソンは「物質について瞬間

⁹ 「個体的な偶有性はこの非人称的な知覚に接ぎ木されたものであること、この知覚はわれわれの事物認識の基底であること、そして知覚を見誤ったために、知覚を記憶がそこに付け加えるものあるいはそこから差し引くものから区別しなかったために、知覚全体を一種の主観的で内的な光景にしてしまい、記憶 *souvenir* とはその強度の程度によってしか異ならないとしてしまったことを明らかにしようと思う」 (184)。

的で直接的なヴィジョン」を描き出し、その内部で意識的な知覚の成立を跡づけていく。

第一の仮定によって外部知覚から個別性、人称性は失われる。こうして外部知覚に残されるのはおそらく「私の身体」のみとなる。さらに第二の仮定が縮約としての記憶を除外することで、「身体」には何らかの視点への帰属を示すいかなる徴も残らないことになる。この極限の知覚に視点は見出され得ない。そしてこの視点なき知覚という想定が、「あらゆる事物の潜在的知覚」としての「イマージュの総体」の概念と重なりあう。「権利上存在する視覚」は物質的世界の全体と広がりと同じくするだろう。こうして「純粹知覚」において初めて「イマージュの総体」という概念の内実が前景化される。「物質的世界を想定することでイマージュの総体が与えられる」(185)という認識論的な批判を構成していた主張と、「物質は絶対にそれが存在するように見えるがままにある」(219)というイマージュの概念との結びつきを可能にするのは純粹知覚の想定である。

「イマージュは知覚されることなく存在することができる。イマージュは表象されることなく現れることができる」(185)。純粹知覚の想定とともに「イマージュの総体」について、それを、われわれの現実的な知覚となる一つ手前で、物質的世界の「存在」あるいは「現存」を示す概念として理解することができるだろう。

そこでベルクソンが改めて意識的知覚としての表象の成立をどの様に説明するかが問題になる。そしてここで行動の観点が知覚の原理として役割を果たすことになるのである。

知覚は権利上は、全体のイマージュであるはずであり、事実上ははただ利害関係のあるものに縮減されているのだから、説明すべきことは、知覚がいかにして生まれるかではなく、いかにして自己を限定するかということである (190)。

知覚は権利上は物質的世界の全体とぴったり重なっている。ただ事実上は、知覚は物質的世界のなかで反作用の不確定な諸中心に限定されているだけなのだ。これがベルクソンの知覚の理解である。このとき物質と知覚は全体と部分の関係として捉えられることになる。

プラドによる解釈、「超越論的経験の領野」の「開示」はどこで為されるか

ここでプラドの研究を参照したい。彼はフッサール現象学における「還元」と「ベルクソンの還元」とを対比することで「純粹知覚」の想定によって物質的世界を「イマージュの総体」として露わにしようとするものの、哲学的な意味を明らかにしようとしている。彼は「純粹知覚」を「観察者なき光景」*spectacle sans spectateur*と印象的な仕方で特徴

づけている。「われわれはある意味ではこう言うことができるだろう、イマージュの体系は観察者なき光景の観念に対応する、と。いっそう正確には、それは光景が可能になる場所であると同時に、観察者一般の可能性の条件が創造される場所である」¹⁰。「観察者なき光景」という観念は「純粹知覚」と「イマージュの総体」との相関性を一言で表現するものだろう。彼は「純粹知覚」について、それが意識的知覚の可能性の条件を問う領野を開示するものであり、「イマージュの総体」をそこに開かれる地平として理解している。つまり「純粹知覚」において「超越論的経験の領野」が開示されると見做すのだが、この「超越論的経験の領野」の開示がどこで為されるのか、プラドはその点にフッサールの還元との決定的な違いを認める。この理解には従来の現象学によるイマージュ概念の理解の枠組みを超えた一歩がある¹¹。

われわれはここにベルクソンの還元の特異な性格を理解する。それは現象学的還元と根本的に区別される。現象学的還元は世界を現象のあるいはノエマの体系に移行させることで、《超越論的経験》の領野を、一つの超越論的主観性の地平として開示する。もしベルクソンの還元が、見てきたように、ひとしく超越論的経験の領野 *champ d'expérience transcendantal* を創始するのであれば、それは構成的主観性のただなかにはないだろう。反対に、不確定性のないしは新しさの導入の概念に基づいて、われわれは、超越論的領野の内部を、主観性そのものの生誕を見届けるのだ¹²。

純粹知覚の想定は、物質的世界をイマージュの総体として、「超越論的経験の領野」として開示する。しかしそれはイマージュの相関者としての「構成的主観性」の内的構造においてではない。ベルクソンの場合、この領野の発見は、行動の「不確定性」の導入と同時に

¹⁰ Bento Prado: *Présence et champ transcendantal*, traduit par R. Barbaras, OLMS, 2002, p. 114.

¹¹ 例えば、サルトルは『想像力』のなかでイマージュ概念を取り上げてベルクソンを批判している。cf. Jean-Paul Sartre: *L'imagination*, Paris, 1936. サルトルの批判は一言で言えば、イマージュをノエマとして理解し、その相関項として意識をノエシスとして理解すべきであったのだが、ベルクソンは意識の志向性に盲目的だったということである。しかしベルクソンの意識の概念はそもそも持続であり、そこには志向性による意識の概念化とはまったく異なる哲学の開始があっただろう。イマージュの概念もこの観点から理解されるべきであったはずだが、純粹知覚の想定とイマージュの総体という概念は、持続というベルクソンの体系の内部で説明が十分に為されないまま、いわば宙吊り状態にあったため、サルトルのような批判を許すことになった。プラドの研究は現象学とベルクソンの開いた哲学的領野の異なりを認識しつつ、両者の交錯を見届けようとする点で、この界面で為された研究のなかで最も刺激に富みかつ生産的である。

¹² Prado: *ibidem*.

あり、「イマージュの総体」が「主観性そのものの生誕」と等しいものと見做されるのである。

プラドは、知覚を行動との相関性において捉えるベルクソニズムの原理を踏まえつつ、「イマージュの総体」を「超越論的経験の領野」の開示として捉える。確かに純粹知覚の想定によるイマージュの総体としての物質的世界の発見は、そこから知覚の構成を語り出すことが可能になる場所としての「超越論的経験の領野」の開示でありうるだろう。純粹知覚は『物質と記憶』第一章の内部では権利上の想定であり、ベルクソン自身認めるように「経験を論拠にすることはできない」ものである(221)。『物質と記憶』第一章において、「純粹知覚」と「イマージュの総体」という理論的な想定の中かで、それでも知覚の「現実性」*actualité*を構成するのは、行動 *action* の観点である。プラドの指摘は「ベルクソンの還元」が「不確定性」あるいは「新しさ」の概念の導入と相関的に為されると見做す点でわれわれの理解と重なる。

しかし「純粹知覚」と「イマージュの総体」は、『物質と記憶』第一章の議論に関わる限りベルクソニズムにおける「超越論的経験の領野」の開示とは考えられないのではないか。われわれの考えではそれが為されるのはこの著作第四章である。そこでは行動の「不確定性」あるいは「新しさ」は記憶の「縮約」とともに理解される。そしてこの記憶を除外するのではなく、この記憶の内側から考察を出発することで、ベルクソンは改めて物質とその知覚を、持続の相の下に捉え直そうとする。この点にこそベルクソンに固有の「超越論的経験の領野」は開示されるだろう。ただ、プラドが「不確定性」の出現とともに「超越論的経験の領野」が創始されると理解している点は重要である。彼の理解は現実的生成の中かで、この現実を可能にしている実在を探究するベルクソンの考察の構造を捉えている。われわれはこうした考察が「縮約」の概念とともに為されると考える。そこで、イマージュの概念が縮約としての記憶に引き継がれて「物質の形而上学」的考察へと連絡する道筋を辿ることにする。

イマージュと縮約としての記憶

物質と知覚を全体と部分の関係として説明しようとするとき、イマージュの現存 *présence* が意識的な表象 *représentation* に変わる点をいかに考えるか、この点が問題になる¹³。ベルクソンは次の様に考える。「表象」に「現存」よりも「より多い」ものがあれば、

¹³ 「確かにイマージュは知覚されることなく存在することができる。イマージュは表象されることなく現存することができる。そして現存と表象、この二つの語のあいだの隔たりは、物質そ

この二つのあいだに何か付け加わることになる。そうならば「物質から知覚への移行は不可解な神秘に覆われたままになる」(185)。つまり意識的知覚に説明できないものを残すことになる。しかし「意識的知覚」が「物質」よりも少ないもの、ただ全体のなかで限定された部分であることを示すことができれば、物質と知覚に本質的な差異を認めることなくその違いを説明できるだろう¹⁴。

イメージの総体としての物質的世界は、物理法則にしたがって作用し反作用しあう必然性の世界としてその現存が確認される¹⁵。イメージの総体に置かれたたんに現存するのみの諸イメージは、その各点において自然法則にしたがってあらゆる方向からの作用を受け、等しい反作用を同じ方向に返している。「観察者なき光景」における物質的世界は物理法則の必然性の下にある。そのなかに生物が反作用の「不確定性の諸中心」centres d'indéterminationとして認められ、それと同時に意識的知覚が成立する。そのとき知覚は、物質界全体から諸中心という部分への「減少」によって、「孤立化」によって成立していると考えることができる。生物が物質的世界に「不確定性の中心」として導入されることで、その諸機能の利害関心に関わる作用のみが、それぞれの中心において選択され受容されることになる。このとき諸作用はこれらの中心をただ通過するのではなく、選択され受容されて、相互的な全体性から切り出され「孤立化」する。知覚はこうした限定性に他ならないとベルクソンは考える¹⁶。そしてこの受容される作用の選択が意識の始まりと見做されることになる(188)。

つまり「物質の瞬間的で直接的なヴィジョン」のなかに行動性を原理として配置し、静止した物質状態に時間的な生成の可能性を見出すことによって、全体からの減少として意識的知覚は説明されるのである¹⁷。

のものとわれわれがそれについてもつ意識的知覚とのあいだの間隔をまさしく測っている」(185)。

¹⁴ 「もし現れから表象へ減少によって移行することができれば、あるイメージの表象がそのたんなる現われよりも少ないものであれば、事情は同じではないだろう」(185)。

¹⁵ 「それ、現存するイメージ、客観的実在は、表象されたイメージから必然性によって区別される。現存するイメージあるいは客観的実在は、その諸点のそれぞれによって他の諸イメージのすべての点に働きかけ、受容したもののすべてを伝達し、それぞれの作用に対して相反する等しい反作用を対置しなければならず、結局、広大な宇宙のなかを伝播する諸変容があらゆる方向にその上を通過する一つの道でしかないという必然性である」(186)。

¹⁶ 「さてもし諸生物が宇宙のなかで《不確定の諸中心》を為し、この不確定性の程度がその機能の数と発展に応じるものであるとすれば、それらがただ現存するというだけで、その諸機能にとって関心のない対象のすべての部分が廃棄されるのと同じことでありうると考えられる。それらはいわば外的諸作用のなかから、それらにとって無関心なものをそのまま素通りさせるだろう。他の作用は孤立化され、その孤立そのものによって《知覚》となるであろう」(186)。

¹⁷ ベルクソンは表象の成立を反射としても説明している。それにより説明されるのは意識的表

しかし知覚は、変化する中心に応じてその諸部分が配列されるという点で、単純なイメージ *image pure et simple* からまさに区別されるのだとすれば、その限定を理解するのに困難はない。それは権利において無際限でありながら、事実においては、自らの身体と呼ばれるこの特殊なイメージの歩みに委ねられた不確定の諸部分を、描き出すことに限られるのだ (190)。

「単純なイメージ」を全体から孤立させることが意識的知覚の存立であるならば、われわれの知覚は物質があるその場所に見えるがままにあることになる。つまり「イメージ」という知覚の概念は、そのまま物質の存在と重なることになる。

純粹知覚の想定によって、物質的世界はイメージの総体として露わになる。そのなかに不確定性の諸中心が配置されることで、その中心とともに全体は部分へと限定される。この限定された部分が物質の知覚なのだから、物質的対象はそれが存在するその場所で知覚になっているだろう。こうした理解が常識の観点によって肯定されたイメージの概念の内実である。

そしてベルクソンは知覚についての自らの理解がそのまま科学的な分析と連携していること、科学とは異なる体系を立てているわけではないことを、改めて示そうとする。それが光点 P の分析である。その光の点に「科学はある振幅と一定の持続を持つ諸振動を位置づけ、意識は同じ点に光を知覚する」(191)。この科学と意識の一致の主張にイメージ概念の賭け金はあるのだが、その主張がここで縮約の概念によって引き継がれることになる。

実際、意識のなかで形成され、次いで P に投影されるような非延長的な *inextensive* イメージは存在しない。本当は P 点、P 点が放つ諸光線、網膜、関係する神経諸

象のもつ「輪郭」あるいは「形象」である。「与えられているのは、物質界のイメージ全体とともにそれらの内的諸要素の全体である。だが、真の活動性の諸中心を、つまり自発性の諸中心を措定するなら、これらの中心に到達して、これらの活動性に関わる諸光線は、これらの中心を通過する代わりに立ち戻り、諸光線を送り出した対象の輪郭を描くように見えるだろう。そこに積極的なものは何もない。イメージに付け加えられるものは何もない。新しいものは何もない」(187)。例えば身体を鏡と考えればよい。私の身体の今ある場所に全方位に向けられているような鏡を置けば、そしてこの鏡は生きていて、生存に必要な固有の利害関心があるとしたら、その鏡に関係したすべての外的対象が鏡面には映り込んでいるだろう。しかしこの映り込みを可能にするのは、そこにやってきた光であり、光はこの鏡に反射することでその方向からの象りを与えられる。鏡面に映り込んでいる諸対象は鏡のなかに存在するのではない。それが存在する場所はその光のもときた場所である。外的対象に形が与えられるのは、それが光を送ってきて私の身体という鏡に反射されるからである。

要素は一つの連帯した全体を形成している。光点 P はこの全体の部分を為している。そして、他の場所ではなく、まさしく P において、P のイマージュは形成され、知覚されるのだ (192)。

縮約の概念にかけられているのは、光点 P のイマージュが P において形成されるということ、このことを科学と意識の両方の立場から肯定することである。それは「諸光線、網膜、関係する諸神経」が、同じ事象に対するさまざまな視点からの説明であるような、「一つの連帯した全体」から知覚を理解することである。イマージュとしての知覚の発生は説明する必要がなかった。しかし心身関係の統一の問題を扱うなかで、物質の知覚は改めて持続の観点から再考される。そしてその説明は、縮約としての記憶の理解にかかっている。もう一度すでに引用した箇所を思い出しておこう。「科学も意識もどちらも正しく、またこの光とこれらの諸運動のあいだには本質的な差異はない。運動に、抽象的力学が拒否する統一性を、分割不可能性を、質的異質性を帰し、また感覚的諸性質のなかにわれわれの記憶 *mémoire* によって行なわれる同じだけのさまざまな縮約を認めるならば、科学と意識は瞬間において一致するだろう」(191)。いまやこの条件へと立ち入った考察が検討されるべきである。

この主張を展開するために、ベルクソンは縮約としての記憶を除外して知覚を考えるのではなく、その内側から自らの知覚理解と科学との一致点を示す必要がある。この要請にしたがって展開されたのが、『物質と記憶』第四章における物質の形而上学であり、その先で改めて純粹知覚とイマージュの総体とを持続の相の下に位置づけ直したのが「持続と緊張」の節である。われわれの議論もそこに舞台を移すことになる。

4 『試論』から『物質と記憶』第四章への問題の展開

『物質と記憶』第一章で提起される「純粹知覚」は権利上の知覚であり、経験的に論証されるものではなかった。だがベルクソンはその著第四章で、外部知覚における記憶の除去によって想定した「瞬間的で直接的なヴィジョン」について、記憶、縮約の働きを内側から辿りつつ、われわれをその形而上学的経験へと導いていく。外部知覚において「直接的直観」のなかに「諸事物の実在」が探究される。それは「経験の転回点」の彼方へと赴くことを意味する。「経験がわれわれの実利の方向へ屈折しながら、それがまさしく人間的経験になるこの決定的な転回点の向こうへ経験を探しにいくこと」(321)。こうした形而上学的経験へ赴くために、ベルクソンは持続と空間との区別をその方法として考える。す

に『試論』において意識に内的な領域に純粋な形で持続を見出すため、ベルクソンは持続と空間を区別していた¹⁸。この区別を外部知覚においても適用するというのである。

『試論』におけるその区別について振り返っておこう。持続は自我の深層で、空間性が混入することのない状態において、その純粋な形態を見出される。心理的な事象は質的多様性として存在する。質的な多様性は、その要素的部分に全体が反映され、諸要素が相互浸透的な仕方では存在するものに見出される形式である。この形式は時間性においてしか考えられない。その具体的な存在が持続である。対して空間は、そこにおいて事象を相互外在的な仕方ですれぞれ同一的に、同時的に位置づけることを可能にする等質的な媒体である。この媒体の下で事象は数的多数性という形式の下で捉えられる。

第一主著では意識に外的な対象は、この媒体に適合する形で存在するとされていた。この著作におけるベルクソンの問題は、「自由の問題」を解消することであり、「自由の問題」は、自我が持続という仕方では存在することをわれわれが十全に思考し得ないことに由来する「擬似問題」であることを示すことで解消される。そのためには、われわれは空間を去って「われわれ自身に立ち返り」、「内的な変化」をその「源泉そのもの」において把握する必要があった。

こうした問題関心からは、意識に「外的な変化」すなわち「運動」について、それ自体における持続がはっきりと認められることはなかった。第一主著で為された「エレア派の詭弁」の批判は、次の様に結論している。

要するに、運動のなかには区別されるべき二つの要素がある。すなわち、通過された空間とその空間を通過する行為、継起的な諸位置と、これらの位置の総合である。これらの要素のうち前者は等質的な量であり、後者はわれわれの意識のなかでしか実在性を持たない。それはこう言ってよければ質ないし強度である (75)。

意識の外部に観察される「変化」である「運動」は、それを観察する意識のなかでのみ持続としての実在性を持つとされていた。なぜなら運動の本質は時間であり、「過去と現在の共存」(75) であるのだが、この時間性は、運動を見るものの意識における記憶の働きを要請するからである。観察者による「精神的総合」、「いわば質的な総合」が為されているの

¹⁸ 「(質との量との混同が) われわれの持続の概念のなかに空間を導入することで、内的な変化と外的な変化、自由と運動についてのわれわれの表象を、その源泉そのものにおいて墮落させる」(51)

でなければ、「外的な変化」の実在性を考えることはできない¹⁹。したがって、意識に外的な対象の運動はそれを観察する意識のなかでのみ時間を与えられ、持続としての存在を与えられることになる。これが『試論』における「外的な変化」についての結論である。

この観点から『物質と記憶』第四章の外部知覚論を振り返ると、ベルクソンはそこで「外的な変化」にそのまま持続を、物質的諸事物に持続をそれ自体において認めていこうとしていることが理解される。しかしその歩みは非常に複雑で難解なものとなる。そもそも『試論』において、外的諸事物の持続は、われわれ自身の持続を純粋な形態で見出すことを阻む「困難」として認識されていた。

しかし、われわれは持続をその根源的な純粋さにおいて表象するのに信じ難いほどの困難を感じる。そしてこのことは、おそらく、われわれだけが持続するのではないということに起因している。外的諸事物も、われわれと同様に持続しているように思われるのだが、この最後の観点から見れば、時間が、まったく等質的な媒体の様に見えるのだ (72)。

困難は、「外的諸事物」を持続しているものと認めようとする、時間を「等質的な媒体」として考えざるを得なくなることにある。『試論』のなかでベルクソンは「外的諸事物」を空間内に位置するものと捉えていた。したがってそれらが継起的に到来するとしても、その継起は意識によって総合されることに基づく。外的諸事物自体は空間的な存在形式の下に理解されるのだから、それら自身は絶えず現在の状態のみしか自ら保ち得ない。意識はそれらの状態間を判明に区別しつつ、それらの状態に時間系列的な区別をつけ、並べていく。外的諸事象の継起という時間性はそれを観察するものの意識によって与えられることになる。そして意識がこうした操作を行う媒体が、「等質的時間」である (80)。

そこでベルクソンが「外的諸事物」の「持続」を「根源的な純粋さ」において表象しようとするなら、「等質的時間」を媒介させることなく外的諸事物の持続を考察せねばならないことになる。そのためには外的諸事物が空間内に位置するという『試論』における考察の前提を覆していく必要がある。こうした課題がかけられているのが、『物質と記憶』第四章における物質の形而上学を巡る「四つの命題」であり、「縮約」という形而上学的な記憶についての考察であるだろう。

¹⁹ 「意識が諸々の位置とは別なものを知覚するのは、意識が継起する諸位置を記憶し、それらを総合するからである」 (74)

「四つの命題」において、『物質と記憶』第一章で「純粹知覚」において見出された「イマージュの総体」としての物質的世界は、「一つの動的連続性」としてその全体を持続として見出される。ベルクソンはまず空間と延長を区別することで概念として見届けようとする。そのとき延長は持続の相の下に把握されるのだが、それが「一つの動的連続性」という持続の動性であり、「延長」extention である。しかし「四つの命題」で為されるのは形而上学的な概念批判であり、経験において示されるものではない。「縮約」としての記憶の働きについての考察は、批判的考察の内実を形而上学的経験において示そうとするものである。この記憶の働きは、外的諸事物とわれわれの意識との接点である感覺的諸性質について、それが外的諸事物の持続をわれわれの意識の一つの瞬間に収縮することで現出するものであることを、ベルクソンに見抜かせる。この記憶の働きを、純粹知覚の様にたんに知覚から除外し考えるのではなく、いわば内側から崩していくとき、「外的変化」をその動性において把握する可能性が、すなわち「等質的時間」を媒介することなく外的諸事物の持続を直接的に観照する可能性が開かれる。感覺的諸性質はわれわれに与えられた物質的世界の現実的に多様な眺め vues である。この眺めを構成している縮約を内的に崩す思考実験のなかで、さらに進んで物質的世界の实在のヴィジョン vision を得ようとするところに、ベルクソンの直観があると見てよいだろう。

まずは、物質の形而上学を巡る「四つの命題」におけるベルクソンの考察を確認していく。

5 物質の形而上学を巡る「四つの命題」と「一つの動的連続性」としての物質的世界

「外的な変化」についてのわれわれの思考を「等質的時間」という概念的な制限から解放すること、この『試論』からの課題とともに『物質と記憶』の問題を確認しておこう。心身関係における統一の問題を解消するためにベルクソンは「時間とのかかわりにおいて」問題を提起しようとする。この問題提起は知覚についての科学的分析と同じ土俵で為されなければならない。その必要が光点 P の考察のなかで示されていた。しかしそのためにベルクソンとしては、「運動に、抽象的力学が拒否する統一性を、分割不可能性を質的異質性を帰すことの妥当性を示さねばならない。そのために為された考察の成果が物質の形而上学を巡る「四つの命題」としてまとめられたものである。

I —すべての運動は、休止から休止への移行である限り、絶対的に分割不可能である。

II—実在的諸運動が存在する。

III—絶対的に決定された輪郭を持つ独立した諸物体への物質の分割はすべて人為的な分割である。

IV—実在の運動は事物の移行 transport というよりも状態の移行である。

意識に内的な変化ばかりではなく、あらゆる運動のそれ自体における分割不可能性を主張するのが I の命題である。次いで II の命題において、運動の実在性が主張される。III の命題はさまざまな運動について、物体を基体として思考することの人為性を主張し、IV の命題において、全体としてみた物質的世界は状態変化として、「一つの動的連続性の全体」であることが主張される。

この四つの命題のなかで、ベルクソンはこの著作における彼の物質観の一つの頂点に達している。物質的世界を状態変化として、全体を一つの持続と理解する観念を彼は獲得する。ただベルクソンは考察の範囲を心身関係の問題に限ることで控えめに、この考察によってわれわれの意識に与えられた感覚的性質と、科学がそれを分析して取り出す「諸運動」との対立、質と量との概念的対立を緩和することになったに過ぎないと述べる。

この四つの命題を定式化することで、実際のところわれわれは諸性質ないし諸感覚と諸運動という相互に対立させられた二つの項のあいだの隔たりを段階的に狭めたに過ぎない (337)。

こうした態度のなかには、ベルクソンの形而上学が持つ「経験的」性格が窺われる。「持続と緊張」と題された部分でベルクソンはさらに縮約としての記憶から、感覚的諸性質の成立の過程を構想し、そのなかで外的諸事物の持続は、現実的知覚を可能にしているものとしてその実在を位置づけられる。つまり次のような概念を意識の経験から裏打ちしようとするのである。「例えば、われわれは次の様に考えることはできないだろうか。覚知された二つの色の還元不可能性は、緊密な持続に特に由来すると。そこでは、何兆もの振動が縮約されており、それらの色がこの何兆もの震動をわれわれの諸瞬間なかの一つで実行している、と」(338)。

まずはこうした概念に辿り着くため、ベルクソンが行った考察を順に確認していく。

I われわれに外的な変化すなわち運動に「分割不可能性」が認められる。外的対象の

運動の知覚において、感官とともに想像力が働いていることが指摘され、感覚には、運動そのものが直接与えられていることが肯定される。運動体は動くにつれて軌跡を描く。しかし軌跡は、われわれの想像力が仮想的停止相において運動を捉え続けることで引かれていくものであり、運動そのものとは区別される²⁰。この軌跡が運動に分割を許すことになるのだが、分割は想像力の産物であって運動そのものとは区別される²¹。

想像力の働きを感覚から区別することで、ベルクソンは移行することそれ自体に運動の実在を求める。

われわれはここで、実在的運動の知覚に随伴しそれを覆っている錯覚をその原理そのものにおいて捉えている。運動は、明らかにある点から他の点へと移行する *passer* ことに、したがって空間を通過することに存する (325)。

諸点間の移行それ自体によって運動を定義することで、その移行をさらに諸点へと細分化しても分割された諸点間に移行は認められるのだから、定義上運動は分割不可能となる。

ところでウォルムスは、この想像力についてのベルクソンの指摘のなかに、イマージュの概念が廃棄される場所を見出している²²。イマージュ *image* は想像力 *imagination* の産物だから、外的知覚のなかで想像力と運動の感覚への直接的所与とが区別されるこの段階において、イマージュは物質の実在を定義するものではなくると判断しうることになる。しかしこの箇所における想像力への批判の本質は、運動を仮想的に停止させ続けるのが想像力であるという認識論的な規定にある。この点をとって想像力が物質をイマージュ化しているということにはならないだろう。二つの反論が可能である。一つは後に見るように、感覚的性質をそれがあつたその場所で成立させているのは縮約であり、それによって外界は「絵のように」現れていること。つまり想像力が物質的対象をイマージュ化しているわけではない。むしろイマージュの存在論的な規定を求めるべきは縮約の働きにである。もう一点はベルクソンが、ここでイマージュの総体としての物質的世界を、運動の概念と直接

²⁰ 「運動をその軌跡と同じく分割可能なものと見做すことで、常識はただ実生活のなかで重要な次の二つの事実をたんに表明しているに過ぎない。1 あらゆる運動が空間を描くこと。2 この空間の各点で運動体は停止することもあり得ること」 (327)。

²¹ 「諸感覚は、そのままであれば、われわれに実在の運動 *le mouvement réel* を呈示する。二つの現実的停止のあいだに、固定され分割されていない *indivisé* 一つの全体として。分割は想像力の作品であり、想像力はまさしくわれわれの日常的経験の動く諸イマージュを固定する機能である。夜間、嵐の光景を照らす一瞬の稲妻の様に」 (325)。

²² Frédéric Worms: *Introduction à Matière et mémoire*, Paris, 1997, p. 216.

等号で結びつけていくために考察を行っているということである。ベルクソンは物質的世界についてイマージュの総体のたんなる現存という静的な概念から離脱し、後に見るような「純粹イマージュ」を運動の動性において把握することで、物質的世界の動的概念へ移行しようとしているのである。そしてその理解のなかで、ベルクソンはイマージュの持続を實在として垣間見ているとわれわれは考える²³。

Ⅱ 次いでベルクソンは、運動が全体的変化として概念化されうることを、物理学の考察から引き出し、さらにその考察を自らの身体的な運動の観察と重ねあわせることで肯定しようとする。

まず数学における運動の観念が検討される。数学者は運動を長さの変化としてしか扱っていない。そこで運動は距離の変化に還元され、「絶対運動」は存在しないことになる。しかし物理の領域では事情が異なる。物理学では「物質的宇宙」が相を変化させていることが認められ、全体において運動が存在することが確かなものとして認められている²⁴。ベルクソンは、こうした物理学的な運動についての考察と自らの心理学的な観察との一致点を、身体的な運動についての考察のなかに探っていく。

私の目が私に運動の感覚を与える時、この感覚は一つの現実 *une réalité* であり、対象が私の目に対して移動するにせよ、私の目が対象の前で動くにせよ、何か実際に起こっているのだ。私が意志的に運動を生み出そうとして運動を起こした場合、また筋肉感覚が私に運動の意識をもたらす場合、私は運動の現実性についてなおのこと確信している。こういうことになる、状態のあるいは質の変化として運動が私に内的に現れる場合、私は運動の現実性に触れている。しかしそれでは、私が諸事物のなかに質の諸変化を知覚する場合、どうして事情が同じではないのだろうか (331)。

²³ 杉山氏は次のように述べている。「ベルクソンが言っているのは単に、イマージュの総体としての物質的宇宙には、現出（としての意識）が含まれているということである」。現出はベルクソンにおいて持続として考えられているのでなければならないだろう。杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、二〇〇六年、一三二頁。

²⁴ 「物質的宇宙の様相が変化すること、あらゆる現実的体系の内的布置が変化すること、ここでは動性と静止のあいだでわれわれにはもはや選択の余地はないということは正しい。運動はその内的本性がどのようなものであるにせよ、異論の余地なき實在となる。全体のどの部分が動いているか言うことができないことは認めよう。それでもなお全体において運動は存在する」(329)。

この考察は後に見ることになる思考実験のなかで重要なものになる。物質界が全体的な状態変化であると推定するとき、ベルクソンは自らの身体運動が呈する運動の動性を辿ることを一つの根拠とするのである。

「私の身体」の例えば目が動いているのか、あるいはそれが捉える対象が動いているのかと問うことは、空間的な位置に基づいて問題を立てることである。ベルクソンは意識の経験において、身体感覚として内的な状態変化が現実的であることから、諸事物における諸性質の変化を感覚していることの現実性を考察している。ここでは身体における状態変化の意識への直接性を規範にして、感覚的諸性質における状態変化が類比的に肯定される。この観点からベルクソンは運動を「私の身体」と「私の外にある物質」との「関係」ではなく、一つの「絶対」として肯定しようとする²⁵

ベルクソンはわれわれの知覚を「私の身体」と「諸物体」との「関係」から解放し、物質的世界を全体として一つの絶対的な運動と捉えようとする。そこでその概念化が為されねばならない。そのためにはこの著作第一章の「純粹知覚」と同等の視点に再び立つことが必要だろう。ベルクソンは物体（身体）の固体性について再考することでこれを果たしていく。

III 「物質のある特定の諸部分において、いかに位置の変化が生じるのかではなく、全体において、いかに相の変化が成し遂げられるか」(332)、これが問題であり、この相の変化にまで「外的な変化」は概念化されなければならない。

知覚は日常的には、判明に縁取られた輪郭を持つ物質的諸対象をわれわれに呈示している。それらは相互に区別され、それぞれ独立的に存在しているかに見える。しかしこうした諸物体は知覚の原的な所与とは考えられない。まず知覚に与えられているのは「諸性質の体系」である²⁶。視覚と触覚に特徴的な様に、それぞれ表面において諸物体は隣接しており、そのなかに「真の中絶」は認められない²⁷。われわれの知覚の原的な所与は感覚的諸性質の連続性である。この連続性を破りそのなかに諸物体を区別するのは、われわれの生の実践的な諸欲求である。自らの生命を存続するというプラグマティックな要求に従う生物が

²⁵ 「自我における筋肉の諸感覚と、私の外にある物質の感覚的諸性質、いずれにおいても私は運動を、運動があるとしてだが、単なる関係としては捉えていない。運動は絶対的である」(333)。

²⁶ 「物体、つまり独立した物質的対象は、われわれにまず諸性質の体系として現れる」(332)。

²⁷ 「われわれが目を開けるや否や、われわれの視界全体は彩られ、諸個体は必然的に相互に隣接しているので、われわれの触覚は真の中絶に出会うことは決してなく、諸対象の表面あるいは稜を辿ることになる」(332)。

「感覺的實在」から諸部分を切り出すことで、知覚世界は諸物体へとブロック化される²⁸。「生命」の振る舞いへと注意を向けつつベルクソンは知覚にありうべき原的な連続性を考察しようとする。この歩みは「純粹知覚」を想定し、イマージュの総体のなかに行動の不確定性を置くことで意識的知覚を導出してきた第一章の進行を、いわば逆に辿り直すものである。ベルクソンがさらに踏み込んだ一步を示すのは、「行動の不確定性」との相関のなかで物質という全体の部分への縮減として知覚を見届けるのではなく、ただ全体をそのままに連続的なものとして認めようとする点である。つまりベルクソンは連続性を、運動として見極めようとする。

おそらくこの連続性は程なく相を変える。しかしなぜわれわれは、あたかも万華鏡が回されたかのように、端的に全体が変化したと、認めないのか。要するになぜわれわれは、全体の動性のなかで、運動している諸物体によって辿られた足跡を探すのか。一つの動的連続性 *une continuité mouvante* がわれわれに与えられている。そこではすべてが変化すると同時に留まっている。なぜわれわれはこの二つの項、永続性と変化を切り離し、物体によって永続性を、空間における等質的な運動によって変化を表象するのか。それは直接的直観の所与ではない(333)。

物質的世界の全体を相の変化として捉えるところに、四つの命題によって展開される一連の考察の頂点がある。それは『試論』で問われた「外的な変化」について、物質的世界を「一つの動的連続性」と捉えることで、そこに持続を認めることである。

通常われわれは物体に同一性を付与し、それ自体として恒久的な諸物体が変化していると考え。物体という動かないものを基体として、それを参照軸として固定化し、外的世界の変化を考えるのである。しかしこうした概念はベルクソンによれば、われわれの生の実践的な要求のなかで可能になる事柄である。そうであるなら、この要求とともに持ち込まれたものを知覚から差し引くことで、物質的世界の意識への原的所与として「一つの動的連続性」を考えることができる。物質的世界は、そのままに見るならば、それは全体的な相の変化である。この相の変化を、物体の位置の変化によって表象するのは、生の実践的要求に従ったものではあるが、「直接的直観の所与」ではないだろう。

そしてこうした概念には、物理学からの支持が得られるとベルクソンは考えていた。物

²⁸ 「われわれの諸欲求は光の束であり、感覺的諸性質の連続性に向けられ、そこに諸物体を区別する。…感覺的實在からこうして切り取られた諸部分のあいだにまったく特殊な関係を打ち立てること、これをまさにわれわれは生きると呼ぶ」(334)。

理学は物質について、それを観察する意識を度外視することで、利害関心を離れた場所において、その実像を具体的に考察しようとするものである。物理学が同時代の尖端において導き出していた諸帰結は、自らが構想する物質的世界の概念と重なりあうとベルクソンは考えていた。ベルクソン自身はここまでの考察において、いわば心理学的なアナロジーの手法で迫っているが、同じ結論に物理学のある者たちは辿り着いていたと見做すのである。

IV こうして次の命題が結論される。「实在の運動は事物の移行というよりも状態の移行である」。意識に「外的な変化」をベルクソンは、物質的世界についてそれを全体として状態変化するものと認めることで、「一つの動的連続性」として概念化し、それを持続と見做しうることを示している。

四つの命題の考察を通してベルクソンは、この著作第一章で「純粹知覚」の想定の下、「イメージの総体」と見做された物質的世界を、運動の概念から再考している。外部知覚から想像力を除外することで、分割されざる運動を知覚の直接的な所与として確保し、さらに生物として生きるために持ち込まれている諸欲求を知覚から差し引いて考えることで、物質的世界には連続性が回復される。この連続性は、われわれの身体と諸物体という固体性から解放された一つの全体の連続である。この様に想定された物質的世界の変化は、全体としての状態変化としてしか考えられない。こうした理念的な極限において、「一つの動的連続性」として物質的世界は描かれることになるのである。外部知覚においてわれわれは感覺的諸性質の変化を経験するが、その変化について、感覺する私の目が運動すると説明するにせよ、物理学が描く等質的な震動の諸継起であるとするにせよ、「何かが起こっている」のであり、このことから物質的世界が全体的な状態変化として持続していると考えることができる。

この「物質の形而上学」によって、物質的世界は持続として概念化される。そしてこうした概念を、ベルクソンは意識の経験としての持続のなかで改めて示そうとする。そのとき焦点化されるのがわれわれの外部知覚において感覺的諸性質をそれとして存立させると目される縮約としての記憶である。この記憶は形而上学的なものではあるが、われわれの意識の時間のなかの一つの限定された瞬間のなかで働いている点で現実性 *actualité* と関わるものであるだろう。「持続と空間」との区別は、本質的には空間であるような「等質的時間」がつねに介在してくる現実的な外部知覚のなかでこそ改めて見出されねばなら

ない。

ベルクソンは四つの命題を踏まえることで、意識に与えられている感覚的諸性質の異質性と科学がそこに分析する等質的諸振動との関わりについて、すなわち主観と客観の問題について、縮約という記憶の働きに注目することで、時間とのかかわりからの問題提起を試みていく。

主観と客観とに、それらの区別と結合とに関わる諸問題は、空間との関わりにおいてではなく、むしろ時間とのかかわりにおいて提起されねばならない (216-217)。

つまりベルクソンは『物質と記憶』第一章でイマージュの概念によって柔軟化させた観念論と実在論との対立を、こんどは縮約としての記憶を手がかりに「時間とのかかわりにおいて」問題を提起し直そうとするのである。この考察のなかで「等質的時間」を注意深く見つめながら、われわれに外的な変化について、意識に直接与えられたものから捉え直すことが目指される。そして上記の物質の形而上学の結論もそのなかで再発見されることになる。

6 時間とのかかわりにおける問題提起

縮約の所在について、科学と意識との連絡

この著作第一章において、光点 P の分析のなかでベルクソンは科学と意識とがイマージュの概念において一致すると述べていた。その立論の条件としてかけられていたのが、一方では「四つの命題」に見てきた運動の分割不可能性であり、他方では、縮約としての記憶である。ベルクソンは『物質と記憶』第四章でその主張を展開し、心身関係における主観性と客観性について、「時間とのかかわりにおいて」問題を提起しようとする。まず記憶の縮約はどこに認められるべきかが問い直される。その所在を感覚的諸性質の「内部」に求めることで、ベルクソンは科学の分析と意識の持続の立場との統一を図る。このことは科学の立論においても避けられないものであると主張される。

ベルクソンは、科学的な分析が前提とする等質的諸振動が、感覚的諸性質についての「客観的実在」であり得るためには、その諸性質のいわば「内部」に物理学も縮約としての記憶を認めていかねばならないと主張する。科学的分析は、感覚的諸性質の異質性を、計算可能な量的諸要素へと分解し、その要素間に因果的な秩序を見出そうとする。しかしこう

した操作は、その諸要素を性質の外部においてしまつては説明にならないはずである²⁹。感覺的諸性質についての機械論的な考察はその有効性を保証するためにこそ、等質的諸振動を感覺的性質の「内部」に認めねばならないことになる。そして諸振動と性質とのこのような関係を合理的に説明づけることを可能にするのが縮約の概念だとベルクソンは考えている。

したがって、これらの諸運動を内的震動の形でこれらの性質のなかに置かねばならないし、これらの震動は、表面的にそうと思われるほど等質的ではなく、これらの異質性は、表面的にそうと思われるほど異質的ではないと考えねばならない。そして、二つの項の相の差異をある必然性に割り当てねばならない。ほとんど無際限なこの多様性については、一つの持続のなかに縮約され *se contracter* ねばならない。諸瞬間へと分解するにはあまりにも緊密な持続のなかに (340)。

異質性として感覺される諸性質と、それらの諸性質の基体として自然科学が見出す等質的な振動との関係をいかに捉えるかという問題を、ベルクソンは縮約という記憶の働きから考察するのだが、この考察は自然科学とも共通するのでなければならない。ベルクソンは、ほとんど等質的な諸震動が縮約されることで感覺的諸性質の異質性が強調されると考える。つまり異質性に程度を認めることで、等質性をそれに包括しようとする。こうして意識と科学とは縮約の程度において連続させられる。諸性質の異質性と諸震動の等質性は、異質性の濃淡において把握され、科学と意識とは連絡をつけられたことになる。

つまりベルクソンは、等質的な諸震動の存在を、数的多数性の形式の下でそれを把握することを可能にするような質的变化として、諸瞬間へと自らを配分していくような持続と見做すということである。意識はただこの緩やかな持続を、凝縮しているに過ぎない。

例としては低音が挙げられている。音の例は、それが空气中を伝わる震動であるということから、性質と諸震動とが持続の緊張の程度なのだという主張にとっては親しいものであるだろう。確かに、低く重い一音が、次第に緩やかな震動へと分解し消えていく様子は、性質が自ずから諸震動へと分解していく運動でもありうることを、その時間的経験においてよく伝える³⁰。性質と震動とは時間的経験のなかで、同じ一つの過程の二つの相として把

²⁹ 「というのも、諸性質は一種の奇跡によってしかそれらの諸要素に付け加えられないし、予定調和によってしか諸要素とは対応しない」 (340)。

³⁰ 「われわれは知覚された性質がそれ自身で継起的で反復される諸震動へと分解されていくのを感じないだろうか」 (338)。

握されうる。そしてベルクソンは感覚されている諸性質と科学がその基体として見出す等質的な振動、これら二つの項を「身体」と「物体」のあいだの「関係」ではなく一つの運動として、「われわれの意識状態とわれわれから独立した実在を同時に把握する過程」(339)として理解する。この過程は事象の主観性と客観性がそこから派生してくるような経験の源泉であるだろう³¹。

「等質的時間」を媒介させるとはどういうことか

時間とのかかわりにおける主観と客観の区別と結合についてのベルクソンによる問題提起を見ていこう。まずベルクソンは「時間一般」において、諸科学に共有されている客観的な時間性の下で、自らが「縮約」という名の下に指示する事柄を提示している。こうしたベルクソンの所作は「等質的時間」の媒体の下で自らの立論をあえて展開することで、一方では読者の理解に便宜を図りつつ、しかしそうすることのどこに問題があるのかを浮き彫りにするものであるだろう。ベルクソンは物理学と生理学の知見を参照しつつ、記憶がわれわれの知覚の一瞬に縮約しているという等質的な諸振動の時間性を、「数的多数性」の形式の下に呈示してみせる³²。

赤色の知覚が例に取られる。物理学的には「赤色光線」は、一秒間に四百兆の継起的振動を行うものとされている³³。この数を理解するためには、その一つ一つを判明に区別するのに必要な意識の時間間隔を便宜的にでも定めておかねばならない。そこで生理学の知見が参照される。それによればわれわれが意識できる時間間隔は最小の場合、五百分の一秒ということである。そこで、四百兆の諸振動の一つを五百分の一秒の一つ数えると想像してみる。すると、すべての振動を数えるのに二万五千年以上かかることになる³⁴。こうして

³¹ こうした概念はW. ジェームスの純粹経験を想起させる。「感覺的諸性質の多少の差はあれ等質的な基体についてのわれわれの信念が根拠づけられるとすれば、性質そのもののなかで、われわれの感覚を超過する何かを、われわれに把握させあるいは見抜かせる一つの行為によってでしかあり得ない。あたかもこの感覚が気づかれつつも覚知されない細部を孕んでいるかのように」(339)。感覺的諸性質の等質的な基体についての信念は、「客観性」へのわれわれの信仰であり、自然科学に等質的な振動を基体として求めさせるものであるだろう。

³² この議論の含意が複雑なものとなるのは、扱われる事象が物質である限り、この形式は適合しないわけではないという点にある。「等質的時間」からのアプローチは、それが意識の持続の内側からの理解でないにしても、理論的な妥当性をまったく欠くかということ、そうはならない。

³³ 「一秒間に、赤色光線—最大の波長を持ち、したがってその振動が最も振動数の少ない光—は、四百兆の継起的振動を行う。この数について観念を持ちたいなら、私たちの意識がこれらの振動を数えられるように、あるいは少なくとも、継起を明瞭に記載することができるように、これらの振動を相互に十分に間隔をあげねばならない。そしてこの継起がどれくらいの日数を、月を、あるいは年を占めるか探究がされるだろう」(340)。

³⁴ 「ところでわれわれが意識を持つ空虚な時間の最小間隔は、エクスマーによれば、五百分の

「等質的時間」を媒介させることで、ベルクソンは記憶が感覺的性質に諸震動を縮約しているということを量的に提示してみせる³⁵。

しかし「こんなことが考えられるだろうか」(341)。

ここでは、われわれ自身の持続と時間一般とは区別されねばならない(341)。

単位時間による感覺的性質についての量的理解は、それがわれわれの意識の状態の時間性に関わるものである限り、そのままに受け取ることはできない。事柄が意識の持続に関わる以上、時間を分割することそれ自体について反省が為されなければならない

縮約と存在論的感情としての意識の緊張

『試論』からの問い、「われわれの外に、持続の何が、存在するのだろうか」(148)、この問いにベルクソンは二つの仕方で答えているように思われる。一方はすでに見た「四つの命題」において展開された「一つの動的連続性」としての物質的世界である。そして他方では、記憶の縮約という働きについての洞察に根ざしつつ、われわれとは異なるさまざまな諸事象を、持続の多様性として捉える観点である。この後者の観点は『物質と記憶』第四章における外部知覚論の一つの出口になるのだが、この著作以降のベルクソンの思考の方向性を示すに留まり、十分には深められていない³⁶。

「等質的時間」を媒介させ、諸科学の成果とともに想像力を働かせて、ベルクソンは記憶が知覚において「縮約」しているとされるものの時間性を、「数的多様性」の形式で展開してみせた。しかしこうした分析に決定的に欠けているのは、知覚されている赤という性質が、われわれの意識のある一つの瞬間において限定された仕方で出現していること、その限定性であり現実性である。そこで「等質的時間」を媒介した縮約の時間性の量的提示

一秒に等しい。それでも、われわれがこれだけ短い多数の間隔を続けて知覚できるかは疑わしい。けれども無際限にそれらを知覚できるとしてみよう。想像してみよう。一言でいえば、ある意識を、どれも瞬間的で、区別するために必要な五百分の一秒によって単に相互に分離された四百兆の振動の行列に立ち会う意識を。ごく簡単な計算では、この操作を成し遂げるのに、二万五千年以上必要になるだろうことが示される」(341)。

³⁵ 「こうして、われわれによって一秒間に感じられる赤色光線の感覺は、それ自体では、できるだけ時間を節約した上でわれわれの持続に展開すれば、われわれの歴史の二百五十世紀以上を占めるであろうような諸現象の継起に対応する」(341)。

³⁶ 縮約という記憶の働きに伴う、意識の緊張という存在論的感情のなかに諸持続の多様性が示唆されている。諸持続の多様性は、生命論を手がかりに『創造的進化』へ向けて発展していく。ここにはその初発的な形態が着想されている。

は「この持続」を考えているものとは理解できない。

われわれの持続、われわれの意識の知覚する持続では、ある与えられた間隔は限られた数の意識的現象を含みうるに過ぎない。この内容が増加すると考えられるだろうか。またわれわれが無際限に分割可能な時間について語る時、われわれが考えているのはまさにこの持続なのだろうか (341)。

意識のある時間に現象する性質を、等質的な諸振動に還元できると認めることは、それらの量的な振動から意識における現象を再構成できると考えることである。主観と客観との関係は、双方向的に還元可能なものであるだろうか。時間とのかかわりにおいて問題を立てようとするときに浮かぶこの疑問のなかに、ベルクソンの「持続と空間」の区別がある。分割するということが空間と持続とでは異なってくる。

空間は無限可分性の図式である。それはどこまでも分割可能であり、その下で考察される限り分割される対象は本性を変えない³⁷。先の考察では感覺的諸性質を諸震動へと分割したが、それは感覺的諸性質を分割しても本性を変えないものとして扱うということを前提する。つまり物理学と生理学を利用した感覚についての時間性の呈示は、空間において考えられていたことになる。しかしそこで諸振動として分割されるものは感覺的性質である。性質は現実的に生きられる意識にある時間をかけて現れるものである。それを空間という媒体に置き分割するならば、その結果として示される莫大な諸震動はもとの意識の時間経験とは本性を変えたものとなるだろう。つまり分割ということが空間と持続ではまったく異なる。われわれの意識の持続は、分割の行為が分割に関わる。そこでは分割の行為が分割される対象に遡及的に効果を及ぼすことになる。つまり分割することが分割されるものの持続を引き延ばしてしまう。

しかし持続については、まったく事情が異なる。われわれの持続の諸部分は、われわれの持続を分割する行為の継起的諸瞬間と一致している。われわれが諸瞬間

³⁷ 「空間が問題である場合、いくらでも分割を進めることができる。分割されるものの本性はそれで何も変わるところがない。そのわけは、空間は定義上、われわれの外にあるからだ。空間の一部分は、われわれがそこを占めることを止めても、依然存続するように見えるからである。だからわれわれは、それを分割せずにおいたところで、それは待っていてくれそうであること、想像力を新たに働かせれば、それをまた分解するだろうということを知っている。またそれは空間であることを決して止めないから、いつも並列を含み、したがって可能な分割を含む。もともと空間とは、つまるところ、無限可分性の図式に他ならない」 (341)。

をわれわれの持続のなかに固定するのと同じだけ、持続は諸部分を持つ。またもし、われわれの意識が、ある間隔のなかに限られた数しか要素的行為を認め得ず、分割をどこかで停止するとすれば、可分性もまたそこで停止するのである。…われわれの持続の分割をさらに押し進めようとするその同じ努力が、その分だけこの持続を長くするだろう (341)。

ベルクソンは分割を巡る事情に着目しつつ、空間と持続とを区別する。分割するというものを、われわれの意識について想定すると、分割は有限になる。われわれの意識の時間は分割されるけれども、そこで分割は分割するという行為に依存的であり、可分性も行為とともに有限である。そして、分割可能性が行為と一致するという事は、分割される対象としてのわれわれの持続は、われわれによって分割の行為が為される限り、伸び続けることになる。

ではどうすれば時間とのかかわりにおいて主観と客観を巡る問題を新たに提起することができるだろうか。「等質的時間」あるいは「時間一般」から考察を始めることはできない。そこでベルクソンは、われわれの意識が何かを縮めているということに基づいて意識に対して客観的な諸事象、「自然」について、それらが時間的な存在であることを認めていく。

そして、それでもわれわれは知っている。無数の現象が、われわれがそれらの現象をкаろうじていくつか数えている間にも、次々に後を継ぐことを。このことをわれわれに語るのは、物理学だけではない。諸感覚の目の粗い経験もすでにこのことをわれわれに見抜かせている。われわれは自然のなかにわれわれの内的諸状態の継起よりも遥かに速い諸継起を感じている。それらをどう理解するか、この持続、その容量があらゆる想像を超過するこの持続とは何か。それはわれわれの持続ではない、確かである。…実際、持続の唯一のリズムが存在するのではない。異なる多くのリズムを想像することができる。より遅くより速く、それらのリズムは意識の緊張のあるいは弛緩の程度を測っている。それによって諸存在の系列におけるそれぞれの場所を固定するだろう (342-343)。

感覚的経験に立ち戻ることでベルクソンが意識するのは、「われわれの内的状態の継起よりも遥かに速い諸継起」の存在である。それらがわれわれよりも遥かに速いサイクルで継起していることは、われわれが縮約しているということのなかで、緊張の感情において知ら

れることになるだろう。ベルクソンは「それはわれわれの持続ではない」と認める。そしてそれらの存在を「異なる多くのリズム」として認めていくのだが、その根底にあるのは縮約という記憶の働きを通して意識される緊張の感情である。縮約しているということのなかでベルクソンは、「われわれの内的状態よりも遥かに速い諸継起」を、縮約の程度がわれわれとは異なる持続として捉えている³⁸。それらは物理学が明らかにしている非常に長い期間として表されるような、緊張の程度と考えられるのである。こうして科学と意識とは、空間と持続という本質的な違いをあいだに挟みつつも、持続の程度から共通の土台を用意されることになる。

次いでベルクソンは、縮約という記憶の内側から、物質の持続を思考実験のなかで改めて提示していく。そこでは、科学と意識とが極限においては一致すること、そして意識は物質の持続を縮約している点で物質とは区別されることが明らかにされる。この思考実験のなかにベルクソンの直観はあるだろう。

7 イマージュの持続

つまり、われわれは知覚の行為のなかで、知覚そのものを超える何かを捉えるのだが、だからといって、物質的宇宙はわれわれがそれについて持つ表象と本質的に異なってもいないし区別されるのでもない。ある意味では、私の知覚はまさしく私の内にある。というのも知覚は、私の持続の一つの瞬間に、それ自体では、数えることのできない多数の瞬間に分割されるようなものを縮約している *contracter* のだから。しかし、あなたが、私の意識を消し去っても、物質的宇宙はそれがあったがままに存続する。あなたは諸事物に対する私の行動の条件であった持続のこの特殊なリズムを捨象しただけなのだから、これらの事物はそれら自身へと戻り、科学が区別するのと同じだけの瞬間に区切られる。そして感覚的諸性質は、消え失せることなく、比較にならないほど多く分割された持続のなかに広がり、溶かされる。こうして物質は無数の諸震動に解消され、これらはすべて中断なき連続のなかで結ばれ、互いに連帯しており、それぞれ戦きの様にあらゆる方向へ走る。一要するにあなたの日常的な経験の非連続な諸対象を互いに結びつけ、つづいてそれらの諸性質の不動の連続性をその場で震動に解消してみな

³⁸ すでに述べたことを補完していえば、アナロジーに基づいて構想される持続の多元論への一歩であり、「われわれの外部に持続の何が存在するのか」という問いが新たに向かう方向性を示している。この方向性は「形而上学入門」へと引き継がれる。本稿第三章参照。

さい。これらの運動を下で支える分割可能な空間からあなた自身を解放し、これらの運動に注視して、もはや動性しか考えないように、あなた自身が行う諸運動のなかにあなたの意識が捉えるあの分割不可能な行為しか考えないようにしなさい。そうすれば物質について、おそらくあなたの想像力には骨の折れる一つのヴィジョン vision を手にすることになるだろう。だがそのヴィジョンは純粹で、外的知覚のなかで生の諸欲求がそこにあなたに付け加えさせたものから解放されている。一さて、私の意識を復帰させ、それとともに生の諸欲求を復帰させてみなさい。すると、非常に長い間隔に渡って、そしてそのつど諸事物の内的歴史の莫大な期間を渡りながら、ほとんど瞬間的な眺め vues が得られるだろう。この眺めはこんどは絵のように、その際だった色彩は無限の反復と要素的变化を凝縮 condenser している (343)。

ベルクソンはここで読者に呼びかけているのだが、不思議な思考実験である。「私の意識」を、おそらくこの哲学者の意識を除去するよう読者に要請しているのだから。われわれはこの箇所のある部分にこの著作第四章での考察を根本的に動機づけるベルクソンの「直観」が提示されていると考える。それは罫線で差し挟まれた「要するに」と始まる部分である。この部分をあいだに挟んでこの箇所は三つの部分に分けられるだろう。

まず、外部知覚における主観と客観の関係を考察した場合、そこに本質的な差異はないことが確認される。この考察の焦点になるのは縮約の観念である。知覚することは、無数の瞬間に分たれるような時間性を、意識の瞬間に縮約することである。つまり知覚は自らとは異なる時間性を凝縮させているだけなのだから、「私の意識」が取り去られたとしても、「物質的宇宙」の「表象」はただ科学が分析して示すような諸振動へ立ち返るのみと考えられる。こうした想定は、この著作第一章で為された「純粹知覚」の想定と同等のものである。異なる点は、縮約という記憶の働きから考察することで、時間とのかかわりにおいて物質的世界の全体が思考されていることにある。この新たな観点において、「イメージの総体」として想定されていた物質的世界が、「四つの命題」を通して概念化されていた「一つの動的連続性」として露わになる。そこで諸振動は中断なく連続し全方位へ伝播しているだろう。

次いでベルクソンは「要するに」と括られた部分で、この思考実験へとわれわれが近づく可能な仕方を示している³⁹。そこには後の論文「形而上学入門」においてはっきりした形

³⁹ 罫線で括られた箇所にウォルムスは着目し、この箇所を出発点に「形而上学」についての彼

で提示される「直観」の手法が垣間見られる。その手順は次の様なものである。まず、日常的知覚経験から始めて、そこに知覚されている諸対象を「互いに結びつけ」る。表面と稜線によって区切られた形ある物体的世界から、形を背景に沈め諸性質の連続しか残っていないような知覚世界への転換。次いで、こうして現れる諸性質について、それらがわれわれの記憶の縮約によって「不動」化されているものだとすれば、この縮約を緩めることで、その場で諸性質は諸震動へと転換されうるだろう。そしてベルクソンは空間から身を離すよう要求し、諸震動の動性に思考の注意を向けることを要求する。おそらくここからがベルクソンの直観になる。それは「一つの動的連続性」という物質の实在概念をその運動の動性において、つまり持続として把握する試みである。持続は、科学的分析するような諸震動の莫大な数の期間のことではない。それらの震動がそうした時間性に渡るようなものであるにせよ、その時間性の本質は諸震動が呈する運動の動性、諸震動をそれぞれ瞬間的なものとして現わしている「移行」にある。この「移行」としての「動性」を物質の純粹持続と呼んで差し支えないだろう。こうした「動性」を掴むにはどうすればよいか。それはわれわれ自身が行っている運動のなかで、意識されうる「分割不可能な行為」を考えれば可能である。つまり、物質の形而上学的考察のなかで見出された「一つの動的連続性」を持続として捉えるには、われわれが自らのなかに意識しうるわれわれの「分割不可能な行為」を考えよ、ということになる。厳密に言って、極限化された外部知覚を思考するわれわれにはもはや「身体」と呼べるような定点は与えられていないだろうし、その時、われわれの身体運動も「一つの動的連続性」のなかに分散しているだろう。それでも、その極限の動性は、われわれの身体運動のなかに意識しうる行為の単一の動性を考えることで、同じ傾向を持つものとして把握することができる、とベルクソンは考えるのである。ここにベルクソンの直観がある。

こうして物質的世界の権利上のヴィジョン vision が更新される。「純粹知覚」の想定において物質的世界は「イメージの総体」としてその「瞬間的で直接的なヴィジョン」を与えられていた。ここでベルクソンはいわば純粹イメージへと到達することで、物質を持続として捉えるのである。「イメージの総体」と異なるのは、それが動的なヴィジョン

の注釈は構成されている。「最初に、連続性を回復しなければならないだろう。次いで連続性はそれ自体質的なものとして与えられるだろう。しかし再構成された諸性質の連続的な光景は諸運動に《分解》されねばならない。運動はそれ自身、主体による運動の内的な意識のモデルに基づいて、分割不可能な行為の表現として把握されねばならない」。Worms: *ibid*, p. 213. ウォルムスはこの箇所に総合する仕方、四つの命題における記述を展開していく。対してわれわれは四つの命題における記述を縮約の直観に向けて用意された省察として考えている。

であるということ、つまり物質的世界が持続の相の下に見られているということである。これが『物質と記憶』においてベルクソンが到達していた物質の持続であるだろう。

最後の部分で、「私の意識」が復帰される。それとともに物質的世界のなかに現実的な眺めvuesが回復される。「諸事物の内的歴史の莫大な期間」が意識の諸瞬間へと縮約される。それらはブロック化されて多様な眺めとなり、意識に行動の足掛かりを与える。この眺めは諸他のイマージュの「絵のような」多様性として、われわれに親しいこの自然の姿を現すだろう。つまり、この著作第一章冒頭を始めるにあたって述べられていた感覚的世界が与えられることになる⁴⁰。おそらく「諸事物の内的歴史」が「縮約」されているという点に、外部知覚において客観と主観の区別に本質的な差異を認めないベルクソンの、新たな世界像が懐胎されているように思われる。それは緊張の程度を本質的な差異と見做すことから構想される諸持続の現実的多様性としての自然である。しかしその展開には新たな議論の場が必要となるだろう。

リキエの研究は、先のプラドの現象学的考察を踏まえ、さらに進んで第四章のこの箇所「ベルクソンの還元」を見出している⁴¹。プラドの解釈は第一章のなかに「ベルクソンの還元」を見出すものであった。リキエは、「イマージュそれ自体」が「その存在論的規定」へと送り返されるこの場面をもって、すなわちわれわれが純粹イマージュとして跡づけてきた物質の持続が発見される段階をもって、「ベルクソンの還元」としている。この解釈は、意識の持続からあらゆる事象を考察する態度のなかにベルクソニズムの本質を置く点で正しいだろう。しかしわれわれは、「縮約」という記憶の働きから出発することでベルクソンが「一つの動的連続性」を持続として「直観」しうる地点に立ったと考える。この観点からは再びプラドの解釈を積極的に取り上げることができるだろう。それはベルクソンが「縮約」という記憶の働きについて、それが「行動」のために為されると考えている点にある。プラドは生成に絶対的に新しいものの出現を見ることと相関的に、ベルクソンの哲学的な考察の領野が開かれると考えていた。「縮約」について、それが行動に引き継がれるために為されているとベルクソンが考えていることを考慮すれば、この箇所での考察にも、感覚と行動とから構成される現実的生成へのベルクソンの視点が働いていると見做すことができる。しかしその議論は次章以降に引き継がれる。最終的には『創造的進化』のなかで論ぜられるべき問いとなる。

⁴⁰ 「私はイマージュに直面している。この言葉のとりうる最も漠然とした意味において、私が感覚を開けば知覚され、また閉ざせば知覚されないようなイマージュである」(169)。

⁴¹ C. Riquier: *Y a-t-il une réduction phénoménologique dans Matière et mémoire ?* in, *Annales bergsoniennes II*, Paris, 2004, p. 284.

結論

ベルクソンの外部知覚論は、物質的対象をイメージとすることから始まる。イメージは常識の観念であった。この観念が徹底化され、物質がイメージの総体とされることで、物質的世界は全体として静態的に概念化される。純粹知覚は、知覚から記憶を除外し、時間性を取り除いた「瞬間的で直接的なヴィジョン」の想定である点で、物質の概念であるイメージの総体と一致する。そこで知覚は物質と全体と部分の関係にあることが示される。しかし「純粹知覚」と「イメージの総体」はいずれも権利上の概念であり、経験に論拠を持たない。経験とはベルクソンにとって意識の経験でありそれは持続である。「純粹知覚」と「イメージの総体」がベルクソンによって持続の相の下に思考されている可能性は、縮約という記憶に、感覺的諸性質をそれとして存立させている意識の時間性に関わる概念に見出されるように思われた。そこで焦点として浮かび上がるのが縮約としての記憶の働きである。

われわれは『物質と記憶』第一章と第四章の関係を、縮約を焦点に描き出すことを試みてきた。第四章では、まず物質的世界は「一つの動的連続性」として概念化される。この概念は、縮約という記憶の働きを手がかりにした思考実験のなかで、その運動の動性を把握されることで、持続として見届けられている。それは縮約を緩めた上で現出する「一つの動的連続性」の動性を、われわれの身体運動の傾向性においてベルクソンが捉えることによって為される。ここには『試論』から持ち越されたわれわれの外部の持続という問いに答えるものがある。

しかし、記憶の縮約という働きに注目することで、また別の仕方でベルクソンがわれわれの外部の持続を構想していることが浮き彫りになった。それはわれわれとは異なるさまざまな事象を持続の多様性として捉える観点である。

第二章 縮約の概念について

序

ベルクソンは主観と客観、精神と物質の区別と統一について、「時間とのかかわりにおいて」問題を提起すると述べていた。前章ではこの問題提起の焦点に縮約の概念があり、その考察を通して、『物質と記憶』第一章の知覚の純粹概念と物質概念とが持続として見届けられることを確認した。

本章では「時間とのかかわりにおいて」、精神と物質の区別と統一がいかんにか思考されているかを確認し、この問題提起とともにベルクソンが構想する持続の存在論を理解していく。さらにこの思考の道筋が、最終的にこの現実的世界の多様性を持続として思考しうる哲学的な領野を開いていること、これを明らかにすることが本章の目的である。

まず、『物質と記憶』で心身関係の区別と統一がいかんにか構想されるかを確認する。その考察の基盤にあるのは縮約としての記憶である。ベルクソンはこの問題の考察を通して、意識の緊張の程度の観念から、存在一般を持続の相の下に理解する存在論を構想している。そしてこの構想は自由と必然について、それらの対立ではなくむしろ浸透をベルクソンに考えさせることになる。そのとき改めて生物が生成の問題として焦点化される。われわれはこの最後の観点を外部知覚の問題が辿り着いた新たな問題として捉え、そのなかで縮約としての記憶が、『創造的進化』における生成あるいは時間の問題へと展開していく過程を浮き彫りにしたい。

1 縮約の概念を巡る諸解釈について

ベルクソンによる心身関係についての「時間とのかかわりにおける」区別と統一をまず確認しておく。

精神は、純粹知覚の行為のなかで物質に重なる *se poser sur* ことができ、したがって物質に結合し *s'unir*、そしてにもかかわらず根本的に物質から区別される。そのときでさえ、精神は記憶 *mémoire*、すなわち未来のための過去と現在の総合であり、この物質の諸瞬間を利用するために、そしてその身体との結合の存在理由である行動によって顕われるために縮約する点で、区別される (354)。

統一は純粹知覚において知覚が物質と「重なる」点にある。前章でベルクソンの思考実験のなかに見届けた「直観」を思い起こそう。われわれが自らの記憶の縮約を緩めるとする。そのとき自らの身体的運動のなかには非常に緩やかではあるが単一な行為が意識される。その動性、傾向性を把握することで、同じ傾向性を持つものとして物質的世界全体を状態変化としての「一つの動的連続性」として「直観」しうるのであった。したがって精神はこの点で物質に重なりうる。

では区別はどこにあるのか。「純粹知覚」における統一を確認するのは縮約としての記憶を、いわば内側から緩めていくことにおいてであった。そこで「純粹知覚の行為」として見出された動性は、「そのときでさえ」記憶であることを止めない。記憶は「未来のための過去と現在の総合」である。縮約しているということに立ち返れば、それによって「諸事物の持続の継起的諸瞬間」が「感覺的性質」として現出しているのだから、客観と主観との区別はそこでつけられていることになる。

これがベルクソンによる「時間とのかかわり」における心身関係の区別と統一の理解である。そしてこの理解は持続として諸存在全般を考察する次元を開いている。縮約という事柄自体を反省することで、そこで縮約されているもの、そして事象のすべてを緊張の程度において捉える観点が開かれる。これはあらゆる事象を持続の緊張の程度として構想する、持続の思想における存在論的領野の開示となる。

空間的な区別にわれわれは時間的な区別を置き換える。二つの項（精神と身体）はそれによってより結合できるだろうか。第一の区別は程度を含まない。物質は空間のなかにあり、精神は空間の外にある。それらのあいだに可能な推移はない。反対に、精神の最も控えめな役割が諸事物の持続の継起的諸瞬間を繋ぐことであるならば、この働きのなかで精神が物質と接触し、この働きによってまず精神は物質から区別されるのであれば、物質と精神、完全に発達し、たんに不確定なだけの行動のみならず理性的でまた反省的な行動を備えた精神とのあいだに、無数の程度が考えられる（355）。

「時間とのかかわりにおいて」精神と物質の、主観と客観の区別と統一を理解することで、われわれは、両項についてそれぞれを隔絶した体系として思考する必要がなくなる。「時間的な区別」の下で精神と物質とは意識の緊張の程度として、それぞれを緊張の程度の極限に見出しうる。まず物質については、「諸事物の持続の継起的瞬間」はそれ自体において、

持続の緊張の程度が極めて緩やかなものと見做されうる。

そして精神について、その最も低位なものを生物に見出し、その発現を「行動の不確定性」に見るならば、その不確定性は外部知覚において感覚的諸性質を縮約し知覚していることとともに認められる。ベルクソンは『物質と記憶』第一章において、「行動の不確定性」としての生物を物質界に措定し、それとともに受容される作用が「選択」されることに「意識」の始まりを、「すでに精神を告知する」ものとして認めていた（188）。ベルクソンはこうした「たんに不確定なだけの行動」を用意するために物質の諸瞬間を縮約することと、いっそう高次の精神の働きを、縮約の程度において同じ地平の下に理解する。つまり「理性的でまた反省的な行動」に精神的行為を見るならば、それを用意するのも縮約としての記憶と見做しているということになる。こうして精神から物質まで諸存在を持続の緊張の多様性として理解する存在論が可能になる。

しかしここで縮約の所在の理解が問題になる。「理性的で反省的な行動」を用意するものとして縮約としての記憶を認めるなら、そのとき縮約されているものは、外的諸事物の諸瞬間ではなく、意識の内的歴史の諸瞬間であるはずである。つまり『物質と記憶』第三章で考察される「純粹記憶」という過去一般の領域において縮約としての記憶が働いていると見なければならぬことになる。だがベルクソンは純粹記憶について、明示的にそこに縮約が働いていることを述べてはいない。

この疑問について示唆的な理解を示しているのがドゥルーズである。後述するように、彼は諸事象について持続の緊張の程度から構想される存在論をベルクソニズムの核心と見做していた。縮約としての記憶を、彼はベルクソンが表だって述べていない純粹記憶の領域に認めていく。それによりドゥルーズは精神を「心理的反復」として、物質を「物質的反復」として、それぞれ縮約としての記憶から導き出される「反復」の概念の下に捉える。こうした観点からドゥルーズは、物質から精神まで意識の緊張の程度として一望する存在論に統一的な理解を与えている。

ドゥルーズの言う「物質的反復」は、われわれが前章で確認してきた、持続の相の下に見られた「一つの動的連続性」としての物質の時間性を、「反復」として定義するものである。物質の状態変化を縮約の程度として考えれば、それは非常に緩やかでほとんど変化が見られないものである。何も新しいものを生み出さないたんなる現在の反復として物質の時間性は捉えられる。他方で「心理的な反復」は精神について言われるのだが、その理解がまずわれわれの課題になる。ドゥルーズによる示唆とともに彼が指示するベルクソンのテキストを辿りつつ、われわれは「性格」、あるいは『創造的進化』の議論を先取りして言

えば「人格」という概念を差し挟むことで、「心理的反復」として示されているものを具体的に考えてみたい。

次いでウォルムスによる縮約の理解を取り上げる。彼は縮約としての記憶を、「純粹記憶」と「身体の記憶」を総合する「第三の記憶」として解釈している。彼の解釈とともに「現在の意識」がすでに記憶であると述べるこの著作第三章のベルクソンの考察が問題になるだろう。

いずれにせよ、ベルクソンの考察のなかで縮約が、それ自体「潜在的」に目立たない仕方で働いていると理解している点では、ドゥルーズもウォルムスも共通している。われわれも「縮約としての記憶」のこうした位置づけについては立場を同じくするが、われわれは『物質と記憶』の末尾から結論に至る考察のなかで、生物にベルクソンが自らの思考の新たな問題を見出していることに注目し、その観点とともに縮約の概念を、未来との関わりにおいて捉えてみたい。

2 『物質と記憶』の記憶理論の概略

縮約は記憶の概念である。したがって『物質と記憶』の記憶理論、つまり第二章と第三章の議論のなかで可能な位置づけを問い直すべきである。まずベルクソンの記憶理論の概略を確認しておく。

日常的な知覚経験のなかで、われわれは記憶の働きそれ自体に注意を払わない。例えば思い出せない人の名前を思い出そうと努力するときに意識する程度である。しかし顕在的ではない仕方で、それと気づかれることなくつねに記憶は存在し、われわれの経験全般に渡って働いている。ぼんやり見えてきた人影をあの人だとわれわれに認めさせるのは、与えられたその知覚に記憶のイメージが重なるからである。われわれが自転車に乗ることができるのは、二輪にまたがるわれわれの身体的挙動の不安定さを統御する感覚—運動機構が、自動的に均衡を保ち続けるまでに至り、習慣として身体に記憶されているからである。

ベルクソンは『物質と記憶』第二章の冒頭で記憶を二つの形式に区別している。一つは「運動の諸機構」であり、一つは「独立した記憶souvenir」である⁴²。記憶は身体的な習慣としての記憶とイメージの記憶に分けられる。前者の記憶は習慣化され身に付いた記憶

⁴² 「過去は区別される二つの形式の下で存続する。1 運動の諸機構のなかで 2 独立した記憶 souvenir のなかで」(224)。

である。われわれは身体において「過去の経験を演じている」⁴³。

対して後者の記憶がわれわれが通常理解している記憶、「過去の経験のイメージ」である。こちらが「真の記憶mémoire」である⁴⁴。ベルクソンはこの記憶と知覚のあいだに段階的な違いではなく、本性の差異を見出している。ベルクソンは現在の知覚が次第に弱まっていき過去の記憶になるとは考えない。知覚と記憶はそもそも本性的に異なる存在である。そこでベルクソンは記憶の発生を、現在と同時と考えることになる。現在の知覚が時とともに過去の記憶になっていくとは考えない以上、記憶が生じるのは現在とともにであると考えるのは、理論的に妥当する考えである。ベルクソンは記憶が現在の知覚とまったく同時に二重化的に形成されると考える。現在はずねに知覚と記憶の二つに分岐していき、出来事の進展とともに過去が完全に保存されていく⁴⁵。この記憶が、「イメージとしての記憶images-souvenirs」の形式において、「われわれの日常生活のすべての出来事を、それらが展開するにつれて記録する」(227)。この記憶が真の過去の記憶である。

意識と共外延的であり、われわれの諸状態のすべてをそれらが産出されるにつれてそれぞれ順に並べ、保持する。それぞれの事実にその場所を与え、したがってそれぞれの事実にその日付けを標し、第一の記憶の様に、絶えず再開する現在のなかでではなく、決定的な過去のなかでまさに現実的に動いている (292)。

ところで、われわれの知覚的経験を再認の構造として見るならば、『物質と記憶』第一章で外的対象そのものとされたイメージ、外部知覚における直接的所与が再認に寄与するものは極めて僅少であるだろう。ベルクソンは再認について次の様に考える。外的対象の知覚はわれわれに行動のための運動の図式を与える。これを枠組として過去の経験が参照される。そして記憶はイメージとして現実化しその枠組にはまり込んでいく。再認は、知覚をそれに類似した記憶のイメージによって「二重化」(247) すること、あるいは「反射」(248) することと考えられる。

記憶が参与することで形成される再認の構造を、ベルクソンは閉じた回路として構想している。注意を伴う再認において、知的な注意が働くそのつど、対象と記憶が形成する回

⁴³ 「記憶というよりむしろ習慣であり、われわれの過去の経験のイメージを思い出すのではなく、われわれの過去の経験を演じる」(292)。

⁴⁴ 『物質と記憶』第一章で知覚を純粹化するために仮定された記憶の除外の二つの想定のものである。

⁴⁵ cf. Le souvenir du présent et la fausse reconnaissance in, *L'Énergie spirituelle*, p. 914, p. 917-8.

路は全体的に作り替えられていく。『物質と記憶』第二章には、この回路が独特な仕方で図案化されている。その回路図には、外的対象についての精神の注意的な反省的な働きに関する記憶の構造が示されている。反省はその語義的な意味において反射である⁴⁶。そしてこの回路図において、ベルクソンは縮約としての記憶を想定しているとドゥルーズは見做している。

3 ドゥルーズによる縮約解釈の展開

縮約の解釈から差異と反復の存在論へ

この回路の構造のなかに、ベルクソンが縮約としての記憶を想定しているというのがドゥルーズの指摘である。ここでは彼の一九五六年の論文「ベルクソンにおける差異の概念」⁴⁷と一九六六年の論文「ベルクソンの哲学」⁴⁸の両研究における示唆的な理解を、ベルクソンのテキストと突き合わせ鑑みることで展開しておきたい。

まず、ドゥルーズが解釈の観点を、『物質と記憶』第四章における持続の一元論的統合の場面に置いていることを確認しておく。この点にドゥルーズによる縮約解釈の重点がある。彼は縮約としての記憶に注目することで、差異と反復の概念によってベルクソンの形而上学の全体像を描き出して見せる。

ドゥルーズのベルクソン理解は差異の概念とともに始まる。彼はベルクソンの根本思想である持続を「それ自身において異なるもの」⁴⁹と解釈するのだが、この解釈を可能にするのは、縮約としての記憶についての彼の理解である。「差異は、まさしくその起源において

⁴⁶ 「知覚はたんに精神によって集められ、また練り上げられさえする諸印象のなかに存するのではない。事情がこうしたものであるのはせいぜい、受容されるや否や消え失せ、われわれが有益な諸行動に分散させる諸知覚に関してだけである。けれども、どんな注意的な知覚も、語源的な意味での、真の反射を前提している。反射とはすなわち、能動的に創造されたイマージュ、対象に類似するかまたは同一的なイマージュの外的投影である。そのイマージュは対象の輪郭に象られに来るのだ」(248)。

⁴⁷ Gilles Deleuze: La conception de la différence chez Bergson in, *Les études bergsoniennes vol. IV*, Paris, 1956, p. 77-112. 特に一〇四頁から一〇五頁に渡って示唆される解釈を参照。なおこの論文には優れた英訳があり、いくつかの箇所ですその読解に従った。Bergson's conception of difference, translated by Melissa McMahon in, *The new bergson*, Manchester University Press, 1999, p. 42-65.

⁴⁸ Gilles Deleuze: *Le bergsonisme*, Paris, 1966. 特に第三章を参照。邦訳『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、法政大学出版局、一九七四年。なおわれわれのドゥルーズによるベルクソン解釈は、檜垣氏による研究を全般的に参照している。檜垣立哉『ベルクソンの哲学』勁草書房、二〇〇〇年。

⁴⁹ “la durée, c'est ce qui diffère avec soi”, Deleuze: 1956, p. 88. (英訳四八頁)。「自ら差異化するものは、まず自己において異なるものであり、すなわち潜在的なものである」。Deleuze: *ibid*, p. 97. (英訳五四頁)。

またこの起源としての行為において、縮約である」⁵⁰。縮約としての記憶を、差異のそして持続の根本的な概念とすることで、ドゥルーズは『物質と記憶』第四章でのベルクソンによる「意識の緊張の程度」における持続の存在論を捉える。彼はこの存在論における精神と物質という二つの極限を、それぞれ「差異はなおも反復であり、反復はすでに差異である」⁵¹というテーゼに要約する。精神は持続として、すなわち「それ自身における差異」として、しかし「反復」である。こうした理解のためには、記憶を「それ自身における差異」と見做しうる観点が必要になる。そしてこの概念化の条件に「縮約としての記憶」が働いているとドゥルーズは見るのである。簡単にまとめれば、「縮約としての記憶」が純粹記憶を全体的に反復することで、記憶を「潜在的共存」へともたらし、「それ自身において異なるもの」にしているという理解である⁵²。

ドゥルーズによる縮約解釈を展開していく上で、われわれの側から一つ差し挟みたい理解がある。それは「意識の諸平面」の概念を行為の観点から捉え直すものである。意識の諸平面は、これから見るように、縮約としての記憶によって可能になる純粹記憶の自己共存を表わす概念である。われわれは行動との関わりにおいて意識の諸平面を「性格」として理解してみたい。それによりわれわれはドゥルーズによる縮約の理解である「潜在的反復」の概念を、現実性に引きつけて理解する。そうすることでわれわれは、ベルクソンが精神についてそれを「理性的で反省的な行為」を為すという点において捉えていること、そしてこの観点からベルクソンが精神を「意識の緊張の程度」において理解していることを捉え直し、ドゥルーズ独自の観点から離れ、ベルクソンのテキストへ立ち戻ることにする⁵³。

⁵⁰ 「実際、われわれは差異が、まさしくその起源においてまたこの起源としての行為において、縮約であることを理解した」。Deleuze: *ibid.*, p. 104. (英訳五八頁)。

⁵¹ *ibidem.*

⁵² ここではドゥルーズの差異の論理的なベルクソン解釈には立ち入らない。テーゼの後半、「反復はすでに差異である」、これは物質について言われる反復と差異である。その理解を示しておこう。物質は、最も低位の持続と考えられる。それは反復、要素的震動のたんなる反復である。時間の観点からみた場合、物質は一つの震動が過ぎ去ることで新たな震動が現れるような繰り返しとして理解される。それは絶えず現在を再開している純粹な反復である。この「反復はすでに差異である」。つまり、先立つ瞬間が過ぎ去ることでしか次の瞬間が現れないという点で、相互外在性としての差異を示すものでもある。相互外在的な差異を示す反復として物質は理解される。精神について、「差異はなおも反復」であるといわれることについては、本節全体を通して理解していく。

⁵³ 「意識の緊張の程度」として物質から精神までを持続として捉えるベルクソンの存在論について、縮約としての記憶を焦点に高度な解釈を提示したのは、ドゥルーズである。純粹記憶のなかに縮約としての記憶を見出していく読解は、彼の他に例がない。その解釈に導かれながらわれわれはベルクソンのテキストとともに考えうる範囲で、ドゥルーズの理解を検討することにする。

さて一九六六年の論文でドゥルーズは縮約としての記憶を「潜在的反復」として理解している。「この潜在的反復が描くすべての水準において、われわれの過去のすべてが演ぜられると同時に自らを取り戻し、同時に反復される」⁵⁴。これは一九五六年の論文でもすでに「心理的反復」と呼ばれていたものである。ここに述べられていることが、そのまま縮約としての記憶についてのドゥルーズの解釈になっている。

この解釈には「意識の諸平面」の概念が関わる。それは『物質と記憶』第三章で記憶の倒立円錐図形の諸断面として示される概念である⁵⁵。記憶の全体を表す倒立円錐はその頂点において行動の平面に接している。その反対に位置する円錐の底面は、行動から最も遠い夢の平面を示している。ベルクソンはわれわれの精神の活動を、このあいだに位置しうる記憶の諸断面間で、意識の諸平面のあいだで遊動することと考えている。ドゥルーズは上に引用した箇所へ註を付して、「この形而上学的反復について」、参照先として『物質と記憶』二五〇頁と三〇二頁の二箇所を指示している。まず前者から、『物質と記憶』第二章における注意的再認における記憶から検討していこう。

(回路OAは) 対象Oそのものとともにそれを覆いに戻ってくる残像だけを含んでいる。その背後に次第に大きくなる円環B、C、Dがあり、知的拡張の増大する努力に対応する。後で見るようになるように、これらの回路のそれぞれに入るのは、記憶の全体である。というのも、記憶はつねに現存している *toujours présente* からだ。しかし柔軟であるため無際限に膨張することのできるこの記憶は、示唆された諸事象を一あるときには対象そのものの細部を、あるときには同時に生起して対象の解明に貢献できる細部を一ますます多く対象へと反射する。(250)

一九五六年の論文は、ドゥルーズ自身の哲学的出発点ともなった極めて独創的なものである。われわれは彼の解釈を柔軟化しつつ展開する。

⁵⁴ Deleuze: 1966, p. 56.

⁵⁵ 『物質と記憶』初版の序によれば、この著作の出発点はこの意識の平面の概念にあったとされている。「われわれはこの章で、記憶という的確な例に基づいて、同じ精神の現象が、夢と行動のあいだの中間的な諸段階のすべてを表す、多数の異なる意識の諸平面すべてと同時に関わっていることを示す」(1490)。

まず回路についてだが、ベルクソンにとって注意的な再認、つまり対象に注意を凝らしていく知的認識は、直線的な営みではない。与えられた印象が感覚を刺激し、感覚入力にしたがって観念が惹起され、さらに他の観念が喚起されていく、こうした直線的な過程を描くものとしては理解されない。

ある対象を判明に知覚していくことは、その対象の細部がいつそう豊かに与えられその輪郭が際立っていくことである。これは注意の増大によって為される。そして注意の増大は、対象とその観察者の記憶の全体が参与して形成する一つの閉じた回路が、漸進的に拡張していくこととして理解される。注意が深まるにつれて回路はそのつど全体的に作り直されていき認識は際立っていく。そしてそのつどの回路に「記憶の全体」が参与するのである。こうして記憶は意識に「現存」している。その存在の仕方は、後で純粹記憶の概念の検討において詳しく見るように、潜在的なものである。記憶の全体は現存しているが、そのすべてが思い出されて認識のなかへ投影されるわけではない。しかし記憶の全体が潜在的に現存していなければ、注意を傾けるとともにいつそう多く反射されていく記憶の出自は理解できないことになる。また回路の構造として再認を考えることで、同じ記憶が全体として何度でも反復されうることになる。こうした記憶全体の反復を指してドゥルーズは「形而上学的反復」あるいは「潜在的反復」と呼ぶ。一九五六年の差異論文では『物質と記憶』第二章の同じ頁の次の箇所が引用されている⁵⁶。

⁵⁶ Deleuze: 1956, p. 105.

したがって、同じ心理的生が記憶の相継ぐ諸層で無際限に反復されるだろうし、精神の同じ行為がさまざまに異なった高さで演ぜられるだろう。注意の努力において、精神はつねに全的に身を捧げるのだが、その進展を遂げるために選択する水準に応じて単純になったり、複雑になったりする。われわれの精神の方向を決定するのは、通常は現在の知覚である。しかし、われわれの精神が採用する緊張の程度に応じて、精神が身を置く高さに応じて、この知覚がわれわれのうちで展開させるイメージとしての記憶の数は増減する（250-1）。

「同じ心理的生」が注意的再認の回路が作り出されるそのつど、「記憶の相継ぐ諸層で」繰り返される。意識が「選択する水準」、それが「身を置く高さ」とともに、記憶の全体はさまざまな程度で反復されうる。この反復がわれわれの知的営為、精神的行為の基礎を為し、その可能性の条件となるだろう。もっとも記憶の全体が反復され現存するからといって、そのすべてが現実化し現在の知覚に反射されるわけではない⁵⁷。ここでベルクソンが述べているのは「反射」さらには「反省」を可能にする条件としての記憶の全体の反復である。この反復は顕在的にではなく、潜在的に為されているものであるだろう。問題は、この反復が縮約としての記憶に基づくと思われうるかどうかにあるのだが、いまは「緊張の程度に応じて」と述べられていることに注意するに留めよう⁵⁸。

次いで記憶の全体について、その存在についてのベルクソンの理解を確認しておきたい。

純粹記憶の潜在性

ベルクソンは記憶を、潜在的なものが現実化するという構造において捉える。イメージとしての記憶は、出来事のすべてがそのまま完全に保存されるというものであった。しかしだからといってわれわれは絶えず降り積もる記憶のなかでまどろんでいるわけではない。われわれは身体的行動において物質的世界に現出しており、現実的な現在を生きる。「現在の意識」*conscience actuelle* において、記憶は知覚のなかに現実化することで行動に結びつけられる。そこで現在の知覚に実効的でないイメージは退けられていることになる。

⁵⁷ こうした再認の回路のなかで、喚起された記憶は、「個体を包括する種のように現在の知覚を限定し、張り付いていく」（251）。

⁵⁸ 精神が身を置く水準を「緊張の程度」としてベルクソンが捉えていることには、「縮約としての記憶」が「純粹記憶」において働いていることを窺わせるものがある。

では現在の意識とともに蓄積され、現存し続けるという記憶はどのような仕方で存在するのだろうか。現在の知覚に対して実効的な記憶はイメージとして意識の現在に投射される。しかしこうして光を得たイメージは蓄積されている記憶の部分に過ぎない。そこで諸他の記憶は暈の様にイメージ化された記憶を取り巻き、さらにその周囲には広大な過去の記憶の領域が控えていると考えられる⁵⁹。この暈のような記憶の状態をベルクソンは純粹記憶と呼ぶ。

しかし他方では、もっと後で示すように、イメージとしての記憶 *image-souvenir* はそれ自身では、純粹記憶 *souvenir pur* の状態に還元されれば、無効なものに留まるだろう。潜在的 *virtuel* であるこの記憶はそれを牽引する知覚によってのみ、現実 *actuel* になる。無力なこの記憶はその生命と力とを現在の感覚に借り、現在の感覚に物質化される *se matérialise* (272)。

現在の意識には無効な状態における記憶の存在をベルクソンは純粹記憶と呼ぶ。そこから発して記憶はイメージとして現実化していくのだが、それ自体として決して顕在的ではない記憶の存在は潜在的なものとして考えられる。記憶の全体がこうして存在していなければ、記憶はイメージとして現実化され得ない。ベルクソンは記憶を潜在性から現実性への移行の構造において捉える。

それ自体としては無力な潜在的な記憶、「純粹記憶」が現在の知覚へ向けてイメージとしての記憶へと現実化し、現在の感覚へ物質化する。ベルクソンはこの様に記憶の基本的な構造を理解する。ここに挙げられた三つの項、「純粹記憶」、「イメージとしての記憶」、「現在の感覚」はそれぞれ独立的に存在するわけではない。全体の構造は一つの連続的な進展として見られるべきであり、これらの概念は三つの構造契機として理解されるべきである。

ベルクソンは記憶を純粹な形態において見るならば、それは過去一般に重なると考えている。過去は現在には決してならない。過去はいつまでも過去のままである。現実化したイメージとしての記憶に、そのもとの状態としての純粹記憶、純粹な過去の痕跡を探しても、イメージ化された以上、現在の光の下に照らされているのだから、それはもはや過去ではない。純粹な記憶は過去の出来事存在であり、それは潜在的にしか存在し得な

⁵⁹ 「いくつかの混雑した諸記憶、現在の状況と関係を持たない諸記憶は、有益に連合された諸イメージをはみ出し、それらのイメージの周囲にそれらほど明るくはない暈 *frange* を描いて、この暈は暗がりの膨大な地帯へ失われていく」(230)。

いものである。

では純粹記憶がこうしたものであるならば、それを考察する意識には、いかにしてその存在が示唆されるのだろうか。ベルクソンは意図的にある記憶を思い出そうとする努力が、「生き生きとした実在である生成の連続性」(277)を辿ることから、その存在が認められると考えている。

「われわれは独特な行為を意識する。この行為によって、われわれは現在から身を分離し、まず過去一般のなかへ、次いで過去のある一定の領域のなかへ身を置き直す」(277)。ある記憶を思い起こそうとするものにとって、まず意識されるのは自らの行う「独特な行為」、精神の行為である。その時意識はまず過去一般に身を置く。はっきりとした輪郭を持ったイマージュとしての記憶ではなく、その行為の始まりには茫漠たる状態が意識されるだろう。そこでは「われわれの記憶はなおも潜在的な状態に留まる」(277)。そしてこの「潜在的な状態」から、「少しずつわれわれの記憶は凝縮する霞みの様に現れる。潜在的な状態から、われわれの記憶は現実的状态へと移行する」(277)。この移行とともに、記憶は「その輪郭を浮き上がらせその表面は彩られ、知覚を模倣していく」(277)。こうして現実化の進展過程が、意識によって辿り直されることなかで、純粹記憶の存在はいわば内側から確証されることになる⁶⁰。記憶の現象が、不定性、不安定さとともに始まることは、純粹記憶の潜在性の経験的側面を描き出すものでもあるだろう⁶¹。

潜在的共存としての記憶と縮約

問題はこの純粋な記憶の存在と、縮約としての記憶の関係である。ドゥルーズは一九五六年の論文で、縮約としての記憶において、純粹記憶が自己共存することで、記憶は持続として、「それ自身における差異」として理解可能になると考えている。彼は「縮約としての記憶」に言及しながら、それを記憶の反復の力と見做すことで、純粹記憶がそれ自身と共存すると考える。そしてこの反復において記憶は一貫性をもって潜在的に存在することになる。

ベルクソンはわれわれに記憶について語る時、いつも記憶を二つの相の下で呈示

⁶⁰ ドゥルーズはこの行為を一九六六年の研究のなかで現在と過去とのあいだに、知覚と記憶とのあいだに本性の差異を発見する「存在論への飛躍」として取り上げている。Deleuze: 1966, p. 52.

⁶¹ ベルクソンの観念連合に対する非難は、判明に区別されたイマージュとしての記憶に依拠して諸観念の連合を規則づけていこうとする態度に向けられている。観念連合論は数的多数性の形式において心理的なものの存在を把握しようとするのだが、その批判をベルクソンは潜在性の現実化という構造から、記憶の現象にまず不定性を認めることから行っている。

する⁶²。すなわち記憶としての記憶 *mémoire-souvenir* と縮約としての記憶 *mémoire-contraction* である。第二の記憶が、第一の記憶よりも深いものである。縮約されることで *En se contractant*、反復される要素はそれ自身と共存し *coexiste*、いわばそれ自身を繰り返かえし *se multiplie*、それ自身を保持する *se retient lui-même*。こうして縮約の程度が決定される。縮約の程度の一つ一つは、われわれに要素それ自身の自己共存の水準を現し、つまり全体を現す。したがって、記憶が自己共存として定義されることにはいかなる背理もないことになる。というもこんどは、共存のあらゆる可能な諸段階がそれら自身と共存することで、記憶 *mémoire* を形成するのだから⁶³。

イマージュとしての記憶において出来事すべてが絶えず保存される。こうして保存されている記憶は、純粹記憶として過去一般の存在と重なるものである。これが記憶の一つの相である。ドゥルーズはベルクソンが記憶をもう一つの相からも捉えていると考える。それが縮約としての記憶である。この「深い」記憶の働きを見出すことでドゥルーズは、純粹記憶が現在の意識とともに存在する仕方を、「反復」として理解していく。蓄積された過去が、現在の意識とともに絶えず全体として縮約されることで、反復され保持されていく。そしてこうした縮約の程度が、意識が身を置く精神の水準を示すことになるだろう。縮約において、反復される要素的な記憶 *souvenir* がそれ自身と潜在的に共存しうる。この要素的記憶全体の共存の形式は、『物質と記憶』第三章における倒立円錐の図式において意識の諸平面として概念化されている。次の引用は、冒頭で引いたドゥルーズ一九六六年の論文で、「形而上学的記憶」の参照先として指示されていたもう一つの箇所である。

結局のところ、点 S であらわされる感覚—運動機構と A B に配置される諸記憶の全体とのあいだには、前章で予め示唆しておいたように、われわれの心理的生の無数の反復のための余地があり、そのいずれも同じ円錐の A' B'、A'' B'' 等々の断面で表わされる、ということになる。(302)

⁶² ベルクソン自身による二形式（身体の記憶とイマージュとしての記憶）の呈示とは異なる。檜垣、前掲書、一七三頁を参照。

⁶³ Deleuze: 1956, p. 104-5. (英訳五八頁)。

『物質と記憶』第三章のこの箇所、倒立円錐の図式は、先に取り上げた注意的再認の回路図を立体化して引き継いでいる。注意の努力に対応して記憶の全体が参与するとされていた回路の諸円環は、この図のなかで諸断面によって表される。これらの諸断面は記憶の全体の可能的な反復を描いている。そして諸断面の多様性は、意識が自らの身を置きうる高低さまざまな水準となるだろう。

つまり縮約としての記憶によって、純粹記憶がさまざまな水準でそれ自身と共存していると認めることで、ドゥルーズは記憶を持続として「それ自身における差異」として理解していく。精神について、「差異がすでに反復である」とドゥルーズが述べる由縁はこの点にある。そしてこの観点からドゥルーズは、ベルクソンによる物質と精神を意識の緊張の程度として捉える持続の存在論を、「差異と反復」によって概念化する。

純粹記憶としての過去一般が自ら反復することでそれ自身と共存することの可能性を、記憶が持続として潜在的に存続し続ける力を、ドゥルーズは縮約としての記憶に求めている。純粹記憶という過去一般の潜在的な存在の概念は、縮約としての記憶によって記憶としての現存の形式を規定されることになる⁶⁴。過去は自律的に保存され純粹な記憶として存在する。こうして保存される記憶はそれ自身一貫性を持って現在の意識とともに現存し続けるのだが、この過去の現在との共存は、縮約としての記憶によって、過去が潜在的に反

⁶⁴ 「潜在的なものは、こうした根源的反復から受け取るより他の一貫性 *consistance* は持たない」 Deleuze: *ibid*, p. 105.

復されることをその可能性の条件とすることになる⁶⁵。

行為における性格の存在と縮約としての記憶

ドゥルーズは縮約としての記憶を、過去一般が意識の諸平面として反復されることを可能にしている力として見出している。われわれは行為の観点からつまり現実的な現在から、意識の諸平面という概念を捉え直すことで、ベルクソンがこの著作で「性格」と呼んでいるものを考えてみたい。そうすることで、精神についてその行動が「理性的で反省的な行為」でありうる条件として縮約としての記憶を改めて位置づけ直す。それによりベルクソンが物質から精神までを「意識の緊張の程度」として一元的に理解する観点を、もう一度ベルクソン自身の概念へ引き戻しつつ再考したい。

まず意識の諸平面の概念について、ベルクソンは意識の諸平面は潜在的に存在すると述べていた。

これらの平面は始めからでき上がったものとして、相互に併置されるものとして与えられているのではない。これらの平面はむしろ潜在的に存在する。こうした存在は精神に固有なものである (371)。

記憶の全体は、注意的再認の回路図における諸円環において、さらに記憶の円錐体の諸断面によって示される意識の諸平面において反復される。こうした意識の諸平面は生物の意識には想定され得ない。われわれのような意識的存在に固有の記憶の形態である。この意識の諸平面とともに、われわれの具体的な生のなかで行われる知的な行為、さらにはわれわれが現実的行動へ向けて取る態度決定が可能になると考えられる。反省的な行為はわれわれが身を置きうる「意識の諸平面」の水準、その高低さまざまな程度によって規定されているだろう。意識の諸平面が現在の意識に潜在的に形成されていることに、われわれの行為は条件づけられている。そしてそのつどわれわれが身を置いている意識の水準は、行為においては「性格」として表れているだろう。

われわれの決断すべてにいつも現れるわれわれの性格 *caractère* は、まさしくわれわれの過去の状態すべての現実的総合 *synthèse actuelle* であることが分かる

⁶⁵ 「純粹持続」をこうしたドゥルーズの立論のなかに見出そうとするなら、われわれの現在の意識が新たなものの絶えざる生成でありうる条件としての、この「潜在的な反復」に求められることになる。

だろう。こうして凝縮された形態 *forme condensée* の下では、先立つわれわれの心理的生は、われわれにとって、外的世界にもまして存在している (287)。

行為するわれわれの性格として記憶の全体は現在の意識に現存している。それは過去の状態の「凝縮された」、いわば要約された形態である。「性格」は、行動との関わりにおいて過去の現存を表わすものである。

われわれの過去の心理的生は、全体として、われわれの現在の状態を、必然的には決定することなく、条件づける。過去の状態は一つとして性格の内に明白には現れないが、過去の心理的生はわれわれの性格の内にもまた、やはり全的に顕現する (289)。

「性格」は、行為において意識が身を置く記憶の全体の潜在的反復としての「意識の諸平面」と等しいものである。そして性格をまた純粹記憶としての過去の全体を要約するものとするならば、そこに記憶の全体を凝縮する力として縮約が働いていると考えることができるだろう。「性格」は、記憶の全体のいわば潜在的な要約として、行為を行う意識に現存している。この観点から記憶を縮約する力が、行為における性格を潜在的に条件づけていると見做すことができる。つまり記憶を縮約する程度が、精神の行動の、つまり「理性的で反省的な行動」の可能性の条件として考えられるだろう。この観点から精神は、記憶の縮約の程度において、意識の緊張の程度として考えられることになる。

こうして「性格」という概念を介在させることで、ドゥルーズの縮約理解を柔軟化しつつ、ベルクソンが物質から精神までを意識の緊張の程度において一元的に把握する考察の根本的な概念として、縮約としての記憶を見出すことができるだろう。

ベルクソンは物質と「理性的で反省的な行動を備えた精神」とを、意識の緊張の程度において包括的に理解していた。「理性的で反省的な行動」を精神に可能にするのは意識の諸平面であり、それは純粹記憶において縮約としての記憶が働くことで、記憶の全体が凝縮されることで形成される。意識の諸平面が潜在的な仕方では現存することにおいて、「理性的で反省的な行動」はそれとして存立しうる。精神についても、それを意識の緊張の程度として考えることは、純粹記憶とともに縮約としての記憶を考えることで可能になると言えるだろう⁶⁶。

⁶⁶ ベルクソンは意識平面における記憶の現実化の機能を「収縮 *contraction* と膨張」としても描

4 ウォルムスによる縮約の解釈、「第三の記憶」

ウォルムスの縮約解釈の観点は『物質と記憶』第三章にある。彼はイマージュの記憶と身体の記憶という記憶の二形式を総合するものとして縮約を見出している。それが「第三の記憶」という彼の縮約解釈である。彼は最終的に縮約を持続として、「時間の諸瞬間を縮約する行為」として理解する。ドゥルーズが縮約を純粹記憶とともに見出すことで、それを真の過去のなかに働く記憶として理解するのに対して、ウォルムスは、現在において働く記憶として捉えている。

まず彼が論拠とするベルクソンのテキストを引用しておこう。

しかしわれわれは記憶のこの二つの形態を深く区別したが、その結びつきを示していなかった。過去の行動の蓄積された努力を象徴する諸機構を持つ身体の上で、イマージュ化し反復する記憶は宙に浮いていた。しかしわれわれが直接的な過去以外のものを決して知覚することがなく、われわれの現在の意識がすでに記憶 *mémoire* であるとすれば、われわれが始めに分けておいた二つの項は密接に結合され一緒になろうとする。実際、この新たな観点から見れば、われわれの身体は、われわれの表象の変わることなく再生する部分、つねに現在である部分、というよりもむしろ、あらゆる瞬間にちょうど過ぎ去ったばかりの部分に他ならない (292)。

ウォルムスは、「われわれの現在の意識がすでに記憶であるならば」、としてベルクソンが「新たな観点」を導入している点に着目する。彼はここでベルクソンが「第三の記憶」を新たに想定していると思ふ。この新たな観点、「第三の記憶」においてイマージュの記憶と身体の記憶が総合されていると考えるのである。「ベルクソンはたんに、《われわれの意識と共外延的》であり、判明な区別を持たずまた全般的であるような純粹記憶において、

いている。「しかし、第二の観点があり、それこそまさにわれわれが再認の理論のなかで指示しておいたものだ。われわれはわれわれの人格全体をわれわれの記憶の全体性とともに、現在の知覚のなかに想定した。したがって、もしこの知覚がかわるがわる異なる記憶を喚起するならば、それは知覚が引き寄せるますます多くの要素を機械的に付加することによってではない。それはわれわれの意識全体の膨張による。われわれの意識全体はより広大な表面に広がり、意識の豊かさの詳細な目録をいっそう詳細にしていく」(305)。われわれは「性格」の概念を行動との関わりにおける意識平面の存在として考える。したがってその存立を可能にする縮約と意識平面における記憶の現実化機能とは区別して考える。檜垣、前掲書、一四七頁、一七三、四頁を参照。

過去の自動的保存を述べただけではない。彼は過去に固有なこの記憶に、《身体の》記憶を、《ほとんど瞬間的》であり、反復と習慣によって構成される記憶を対立させている。したがってベルクソンには、それらを再び繋げることが問題として提起される。ところでこの繋がりには、過去の記憶と身体の諸機構のあいだに、本質的な記憶である第三の記憶 *troisième mémoire* が挿入されなければ、可能ではないだろう。この記憶はわれわれの直接的意識それ自体を規定している」⁶⁷。

すでに確認したように、ベルクソンは『物質と記憶』第二章冒頭で記憶に二つの形態を区別していた。イメージとしての記憶と身体の記憶である。この二つの記憶についてベルクソンは先の引用のなかで、イメージとしての記憶が、身体の記憶の上で宙に浮いたままであり、その繋がりを考えてはいなかったと認めている。そして「現在の意識がすでに記憶であるとすれば」、この二つの記憶が結合されると述べている。ウォルムスはこの結合において縮約としての記憶が「本質的」な記憶として、記憶の二形態を繋ぐ「第三の記憶」として働いていると考えるのである。後の研究ではより強い調子で次の様に述べている。

実際あたかも、二つの記憶とその統合という二重性から提起される問題を解決するために、ベルクソンが、あらゆる観点からみてこの著作の頂点を為す有名な円錐の図式において、第三の記憶を想定することを余儀なくされたかのようだ。それは他の二つの記憶を統括しそれらの差異を説明するが、またそれらの統一と混淆自体をも説明するものである。繰り返すが、この第三の記憶は、実際持続以外の何ものでもない。もはやその内容においてでも、その判明な区別を持たない多様性においてでもなく、時間の諸瞬間を縮約する行為 *acte de contraction* としてである⁶⁸ (153)。

身体の記憶とイメージとしての記憶は、『物質と記憶』第三章における先の引用の箇所とともに、行動の平面に記憶の倒立円錐が頂点を接している形で図式化される。

⁶⁷ Frédéric Worms: La conception bergsonienne du temps in, *Philosophie n.54*, Paris, 1997, p. 81.

⁶⁸ Frédéric Worms: *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, 2004, p. 153.

身体の諸機構としての記憶は円錐の頂点と平面の接点に見出され、純粹記憶は円錐の全体によって示される。この二つの形式を統合する「第三の記憶」としてウォルムスはベルクソンが縮約としての記憶を考えていると見做す。つまり円錐の頂点が平面に接していることとの条件として、縮約としての記憶が働いていると考えるのである。それにより記憶の全体が持続として理解されるというのだろう。

彼は、ベルクソンが「現在の意識」がすでに「記憶」である、として「新たな観点」を導入していることのなかに、主に二つの論点を見出していることになる。一つは「現在の意識」を記憶として認めることで、記憶の二形式が統一されるということ。もう一つは、「現在の意識」に見出される記憶は、縮約としての記憶と考えられるということ。この後者の論点について、われわれの観点からは疑問が残る。この主張は、「現在の意識」において働く記憶の所在を、「直接的過去」に見出すことで可能になるものだろう。しかしその解釈が問題になる。

ウォルムスが「第三の記憶」として縮約を解釈することの要点は、われわれの現在の意識が記憶である、ということの理解に関わる⁶⁹。つまり「あらゆる知覚はすでに記憶である」、あるいは「われわれは過去しか知覚しない」というベルクソンの言明を、現在における記憶の働きとして、具体的には縮約のことを言っていると考ええるということである。彼の理解をベルクソンのテキストとともに展開してみよう。

ベルクソンにとって現在は、記憶としての過去が行動において未来へと転じていく絶えざる生成として理解される。現在は瞬間的な点的な時間性としては理解されない。現在は、「存

⁶⁹ ウォルムスが縮約を現在の意識としての記憶と解釈することは、彼がベルクソンにおける身体を再評価する観点に基づくだろう。

在するもの」として扱おうとしても絶えずそこから逃れ去る⁷⁰。こうした現在という時間性をベルクソンは身体に基づいて規定している。

われわれの身体はそこで感覚が行動へと転換する移行の場である。身体は行動のために組織される「感覚—運動系」として定義される（280）。現在はこうした身体の構成に基づいて定義される。「私の現在は私の身体について持つ意識にある」（281）。そこで現在は、感覚と運動それぞれの二つの時間性に分けられることになる。「私の現在は同時に直接的過去の知覚であり、直接的未来の限定」（280）である。ベルクソンは現在を感覚から運動へと推移し続けることについての意識、過去から未来への生成として規定する。

つまり現在は感覚としての直接的過去と行動としての直接的未来とに分岐していると考えられることで初めて思考可能になる。過去と未来のあいだとして規定することで、存在するものとしてではなく、生成として概念化される。

では縮約はこうした構成を持つ現在のどこに見出されるだろうか。それは感覚において、つまり現在における直接的過去においてということになる。ウォルムスが縮約としての記憶を現在において働くものと見做す根拠はここにあるだろう。ベルクソン自身表立って「縮約」とは述べていないが、『物質と記憶』第四章で為される縮約についての考察の内実を反映した表現を見ることができる。

反対に、具体的な、意識によって現実に生きられる現在を考えるなら、この現在の大部分は直接的過去にあると言える。可能な限り最も短い光の知覚が持続するほんの瞬間のなかにも、何兆もの振動が生じていたのであって、最初の振動は最後の振動から無数に分たれる間隔によって隔てられている。あなたの知覚はどれほど瞬間的であっても、数え切れないほど多くの思い出される諸要素からなっていて、本当は、あらゆる知覚はすでに記憶 *mémoire* なのである。純粋な現在は、未来を浸蝕する過去の捉え難い進展なのだから、われわれは、実際には、過去しか知覚しない（291）。

われわれは過去を知覚するのみである、このテーゼの内実を考える必要がある。通常知

⁷⁰ 「あなたは、現在とは存在するもの *ce qui est* と恣意的に定義しているが、現在とはたんに生じるもの *ce qui se fait* である。あなたが現在の瞬間によって未来と過去を分離する分割不可能な境界のことを理解しているなら、これほど存在しないものは何もない。われわれが存在しなければならぬものとしてこの現在を考えるとときには、現在はまだ存在していない。われわれが現在を存在しているものとして考える時には、現在はすでに過ぎ去っている」（291）。

覚は現在において為されていると考えられるが、ベルクソンにとってそれは過去に見出されるべきものである。感覚は行動へ転化していく過去の直接的な部分である。この感覚についてベルクソンは『物質と記憶』第四章で縮約としての記憶にその成立の根拠を見出していた。感覚的諸性質は、「何兆もの震動」を意識の瞬間に凝縮する記憶の働きによって成立する。この点を重くとればウォルムスの解釈、「第三の記憶」を「時間の諸瞬間を縮約する行為」としての「直接的意識」と捉える解釈には疑問が残る。ウォルムスは「直接的過去」の知覚が「直接的意識」として「時間の諸瞬間を縮約する行為」である、と考える。しかし『物質と記憶』第四章についてのわれわれの議論が正しければ、縮約としての記憶が感覚的諸性質を現出させるのであり、それは感覚を私の身体の「直接的過去」として成立させているものである。ベルクソンが「現在の意識がすでに記憶である」と言うにしても、その記憶の働きを縮約としての記憶と理解することは難しいのではないか。

縮約という記憶の概念については、ベルクソンが『物質と記憶』第四章でそれを真に考察し得たということを念頭に置くべきであるように思われる⁷¹。そこでベルクソンはこの記憶の概念に基づいて、「時間とのかかわりにおいて」心身関係を捉え直すのである。心身関係の統一は、第四章の形而上学的思考のなかで、精神が純粹知覚において物質と重なるこ

⁷¹ 石井敏夫もこの箇所を下に、第四章の知見を動員しつつ、第一章の光点Pの分析のなかに縮約の内実について踏み込んだ観察を残している。

「P点における光の知覚が一秒の何分の一か続くとする。そのあいだにも無数の振動が生ずる。今最後の振動が起っていると仮定しよう。最初に起った振動も、直前に起った振動も、それらのあいだに生じたすべての振動も、それ自体としてはもはやどこにも存在しない。『最初の振動と最後のそれは無数に分かたれる間隔によって隔てられている』(MM, 167) からである。とすれば、『具体的な、意識によって現実に生きられる現在を考えるなら、この現在の大部分は(en grande partie) 直接的過去にあるといえる』(MM, 166)。知覚はもはや存在しない大多数の振動を現に生起しつつある振動とともに、P点において縮約しているに違いない。もはや存在しない振動は、『過去』の振動であるから、振動の一種『表象』でしかないのに、それが、現に振動が生起しつつあるP点からとびちってしまわずに、そこに結びついているのはなぜか、という点についてはいまは措いておこう。この問題は、記憶の本性が十分に検討されてからでないかと答えられないからである。今は、一種の記憶力としての知覚においては、個々の振動の区別ばかりでなく、現に存在する振動と、もはや存在しない振動の区別すら、存在しないということをおさえておくにとどめよう。一種の記憶力としてみた場合の、知覚の最も本質的な特徴はここにある」(石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社、二〇〇一年、八七頁)。

「一種の記憶力としての知覚においては振動の区別は存在しない」という指摘は本質的である。われわれはいつもすでに縮約した形でしか諸事物の諸瞬間を知覚しない。石井は、その研究の構成上、心理学的に辿り直すことの可能な仕方、ベルクソンの論述を確かめていく。だから、むしろ意図的に第四章の記述を回避する仕方、考察は進められる。石井の考察に対して次の様に言うことはできないだろうか。「知覚はもはや存在しない大多数の振動を現に生起しつつある振動とともに、P点において縮約しているに違いない」ことを、すなわち具体的で現実的な知覚のなかでは見分けることのできないその行為を、持続として直観しているのが第四章の記述である、と。

とを見出すことで為される。この点に記憶と身体の統一の問題の解消があるのだから、第三章における記憶の二形式の総合は、例え縮約としての記憶に関わるとしても、二元論の問題には関わらないだろう。ベルクソンは意識の緊張の程度によって物質と精神とを一元的に理解する考察を、つまり持続として諸存在を理解する考察を、縮約の概念から着想している。この着想のなかで心身関係の存在論的な統合が為されるのであり、それは記憶の二形式の統合とは異なる問題である。

われわれは縮約としての記憶の概念が、ベルクソンの思考の転換点に位置していると考ええる。この記憶の考察を通して、ベルクソンは精神と物質を、同じ持続の両極限として構想している。この点に持続の思想が存在論として成立する可能性がある。したがってこの場面を考慮して縮約としての記憶を解釈している点で、ドゥルーズの理解は正当なものと考えることができる。

ただウォルムスの解釈の検討を通して、第四章の形而上学的考察のなかでははっきりしなかった縮約としての記憶の具体的位置づけを改めて問い直すことができる。彼は「第三の記憶」を「時間の諸瞬間を縮約する行為」としての持続と考える。しかしわれわれにとってそれはむしろ生成の問題であるように思われる。ベルクソンは『物質と記憶』第四章の結論において、縮約としての記憶について、外部知覚において諸事物の諸瞬間を凝縮することで、未来の行動を可能にしていくものと捉えている。そしてベルクソンにおいて「現在の意識」は、過去から未来への絶えざる生成として理解されていることを考えれば、縮約としての記憶において、生成はそれとして存立すると考えることができるだろう。

5 外部知覚における縮約、自由と必然性について

これまでの議論を振り返っておこう。ベルクソンは『物質と記憶』第四章で、縮約としての記憶の考察を通して、意識の緊張の観念を得ている。それにより物質と精神を意識の緊張の程度として理解することが可能になる。物質については、思考実験のなかで、それを「一つの動的連続性」としてその状態変化の動性において把握することで、意識の緊張の程度として理解する観念を得ている。精神については、それを「理性的で反省的な行為」を行ないうるものとするならば、こうした行為について、意識の緊張の程度から把握する観点をベルクソンが第四章で明示的に示していたとは言い難い。そこで『物質と記憶』第三章に可能な理解を求めることになる。意識の緊張の程度の観念をベルクソンは縮約としての記憶から得ているのだから、精神を意識の緊張の程度として理解する以上、純粹記憶の議論のなかでも、ベルクソンが縮約としての記憶を想定していたと考えることができる。

こうした想定に示唆的な理解をドゥルーズが示している。われわれはその解釈を展開した。

われわれの意識の各瞬間において、純粹記憶は縮約されて意識の諸平面を形成している⁷²。純粹記憶（過去一般）が現在の意識に潜在的な仕方では現存し続けることの可能性は、縮約としての記憶が、それを意識の諸平面に凝縮しているという点にかかっている。ドゥルーズの解釈とともに縮約としての記憶は、純粹記憶が意識の諸平面としてわれわれの経験になっていくその手前で、「経験の転回点の向こう側」で働いているということが出来るだろう。ちょうど純粹知覚について、縮約としての記憶が物質の諸瞬間を感覚的諸性質へと凝縮させていることを、「経験の転回点の向こう側」においてベルクソンが探究していたように。

この解釈とともに精神について、それが「理性的で反省的な行為」を為し得ているのは、われわれ意識的存在においては、縮約としての記憶が純粹記憶を反復し、己の過去として意識の諸平面を形成しうることに、そしてそれにより自らの行為に性格ないしは人格として過去が凝縮された仕方では現存しうることに基づく、と考えることができる。そうであるならば、純粹記憶とともに潜在的に働いている記憶の縮約の程度において、精神を「意識の緊張の程度」として把握することができるだろう。その程度に基づくことで、精神の行動は「たんに不確定」である限りにおいて必然的ではないというに留まらず、真に自由と呼ばれる行動でありうる。

精神をこうして縮約としての記憶から捉えることで、ベルクソンの次の言葉も理解可能なものになる。

こうして、原物質 *matière brute* と最も反省的でありうる精神とのあいだには、記憶の可能的な強度のすべてが、あるいは、同じことだが、自由の程度のすべてが存在する (355)。

物質から精神まで存在一般を「記憶の可能的な強度」として考察することについて、縮約としての記憶が、精神においても「経験の転回点の向こう側」に働いていると見做すことで、統一的な理解を得ることが出来るだろう。

ここでわれわれは、縮約としての記憶について、こうした存在論的場面からさらに一步

⁷² 純粹記憶と区別してその潜在性を考えるなら、それは潜在性の弱い仕方では、現在の意識に性格として絶えず現存していると考えられることができる。

進めて、それを行動との関わりにおいて捉えてみたい。確かにドゥルーズとともに純粹記憶における縮約を考えることで、われわれは持続の存在論的統合を理解できる。しかしそれにしてもベルクソンは縮約について、『物質と記憶』では「物質の諸瞬間」を収縮するものとしてしか明示的に扱っていない。そしてこの点を追求することで、ドゥルーズとは異なる側面から、縮約としての記憶の考察によって新たに開けてくる問いを捉えることができるのではないか。ドゥルーズは持続の存在論を徹底して潜在的なものとして考察しているのだが、われわれには縮約としての記憶の概念とともに、現実的多様性を持続として思考する可能性が、すなわち生成を問う観点が、『物質と記憶』の末尾から結論部にかけて開かれているように思われる。

上述してきた存在論的統合の考察の後、さらにその先で示される「自由と必然」についての考察のなかで、ベルクソンは改めて行動の観点から縮約としての記憶に言及している。ベルクソンによる心身二元論の問題の解消は、三つの対概念の再考によって行われていた。「質と量」⁷³、「延長と非延長」⁷⁴、「自由と必然」である。この最後の対立の解消を考察するとき、ベルクソンは「自由」と「必然」の概念が、いわば現実的に出会っている場所として生物を見出している。そこで彼は、精神と物質の中間に位置するものとしての生物に注目しながら、改めて縮約としての記憶を生成の観点から取り上げている。

神経系のより複雑な組織は、物質に対する生物のより大きな独立を保証しているように思われるが、この独立そのものを物質的に象徴化しているに過ぎない。独立そのものとは諸事物の流れのリズムからの解放を存在に可能にする内的な力であり、それは次第に深く未来に影響を及ぼすために多くの過去を保持する *retenir* こと、すなわちわれわれがこの言葉に与える特殊な意味において、その存在の記憶を可能にする (355)。

⁷³ 第一の対立は縮約の概念のなかで時間とのかかわりにおいて把握される。そこで「異質性—等質性」という概念的対立は異質性の程度から理解を改められた。本稿第一章参照。

⁷⁴ 第二の対立は「分割可能性と分割不可能性」について再考されることで解消される。感覚を延長的 *extensif*、すなわちそれ自体では分割不可能な延長と捉え、空間を分割可能性の図式として感覚的諸性質の有する「具体的延長」から区別することで解消される。そのなかで「等質空間は物質に働きかける存在のさまざまな歩みに関わっている」ことが示される。ベルクソンは延長 *extension* という概念を用意することで、感覚と等質的震動を、延長と非延長という対立概念から捉えることを無効化する。延長は「一つの動的連続性」として把握された物質の動性のことであり、時間とのかかわりにおける物質の本質である。

「過去を保持すること」は記憶のたんなる保存をのみ指すのではないだろう。保持するということから縮約としての記憶についても言及していると考えられる。「諸事物の流れのリズムからの解放を存在に可能にする内的な力」、それは「諸事物の流れ」を、自らの意識の瞬間に縮約する記憶のことではないか。ここでベルクソンは生物とともに、記憶について、行動の観点から捉えている。こうした考え方は、物質と精神を縮約としての記憶に基づいて、意識の緊張の程度として捉える観点から可能になったものである。ベルクソンは改めて物質について、記憶を受け入れうるような時間的形式を備えたものとして考えている。

記憶は、物質がいかなる予感も持たないような、物質がすでに自分なりの仕方で模倣していないような機能として介入するのではない。もし物質が過去を想起しないのだとしたら、物質が過去を絶えず反復しているからであり、必然性にしたがって、物質は先立つ瞬間とそれぞれ等価であり、そこから演繹されることのできる一連の諸瞬間を展開しているからである（356）。

縮約の程度から精神と物質を考察することで、必然性は、物質が時間的な展開としては、「先立つ瞬間とそれぞれ等価」であるような瞬間を絶えず繰り返しているものとして理解される。ここでベルクソンは過去と現在の総合としての記憶の観点から、時間とのかかわりにおいて、必然性を概念化している。この点に、この著作の結論末尾で示唆される観点、ベルクソンにとって「自由が必然性のなかに深く根を降ろし、必然性と内密に有機化されているようにいつも思われる」ことの持続の存在論との繋がりがある（378）。

ベルクソンは物質を、精神と同じ相の下に考察することで、自由と必然性の概念を対立させるのではなく、混淆するものと見做していく。そしてこの混淆はベルクソンに改めて生物を、その現実態として発見させるだろう。生物の行動の「不確定性」は、自由が必然性としての物質的世界に「深く根を下ろし」、「内密に有機化」されていることの時間的な意味である。不確定性は必然性における自由の存在を示している。

『物質と記憶』の結論の最後に提出される次の観念は、自由と必然性、精神と物質が浸透している場所を生物に見出し、さらにわれわれが生物であるという認識に立つものである。

誰も見ないのは、時間のなかで意識の緊張が増大しつつそれに伴うことである。

この意識は、すでに古きものとなった諸経験を記憶することによって、過去をますます保持しつつ、より豊かで新しい決断のなかで過去を現在と有機化しようとするばかりではない。この意識は、より強度の高い生を生き、直接的な経験を記憶することによって、ますます多数の外的諸瞬間を現在の持続のなかに縮約することで、より以上に行為を創造することができるようになる。このような行為の内的不確定は、物質の任意の多数の諸瞬間に配分されるはずだから、必然性の編み目をそれだけ容易に通過するだろう（377-8）。

われわれを含む生物において、意識に「外的な」諸事物の諸瞬間が—それ自体の持続としては必然的な展開を辿るはずの諸瞬間—が、感覚として縮約される。それにより意識には行動の足掛かりが与えられる。行動の内的不確定性は、意識が行為に直接的な過去のなかで潜在的に現存させている「意識の諸平面」の水準によって決定される。この「内的不確定」は行動において、身体を介することで諸瞬間に配分され、再び必然性としての物質的世界に解き放たれ、不確定性として現実化している。こうした縮約から行動への生成過程の全体は、「現在の持続」として「予見不可能」であるだろう。

結論

物質は絶えず反復する現在として定義される。これは時間とのかかわりにおける必然性の概念である。自由はその最も高次の形態を精神に見出される。精神においては過去が己の過去として絶えず縮約され現在の意識に記憶として現存する。その行動はたんに不確定な未来を決定しようと欲し、遠い過去から現在の状態に光をあてることで、理性的、反省的なものとなる。そこに精神の自由が見出される。こうした行動を精神に可能にしているのは縮約としての記憶である。

持続の相の下に精神と物質は一元的に理解され、精神と物質の二元論は、緊張の程度の二つの極限として再び見出される。そしてベルクソンはさらにこの観点から出発することができる。持続の一元論的な理解のなかで自由と必然が交錯する場として、改めて生物が見返される。これはベルクソンの二元論、質的多様性と数的多様性の、持続と空間の二元論が、現実的多様性の原理としての二つの極限へと転化する地点である。この観点は生物という現実的多様性をそこで時間が何かをしている場として思考することを可能にする。それとともにベルクソンは生成一般を、時間の存在を持続として考察していくことになるだろう。それが『進化』における砂糖水の比喩のなかで問われている事柄である。しかし

その前にベルクソンは縮約の概念から得た「緊張」の観念を軸にして、持続の存在論を「形而上学入門」のなかで展開している。次章の課題は、まずその存在論を確認することから始めて、『進化』を動機づける時間への問いを明らかにしていくことにある。

第三章 創造の持続

「われわれの形而上学はわれわれが生きているこの世界の形而上学であり、あらゆる可能世界の形而上学ではない」⁷⁵ (1287)。

序

本章ではまず「形而上学入門」における持続の多様性の問題を議論する。そこでベルクソンは意識の緊張を方法として用い、諸持続のリズムと共感する多元論を提示しているが、具体性を欠いた静態的な形而上学に留まっている。『創造的進化』の砂糖水の比喻は、私の意識と砂糖水の溶解とが連帯して作り出す経験の時間性に、この現在がある限定された持続を持って存在することを見出している。時間は継起する。この事実は、現在が不確定性としての、予見不可能性としての未来に開かれていることを教える。未来が存在することの意味をベルクソンは生命と物質とが連帯するこの世界のなかに探求するのである。この比喻のなかで提出される具体的全体の観念は「生命」Vie が物質と連帯するこの現実的世界を指示している。この全体性の観念は持続を、現在にアクセントを置いて理解することを要求しているように思われる。

1 「形而上学入門」における持続の多様性の問題

われわれの外的知覚のなかでは、さまざまな対象が運動を続け変化し続ける。日常的な知覚は輪郭を持つ物体で溢れている。われわれの視野のなかを多様な事物が動き、それら事物の表面が刻々と彩りを変えていく。あるいは音は一定のまとまりを持って断続的にわれわれの耳に届く。その音の発生源に諸事物の存在をわれわれは予想する。こうした経験的感覚世界を諸持続の多様性という観点から理解する視点を、『物質と記憶』第四章でベルクソンは呈示していた。それが「持続の緊張の程度」の概念である。心身関係を「時間とのかかわりにおいて」理解する過程で、ベルクソンは事象全般を「持続の相の下に」把握する観点に一度到達していた。目に見える存在の多様性は、空間的に区別される諸事物の多様性に基づくものではなく、「持続のリズム」の多様性として思考され、このリズムの多様性は意識の緊張の程度として理解することができる。

⁷⁵ 『思想と動くもの』「緒論第二部」より。

実際、持続の唯一のリズムは存在しない。相違なる多くのリズムを想像することができる。より緩慢なものであれ、より急速なものであれ、それらのリズムは、意識の緊張あるいは弛緩の程度を測り示しており、それによって諸存在の系列におけるそれら各々の場所を固定するだろう (342)。

つまり持続は意識的存在者の心理的状态を超えて、諸事象の存在形式として理解される。この様に解される時、われわれの外的知覚は、諸事物の有する持続のリズムとわれわれの持続とが連帯する場となるだろう。外部知覚を持続の観点から考察することで、たんなる知覚対象としての諸事物について、われわれはそれら自身を持続の程度として、意識の緊張の程度として把握することができる。改めてこうした認識の方法が問題として取り上げられたのが一九〇三年に書かれた論文「形而上学入門」である⁷⁶。この論文では、持続を「われわれに外的な事象」も含めて直接的に把握する方法が「直観」として初めて問われることになる。

直観は共感sympathieである。それは「対象の内部」へ身を置くこと、対象の存在の「独自性」と一致することである⁷⁷。この様に共感として定義される直観の対象として最も確実なものは、意識的存在者にとっては、自らの内面において「持続する自我」であり、「時間を通して流れるわれわれ自身の人格」である (1396)。したがって共感は、「自我自身による自我の持続の内的、絶対的認識」(1402-3)、「自我による自我の単純な直観」を規範とすることになる。

しかし共感が発見する自我は持続としての自我である。持続は「現在における過去の残存」(1411)であるならば、その直観について「自我による自我の」とか、「対象の内部に身を置くこと」といった対象認識におけるような相互外在性を前提とする表現は適さないだろう。そこでベルクソンは緊張の概念によって共感を語ることになる。持続は現在の状態への過去の参入により成立している。その参入の程度が意識の緊張、持続のリズムの相違となる。この緊張の程度の相違において、諸他の存在は持続のリズムの多様性として理解されるだろう。

共感としての直観が、「われわれよりも劣った対象とわれわれよりも優れた対象の存在を

⁷⁶ 「形而上学入門」と『物質と記憶』第四章の物質の形而上学との繋がりについてはウォルムスが言及している。Frédéric Worms: *Introduction à Matière et mémoire*, Paris, 1997, p. 209-10.

⁷⁷ 「われわれがここで直観 intuition と呼ぶのは共感 sympathie であり、それによってわれわれは対象の内部へと身を置き、その対象の特殊なところ、したがって表現できないところと一致するのである」(1395)。

認める」ことを可能にし、また「それらを困難なく共存させる」(1416)。ただ持続をさまざまな対象に認めることは、その多数性を規定する際に困難が伴う。それは持続の複数性 *durées* の問題である。

直観の努力によってまず持続の内に身を置くなれば、はっきり限定された *bien déterminée* 一定の緊張の感情が得られ、その限定そのものは無数の可能な諸持続 *durées* のなかでの一つの選択の様に思われる。いったんそうなった上は、欲しいだけ多くの持続が認められ、すべては互いに非常に異なっている (1417)。

「無数の可能な諸持続のなかでの一つの選択」として、われわれの持続の限定性を捉えるというのは、どういうことだろうか。「緊張の感情」は現在へ過去を参入させる記憶の力の程度を測るいわば存在論的な情感である。私にはその緊張の程度は一定のものとして限定されている。私はあれでもなくこれでもない私の持続を生きており、その緊張の程度は他のものではあり得ない。この限定性を「無数の可能な諸持続からの一つの選択」とベルクソンが述べるのはどういうことか。それは彼が意識的存在から事物を含めた存在一般を、持続の多様性として包括する存在論を前提しているということである。「持続」が「唯一」ではなく、また「われわれの意識が通常働いている持続」しか存在しないわけではなく、持続は複数性を持つということになる。そうでなければ、ベルクソンが共感としての直観について、行為として「唯一」ではなく、それが「無限に続く行為」であること、そしてこの行為の多様性が「存在のあらゆる程度に対応している」と述べていることは理解できない (1416)。つまり、『物質と記憶』でリズムの異なる持続の存在として垣間見られた「諸持続」の多様性は、「形而上学入門」で直観を共感として規定するとともに肯定されているということになる。次の引用には諸持続の多様性についてのベルクソンの理解が示されている。

直観の努力によって、持続の具体的な流れのなかに一挙に身を置けば、事情はまったく異なる。確かに、こうしたところで、われわれは複数の多様な諸持続 *durées* を立てるいかなる論理的な理由も見出さないだろう。厳密に言えば、われわれの持続の他に、いかなる持続も存在しないこともありうるだろう。例えば、世界にオレンジ色の他に何色も存在しないこともありうるように。しかし、オレンジ色を外的に知覚するのではなく、オレンジ色と内的に共感するような一つの意識を

色の主成分とすれば、その意識は、自らが赤色と黄色のあいだに位置することを
感じ、この基盤となっている色の下に、赤から黄へ向かう連続性が自然と延びて
いる一つのスペクトル全体を、おそらく予感しさえするのと同様に、われわれの
持続の直観も、純粹な分析がするようにわれわれを空虚のなかに宙づりにはして
おかず、われわれを諸持続の一つの連続性全体に接触させるのだから、われわれ
は底の方へであれ、高みへであれ、それを辿ろうと試みなければならない(1419)。

ベルクソンが言いたいのは、「多様で複数の諸持続」は「諸持続の連続全体」のなかでし
か、それとして確保されないということである。こうした考察の根底には、『物質と記憶』
における「縮約」の概念があり、また『試論』における「質的多様性」の概念がある。本
稿第一章で見てきたように、例えばわれわれの外部知覚における赤色という性質の知覚は、
物理学的には何百兆というほとんど等質的な振動に帰されているものを、縮約としての記
憶がわれわれの知覚の一つの瞬間に凝縮するものである。そこでわれわれの意識の一瞬間
を、莫大な期間に渡る諸震動を凝縮しているものと理解するならば、こうした瞬間は、わ
れわれの意識の緊張の程度を示すと考えてよいだろう。主観的な性質と科学が分析して取
り出す客観的な等質振動は、同じ一つの運動過程として外部知覚の直接的所与において連
帯していると考えられる。質においては異質性の程度の幅の内に、持続においてはそのリ
ズムの程度の幅の内に、その両極として主観性と客観性は把握され直す。こうした外部知
覚における連帯は、「形而上学入門」において、われわれの持続と諸他の持続との「共感」
の根拠として捉え直されることで、諸他の持続へとわれわれがわれわれを超えていく存在
論的通路となる⁷⁸。

私の意識の持続には固有の限定性があり、それをオレンジ色に例えるなら、私が共感に
よって持続へ身を置き直すことで、私は自らを色のスペクトル全体の連続のなかでの一つ
の限定性として再発見するだろう。私の持続は「諸持続の一つの連続性全体」のなかでの
限定された部分であることが見出される。オレンジは赤と黄との相互浸透のなかで醸成さ
れる一つの特異性に過ぎない。そしてこうした比喩のなかで示されるのは、諸他の存在は、
自らの存在と質的に異なりながらも連続しているということである。

こうした共感の可能性は、『試論』において持続が質的多様性として見出されていたこと
に関わっている。ベルクソンはそこで多様性の概念に二つの形式を区別していた。一方は

⁷⁸ 一九一一年の講演「哲学的直観」を参照。「直観にいくために感覚および意識の領野から外に
身を移す必要はない」(1364)。

数的多数性である。この形式の下、諸事象は相互外在的、並列的に配分され、それぞれ明確に区別される。意識に外的な物体的事物はこの形式を受け入れるものとして理解されていた。事物は数的に分割されてもそのものの本性を変えはしない。他方には心理的事象に見出される存在の仕方がある。心理的諸状態はそれぞれ異質なものでありかつ連続した仕方で存在している。それらは相互浸透的であり、その部分はどこをとっても全体を反映している。諸要素は互いに異質的なのだが、それらを数的に明確に分割することは、そのものの本性を変えてしまうだろう。心理的事象は質的多様性という仕方で存在するのであり、その具体的なあり方はわれわれの内的自我の持続として見出される。

「形而上学入門」における持続の多様性は、一言で言えば、『物質と記憶』において「時間とのかかわりにおいて」見出された諸持続の複数性を、質的多様性の概念から捉え返すものである。持続が複数的であることは、持続である限り、その存在形式である質的多様性としてその複数性は理解されなければならない。われわれにとって確実に共感できる持続は内的自我の持続であるのだから、このわれわれ自身の持続のリズムから、自らの意識の緊張の程度が示している二つの方向性を高低さまざまに辿ることで、初めて諸他の事象を持続として見出すことができるということになる。つまり複数の諸持続は、われわれ自身の持続がそのなかで限定された特殊な部分であるような一つの全体において、相互浸透的多様性において把握されなければならない。

こうしてベルクソンの持続の多元論がいったん明らかになる。「存在のあらゆる程度」は、われわれの意識の緊張が持つ二つの傾向において、二元的に示される。一方には緊張を強めることで「生命」の傾向が示され、他方には緊張が緩む方向に「物質」の傾向が示される。

二つの方向のいずれの場合においても、いっそう努力を激しくすることで、われわれは無際限に拡張していくことができるし、われわれはわれわれ自身を超えていく。前者においては、われわれは次第に分散した *éparpillée* 持続へ向かい、その持続の瞬きはわれわれの瞬きよりす速く、われわれの単純な感覚を分割することで、感覚の質を量に薄める。極限では、純粹に等質的なもの、純粹な反復になるだろう。この反復とはわれわれが物質性を定義するものである。もう一つの方向へ進むことで、われわれは次第に緊張し、収縮し *se resserre*、強度を増す持続へ向かう。極限では永遠になるだろう。もはや、死の永遠であるような概念的な永遠ではない、生命の永遠である。生きている永遠であり、したがってなおも動

いている。そこでわれわれの持続は光のなかのさまざまな振動として再びわれわれに姿を現し、この永遠は、物質性があらゆる持続の分散 *éparpillement* であったように、あらゆる持続の凝結 *concrétion* であるだろう。この二つの極限のあいだを直観は動き、そしてこの運動が形而上学そのものである (1419)。

意識の緊張は、記憶という過去の存在を現在の状態へと参与させうる程度を表していた。われわれが自らの現在を記憶のいっそう広大な領域に拡張しようと努めるほどに、意識の緊張は強くなる。通常、過去は記憶の平面へと圧縮されることでわれわれの人格を形成しているのだが、この収縮の程度を強めていく方向の極限に「あらゆる持続の凝結」でありうるような時間性が見出される。われわれの意識とともにスペクトルの異質的連続性として共感されていたさまざまな持続のすべてが一つの点に凝縮されるような根源的時間性。これをベルクソンは「生命の永遠」と呼んでいる⁷⁹。他方、緊張の度合いを緩めることでわれわれの意識はもう一つの方向へ、自らが物質界における身体的な反応系でしかないような状態へと落ちていく。そこではわれわれの現在の状態に、過去の参入が為されることはなくなり、さらに「縮約」としての記憶力も解除されることを想定すれば、われわれは次第に「われわれより劣った対象」と一致した持続を示していくだろう。極限においては、ただそのつどの現在を繰り返す「純粹な反復」を呈するに至る。

この様に持続の存在論をベルクソンに描かしめるのは、色のスペクトルの連続性（質的多様性）を存在全体に見立てるアナロジーである。われわれの意識の持続と諸他の持続との共存は、意識の傾向を辿ることで経験を離れた領域に見出されるいわば仮想的なものであり、現実に対して可能的な場において初めてその存立を窺い知ることができるような境域である。

しかし持続の思想は、この論文でも主張されるように「真の経験論が真の形而上学」を為すようなものであるならば (1408)、この持続の存在論は経験を欠いているのではないだろうか。意識の緊張の程度に基づいた持続一般の把握は、一幅の絵のように描かれるが、静態的なものに留まっている。持続の多様性は二元的な方向性において示され、両極限に見出される持続の時間性はいずれも「永遠」であった。欠けているのは現実である。

⁷⁹ ベルクソンは、「われわれの意識よりも緊張したある意識」をすでに『物質と記憶』で想像していた。われわれがわれわれよりも劣った持続（莫大な期間に渡るほとんど等質的な諸震動）をわれわれの意識の瞬間（感覚的性質）に縮約しているように、「われわれの意識よりも緊張したある意識」は、われわれの歴史を、それ自体莫大な期間に渡る人類の来歴を、人類進化の諸段階へと間隔を置いて要約し知覚していると考えていた (342)。

このような考え方は問題性を取り逃がしているのではないか。「われわれの意識の持続」と両極との中間を占める広大な地帯に広がる「諸他の持続」は、「生命」と「物質」の現実的邂逅として見出されねばならないのではないか。そしてこうした疑問は、ベルクソン自身によって、「砂糖水の比喩」のなかで問われているように思われる。『創造的進化』を根本的に規定するのは、時間が何かをしているという問いである。ベルクソンは外部知覚におけるわれわれの持続と諸他の持続との連帯から緊張の程度の観念を得て、さらに直観を共感として方法化することで、持続の存在論を描き出そうとしたのだが、持続の多様性を時間とのかかわりにおいて問題化するには至っていない。ここに「形而上学入門」における形而上学の限界がある。対して『創造的進化』は、「具体的全体」としてこの宇宙を現実的に多様で、またそうであるがゆえに時間がかかっているような、いわば諸持続の多様性の現場として捉え直そうとする。そこに開かれているのは、生命と物質が連帯しているこの現実的世界という「具体的全体」を、持続の相の下に「創造」として見つめる視点である。

2 砂糖水の比喩、具体的全体としての現在の持続

「砂糖水の比喩」は『創造的進化』のなかで二度登場する。第一章と第四章である。『進化』第一章冒頭でベルクソンは意識の持続が創造であることを強調する。この観点から有機体の進化、さらに生命の進化が創造的過程として意識と類比的に考察される。その途上で物質的対象の持続が問題になる。物的な事物は、意識とは異なりその持続はそれ自体で創造的なものとは認められないことになる。しかし物質的世界が継起的に展開していることは事実である。こうした事実は何を意味するのか。それを問いかけるのが「砂糖水の比喩」である。

まず意識の持続が創造であるというのはどういうことだろうか。われわれのような意識的存在が持続的に存在することは、記憶と人格において「自己による自己創造」を続けているということを意味する。ベルクソンにとって記憶は「過去がそれ自体において自動的に自己保存する」ものであった。その結果、意識は「同じ状態を二度と通ること」がなくなる。意識の経験する時間の流れはこの意味において「不可逆」である。経験の進展につれて過去は全体として保存され、意識には絶えずわれわれの記憶が潜在している。われわれの人格はこうして蓄積される記憶の集約であり、人格は行為の瞬間ごとに築き上げられていく。記憶と人格において、意識の経験する諸瞬間がまさしく新たなものとして訪れることが可能になる。古きものが古きものとして残存する記憶の厚みの上にしか新たなもの

は到来し得ない。われわれはこうした自己創造を続けていく存在である。意識にとって存在するとは絶えざる変化にあること、成熟していくこと、自らを創造していくことを意味する。

では物質的対象、意識を持たない物体は持続しないのだろうか。しかし物質的対象も時間的な継起をもって展開しているように思われる。科学的認識は物質的対象の継起について、それを周囲世界から孤立させた環境下で、「抽象的な時間 t 」をその「時間の流れ」に配分することで理解している。単位要素となった t は、物質系の諸状態に同時的に対応する符号である。しかしそれによって測られる要素的時間の一つ一つは、区別された系の諸状態間に広がる「間隔」には関わらない。だからこそ「時間の流れが無限に速い場合には」とか、あるいは「過去・現在・未来の全体が一挙に空間内で繰り広げられる場合には」といった想定が為されることも可能になっている。こうして物質的世界は、理論上は、一挙に展開するものとして扱われ、その「時間の流れ」は全体として与えられているものとして想定される。

ベルクソンの批判はまず、こうした客観的時間性の空虚さに向けられる。意識は t 、 t' によって区切られた間隔そのものを生きる。われわれには間隔そのものの経過が質的変容として、一定の持続として与えられている。時間の全体を一挙に与えられうるものとする客観的時間の想定は、こうした意識の持続を排除してしか考えられない。物質系の展開が継起して現れることについて、それが意識と相関的に生起している現象であることが考慮されねばならない。

けれども、物質的世界においても、継起は争うところのない事実である。孤立した諸系に関するわれわれの推論は、系のそれぞれの過去、現在、未来の歴史は、扇の様に一挙に開きうると考えているのだが、この歴史はそれでもなお、われわれの持続に類似した持続を占めているかのように、徐々に展開する。一杯の砂糖水を作ろうと思えば、私は為すすべもなく、砂糖が溶けるのを待たねばならない。この小さな事実が教えるところは大きい。というのも私が待っている時間はもはや数学的時間ではない。たとえ空間のなかに一挙に広げられたとしても、とにかく物質的世界の全歴史に即して適用されるあの時間ではない。時間は私の待ち遠しさに一致し、すなわち自我にとってある一定の部分を為す私の持続に、好きなように伸ばしも縮めもできない私の持続に一致する。これはもはや考えられるのではなく、生きられるものだ。もはや関係ではない、絶対である。砂糖水、砂糖、

そして砂糖が水に溶ける過程は、おそらくそれぞれ抽象であって、全体 Tout のなかで私の感官と悟性によって切り分けられたものであり、全体とはおそらく一つの意識の仕方と進展するのではないか (502)。

『試論』において持続は、例えば鐘の音の継起について、それが持続として捉えられることの可能性を、「深層の自我」あるいは「内的自我」に見出していた。音は自我の表面で身体的に感受される。受容された一連の感覚的性質は質的進展として相互に浸透しあうことでメロディのような持続を形成する。純粹持続は自我の深層で絶えず進行するこうした「有機化・組織化」organisation に認められる。まず持続は自我論的な根拠の下に認められるものであった。『物質と記憶』第四章の外部知覚論は、こうした自我論的な枠組みにあった持続を、諸事物の存在論へと開く道を示したものである。

われわれの外部知覚は、科学的な分析が見出す等質的な振動を、われわれの意識の瞬間として縮約し感覚的性質として受容するものである。縮約は記憶の働きであり、われわれの意識の緊張の程度を表す。対してそこに縮約されている諸事物の持続は緊張の程度の緩い持続として認められるだろう。われわれの感覚的性質が意識の一瞬に収まっていることに対して、物質の諸瞬間はそれ自体では非常に緩やかなリズムでもって流れる持続として考えられる。このとき外部知覚は、われわれの意識の持続と外的諸事物の持続とが、それぞれ持続の緊張の程度が異なりながら連帯している経験と考えられる。これが「時間とのかかわりにおいて」、外部知覚を考察した成果の一つであり、そこには意識に外的な諸事物に持続を認める考察の端緒が開かれていた。

『創造的進化』における「砂糖水の比喩」は再び、意識と物質的対象との接点の経験を「時間とのかかわりにおいて」取り上げ、そこに時間への問いを切り開いている。ベルクソンは、意識と物質が交錯する場において、「時間」le temps の存在を問うのである。

それにはまず、『物質と記憶』で為されたように、われわれの外部知覚が固執している物的認識を解体する必要がある。「砂糖」、「砂糖水」、「砂糖が水に溶ける過程」は、われわれの諸感覚が物質界全体から切り出した形象に基づく個性である。感覚的性質へと流れを固定化し、さらに感官の所与を欲求にしたがって分割することでわれわれは諸事物の安定した眺めを獲得するが、これは外部知覚の直接的所与ではない。外部知覚に持ち込まれるこうした人為性を排除して、その上で確かなものとして残るのは、持続の経験、意識が「待たされている」という時間性の経験である。「待たされる」という事実は、その意識の経験が、物質的過程に厳密に決定された仕方と限定されていることを教える。こうした時

間過程の限定性の経験は物質的世界が意識と連帯しつつ、全体として継起的に展開するものであることを示している。

『創造的進化』第四章における砂糖水の比喩の再提示には、同じ論点がより鮮明に打ち出されている。

ところで、われわれはこれらの間隔を限定された *déterminés* 諸間隔として意識している。もう一度私のグラス一杯の砂糖水に戻ろう。なぜ私は砂糖の溶けるのを待たねばならないのか。現象の持続は物理学者にとっては相対的であり、持続は時間の一定の数の単位に還元され、単位そのものは任意のものであっても、私の意識にとってはその持続は一つの絶対である。というのもその持続は一定の度合いの待ち遠しさと一致し、この度合いは厳密に決定されている。この決定はどこからくるのか。何が私を待たせるのか。必要とされる一定の長さの心的持続のあいだ私は待たされ、それに対して私は何もできない。単なる並列とは区別されるものとしての継起が現実的な効果を持たないのであれば、時間が一種の力でないのであれば、なぜ宇宙は継起的諸状態をある速度で、私の意識には真の絶対である速度で展開するのか。なぜその決定された速度であって他の速度ではないのか。なぜ無限の速度ではないのか。別様に言うなら、なぜ全体が一挙に、映画のフィルムの上での様に与えられないのか。この点を深めるにつれて、私には次第に次の様に思われてくる。未来が現在と並んで与えられるのではなく、現在に続いて起る *succéder* べく運命づけられているのであれば、それは未来が現在の瞬間に完全には決定されていないからであり、またこの継起によって占められる時間が、数とは別なものであり、この継起に身を置く意識にとって、時間がある絶対的な価値と実在性を持つとすれば、それは時間が絶えず、グラス一杯の砂糖水のように人工的に孤立させられたあれこれの系のなかにではなく、この系が一体を成している具体的全体のなかに、予見不可能なものを、新しいものを、自らに創造するからである。この持続は物質それ自体の事実ではなく、物質の流れを遡る *remonter* 生命の持続であるかもしれない。二つの運動はそれでもなお互いに連帯している。宇宙の持続はそこで起こりうる創造の広さ *latitude* と一つでしかないはずである (782)。

砂糖水が解けるのを私が待たねばならないことは、まず「待たされる」という意識の経

験に基づいた持続の現実性 *actualité* の表白であるだろう。目の前の事物が一定の時間的間隔とともに継起的に展開し、その展開に私の意識は待たされている。この継起は目の前の諸事物に帰せられるものだろうか。たんに事物の時間として考えられるものだろうか。ベルクソンはそう考える根拠はないとする。諸事物を実体化することは、諸事物の個性への信憑に関わる。そのものを周囲世界から切り離している輪郭は、ベルクソンにとって、われわれの可能的行為を空間的に投影したものに過ぎない。また、われわれが諸事物に帰属させる感覚的性質は、実証科学による分析においてほとんど等質的で莫大な諸振動に還元されるものを、意識の一瞬に縮約したものである。こうして配置される感覚的性質へわれわれが自らの可能的行為を素描することで事物の固体性が構成されるのであれば、物質的対象の固体性はわれわれが知覚に引き続いて起こしていく行動のために用意したものに過ぎない。

持続の観点からは、砂糖水の溶解に私が待たされる経験は次の様に考えるべきである。私の意識とコップ一杯の砂糖水の溶解は、一つの時間的過程として連帯している。まずこの過程としての持続それ自体が現実的なものである。この連帯はあれでもなくこれでもないものとして限定されている。つまり私の意識に随意的ものではなく、物理過程として決定された展開を辿っており、「待たされる」という意識の時間性は、この時間過程が持つ物理的決定性の意識面への表出に他ならない。しかし展開が決定的であるにしても、それが継起的であるのはなぜか。時間展開の全体は一挙に与えられるように運んではいけない。このことは未来が余地として残されていることを示しているのではないか。物質系としての砂糖水が解けていく過程は、確かに物理法則にしたがって決定的な展開を辿るものである。しかし継起しているという事実は、この持続が未決定性としての未来へ開かれていることを示している。ベルクソンはそこで時間が何かをしていると、もはや孤立化された系においてではなく、物質的世界と意識とが連帯する「具体的全体」に持続が実在しているのではないかと問うのである。砂糖水の溶解に待たされている私の意識に現実的な経験は、「具体的全体」が持続するということの、実在 *réel* の経験でありうる。そしてベルクソンはこの持続を、「物質の流れを遡る生命の持続」として理解している。

「全体が一挙に与えられる」と想定することに対するベルクソンの批判は、「継起」が含まれている「未来」に、真の未来としての資格を与えていないことにある。機械論的に物質系の時間的展開を見るならば、その根底にあるのは、「全体が一挙に与えられている」という想定である (526、528)。機械論は、未来と過去とを現在の関数として計算できるものと捉える。だから想定上は、われわれの知性を超えた知性には、過去・現在・未来がその全

体を一挙に展望できる仕方で与えられていることになる。そこで時間の流れは、知的認識の低位な存在に与えられた仮象に過ぎないことになるだろう。他方目的論は、事象の時間的展開を予め画かれた計画の実現過程として想定する。そこで出来事はプログラムに沿って起こるべくして起こるものになり、時間は実効的な力として考えられておらず、未来は本質的ではない。

「二つの運動はそれでもなお互いに連帯している」。『試論』、『物質と記憶』とベルクソニズムは、現実的経験を混合的なものと見做し、それを二つの方向に純化し分化していくことで實在の姿を浮き上がらせようと試みてきたものであった。『試論』における「内浸透」的経験の持続と空間への純粹化、『物質と記憶』における再認の純粹記憶と純粹知覚への本質的差異化。だが具体的全体の観念のなかでベルクソンは實在から出発して再び現実をそれら極限概念の混交と齟齬の場として見つめているように思われる。

混合的経験から分化して取り出されるべき持続の二つの極限は、具体的全体を絶えざる時間の流れにしている二元性として呈示される。運動傾向としての實在は生命と物質の二つの流れとして、形而上学的直観においてそれぞれ見出されるべきであるだろう。しかしこの二つの流れはある仕方で連帯したものとしてしか時間を真の効果として生み出すことはできないのではないか。そしてこの連帯がわれわれの生きるこの現実的世界ではないだろうか。というのも、具体的全体あるいは「具体的時間」(699)においてしか、未来はそれとして存在を与えられないようであるからだ。「予見不可能なもの」としての未来は、生命が物質と連帯することにおいて初めて存在を与えられるはずである。

ベルクソンは「生命」を「測りしれない潜在性であり幾千もの傾向の相互侵食」(714)として、「意識一般」あるいは「超意識」を「無数の潜在的なものの相互浸透」(723)として想定している。またこうした潜在性としての大文字の生命が生命進化の統一的な源泉として、進行の途上にある進化過程の「背後の力」(583)として概念化される。ただ「全体」の観念において、ベルクソンがこうした潜在的なものとしての生命をのみ想定しているようには、少なくとも砂糖水の比喩においては、思われない。そこでベルクソンが提示しているのは具体的全体である。そこにかけているのは、生命と物質という二つの流れの連帯において制限された現在が、未来へと開かれていることで持続しているということである。具体的全体はこの連帯が作り出している、いままさに進展しつつある持続としての、この現実的世界の広がりやを指示しているように思われる。われわれが存在しているのは「物質との接触」のなかで分割されて成立しつつある多様性でもあるだろう。

生命は物質に触れているあいだは衝力ないシェランに比べられるけれども、生命そのものとして見るならば測りしれない潜在性であり、幾千もの傾向の相互侵食となる。その「幾千もの」傾向も、それらが互いに外在化されて、すなわち空間化されて初めてあらわれるに過ぎない。物質との接触がそのような分離を決定する。物質は潜在的に多様でしかなかったものを現実的に分割する。その意味で、個体化は一部分は物質の業であり、一部分は生命自体に宿るものの結果である(714)。

現在の観念が問い直されるべきであるように思われる⁸⁰。ベルクソンにとって現在は、記憶が感覚に引き継がれ、さらに行動へと展開していく生成の場である。生成を捉え直すことは、この現実的現在において時間が継起していることを改めて問い直すことになるだろう。

待たされているという意識は、外部知覚とともに生起する、いままさに何かが起こっているということの時間的経験である。それは「この継起に身を置く意識」の身体において開かれている。そこで「具体的全体」における時間の継起を適切な仕方でも問題化するためには、『創造的進化』の概念系のなかで「私の身体」を捉え直す必要があるだろう。

まずこの著作に展開されるベルクソンの形而上学を確認しておく。『進化』第三章でベルクソンは生命を原理的に認識する形而上学的直観を展開している。それとともに「形而上学入門」において展開された持続の存在論が更新される。ベルクソンは生命と物質という持続の極限概念を再び捉え直し、それらが交錯する中間に生物の存在を見出していく。生物においてベルクソンの形而上学は現実態を持つことになる。その存在は、「意識一般」という「实在の一つの生」(785)の展開として、生命進化の時間過程の实在性を示すものとなる。ベルクソンにとって生命進化は「意識一般」あるいは大文字の意識が、物質的世界のなかに分散化し現出していく一つの過程として理解される。

この意識一般が生命進化のなかで意識として自らを露わにするのは、動物における感覚—行動系の発達においてである。「私の身体」も生物における感覚—行動系として『創造的進化』の考察のなかで位置づけられるものだろう。

次いでこの著作における感覚—行動系の時間的構造を議論する。この著作においてその

⁸⁰ 例えばミケルは最近の研究のなかで現実性の観点からベルクソンの潜在性の概念を捉え直し、現在の持続について再考を促している。Paul-Antoine Miquel: *Qu'ese-ce qui change dans l'analyse de la mémoire in, Bergson ou l'imagination métaphysique*, Paris, 2007, p. 77-78.

構造を窺わせるのは、第一章で視覚と眼の形成を論ずる箇所である。その議論を確認した上で、生物の身体構造を『物質と記憶』第三章における現在についての考察を参照しつつ、時間とのかかわりにおいて理解することを試みる。

この様に議論を展開することで開かれるのは、物質的事物を事物として捉えるのではなく、それに固有の持続を持つものとして捉える可能性である。ベルクソンは砂糖水の比喻とともに物質系の持続について次の様に述べていた。

したがって、科学が孤立させる諸系を全体のなかに復帰させるならば、それら諸系に持続を帰し、それによりわれわれの持続に類比した存在形式を帰しても、構わないことになる (503)。

砂糖水の溶解過程を孤立的に捉え客観的時間性において理解するのではなく、それ自体持続を持つものとして認めていくためには、「全体に諸系を復帰させなければならない」(503)。ただベルクソンはそのような思考を可能にする観点を明示してはいない。コップ一杯の砂糖水を全体に復帰させて思考することは、まずそれを知覚する「私の身体」を全体のなかへ、「具体的全体」のなかへ復帰させることを要求するだろう。上述の議論を辿ることでわれわれはこの全体への視点を獲得しうるものとする。そしてこうした視点に立つことで、砂糖水の比喻について、その経験を持続するイマージュとして解釈することを試みる。

3 『創造的進化』における形而上学の動態化

『創造的進化』第三章でベルクソンは直観によって生命と物質の実在性を探究していく。それは精神が辿りうる二つの傾向の極限において、それぞれの運動の動性を把握する試みである。

精神は二つの対立する方向に進むことができる。あるときには、自らに自然な方向を追う。そこには緊張 *tension* の形での進展があり、連続的創造があり、自由な行動がある。あるときには、精神は方向を反転し、この反転 *inversion* が徹底的に押し進められると、延長 *extension* に行きつき、互いに他を外在化しあう要素間の必然的な相互決定へ、ついには幾何学的な機械論へ行きつく (684)。

緊張と弛緩という二つの傾向の関係自体は、『物質と記憶』あるいは『形而上学入門』において実質的には問われていなかった。ベルクソンはここでその関係を「反転」に見出している。緊張と弛緩はもとより相関的である。ベルクソンは、緊張の中断が逆の方向性としての弛緩を自動的に露呈すると考えるようになる。

ベルクソンがそう考えたのは、「意識の緊張」を「意志」として把握する観点からではないか。本稿第一章で見てきたように、意識の緊張という概念の実質は「縮約としての記憶」にある。それはわれわれが外部知覚において、物質的な諸震動を意識の一瞬間へと凝縮させている、とベルクソンに想定させることになった形而上学的な記憶の概念である。前章で確認したように、一九五六年「差異論文」のドゥルーズは『物質と記憶』における純粹記憶の領域にも、すでに縮約としての記憶が働いていると解釈していた。われわれはここで前章に展開したドゥルーズの解釈を敷衍しつつ、ベルクソンの形而上学的直観に踏み込んでみたい。

縮約としての記憶と意志、生命の直観

われわれにおいて、過去は自らの人格として絶えず凝縮されている。人格とともに、行為はわれわれの行為でありうる。われわれの自由を、行動の不確定性のなかで自らの行為を限定していくことに認めるならば、その条件を成立させている縮約としての記憶は、われわれの意志的行為をそれとして存立させている力としての「意志」であるだろう。ベルクソンは過去一般を人格へと縮約している記憶の運動の動性に注目することで、その極限に「純粹意志」の存在を考える。こうした直観にわれわれを誘おうとしてベルクソンは「自らに集中しよう」と呼びかける。

…するとわれわれは純粹持続に、過去が、つねに進行中にあり、絶対的に新しい現在によって絶えず増大する一つの持続に再び潜行する。けれどもそれと同時に、われわれは自らの意志 *volonté* のバネがその極限まで緊張する *se tendre* のを感じる。われわれは、われわれの人格それ自身に対する激しい縮約 *contraction violente* によって、姿を消しているわれわれの過去を集め、緊密にして不分割なまま現在のなかに押し進めねばならない。過去は現在に入り込むことで、現在を創造するだろう。…持続の感情が深まり合致が完全になるにつれて、それらがわれわれの身を置き直す生命は、ますます知性を吸収しながらそれを超えていく (665)。

まず「純粹持続」として述べられている内容は、すでに見たように、この著作第一章における持続の規定、「自己による自己の創造」を指している。われわれ意識的存在の持続が「自己創造」であることは「自らに集中する」ことで理解される。そしてベルクソンはこの緊張を「自らの意志のバネが極限まで緊張する」にまで高めていく。ここで「極限まで」と言われるのは、緊張の方向性を辿ることで、個体的意識の心理的狀態を超え、全体としての意識へと飛躍しようとするものであるからだろう。ここで言われている緊張は、意識的存在の行動の条件となっている「人格それ自身」に対する「縮約」に伴うものと理解される。純粹記憶において「縮約としての記憶」が働くことで、われわれの人格はその行為のなかに潜在的な仕方で現存している。したがって「緊張」がここで意味するのは「縮約としての記憶」を顕在化させるに至るまで、自らの精神的行為を拡張することとして考えられる。「姿を消している過去」、すなわち純粹記憶としての過去一般を「集め、緊密にして不分割なまま」現在へもたらすことは、隠れた仕方で働いている縮約の働きをそのままに辿り直すことである⁸¹。それとともに人格へと過去を縮約する精神の運動の動性が「意志」として見出されていく。

この縮約に伴う緊張が「持続の感情」である。この「持続の感情」の深まりとともに、あらゆる持続の「凝結」であるような生命の持続がその動性を「純粹意志」として発見される。それは個体的な意志ではなく、むしろわれわれの意志を意志として存立させている起源としての動性であるだろう。こうしてベルクソンは自らの現在を新たなものとして到来させようとする精神的行為のなかで、「生命」と共感していく⁸²。

⁸¹ 人格はここで「形而上学入門」において生命の永遠として垣間見られていたような「凝結」を、自らの記憶において再現するに至るような「極限」にまで収縮されているだろう。「純粹持続における自らの進展を意識するにつれていっそうわれわれに感じられるように、われわれの存在の多様な部分は互いに入れ子になり、われわれの人格は全体として一つの点に、というよりはむしろ一つの尖端に集中して、絶えず未来に切れ込みそこに侵入していく」(666)。

⁸² こうしたベルクソンの直観について、イッポリットは「創造を創造として反省すること」と規定している。行動の不確定性のなかで自らの行為を意志にしたがって限定していくこと、このことを創造とするならば、その創造を可能にしているものに、真の創造性が発見されるだろう。われわれの意識的行為の可能性の条件は、過去一般を自らの過去として意識平面へ縮約する記憶の働きにある。行為のなかでいつもすでにわれわれの人格を潜在的に形成している縮約としての記憶を力として意識すること、それが「創造を創造として反省する」直観であると言えるのではないか。「エランを中断することなく、創造を創造として反省することができると言えるような苦しく希有な努力でもしない限りは、観照すると同時に行為することはできない。この努力こそ直観である」。Jean Hyppolite: *Aspects divers de la mémoire chez Bergson in, Figures de la pensée philosophique*, Paris, 1971, p. 487. 邦訳「ベルクソンにおける記憶の諸相」廣瀬浩司訳、『現代思想九月臨時増刊ベルクソン』所収、青土社、一九九四年、二三一頁。

われわれは、自由な行動において、自分の全存在を縮約して前方に投げようとするとき、動機や動因を多少とも明瞭に意識する。厳密に言えば、動機や動力が行為に組織されていく生成を意識する。けれども純粹意志はそうした素材を貫いて生命を伝える流れであって、これはわれわれにはほとんど感じ取れない。われわれはせいぜい通りがかりにそれを掠めるに過ぎない。一瞬でもよい、この流れに身を置くべく努めよう。そのときでもわれわれが捉えるのは個体的な、断片化された意志ばかりである。あらゆる生命の原理に到達するためには、あらゆる物質性の原理と同様に、さらに先へ進まなければならない (696-7)。

自らの全存在を激しく凝縮する努力のなかで、潜在的に働く縮約の力を感じ取ること、ベルクソンの生命原理の直観はこの点にかけている。生命の原理そのものへの思考の飛躍は、個体的意志という「素材を貫いて生命を伝える流れ」としての「純粹意志」を、自らの精神の行為の動性において共感することで果たしうる。そしてその極限の動性は「湧出の連続」*continuité de jaillissement* として発見されている (706)。

意志の中断と「物質の理念的発生」

縮約としての記憶を意志として把握することで、緊張と弛緩との関係は再考される。意志の中断に「起こりうる弛緩」*détente*が「延長」*extention*という運動の傾向を露呈する (666)。われわれの記憶に起こりうる弛みという運動傾向においてベルクソンは物質の動性を把握する。記憶を縮約する意志に中断を想定することで、われわれの記憶は散らばっていき、その運動において物質はその動性を把握される。

われわれの過去は、それまでは自己自身を分割不可能な衝動へ収縮することで、自らをわれわれに伝えてきたのだが、いまや幾千もの記憶に分解し、これらの記憶は相互に外在化していく (666)。

意志に中断を想定することによって、われわれの記憶は相互外在化の傾向を呈していく。この傾向性をベルクソンは、運動として考えたときの物質の傾向性と重ねて理解する。この相互外在化の運動が抽象化されたものが「空間」であるだろう。ただ運動としての物質そのものは、絶対的に延長し切ってしまうことはない。ベルクソンは延長を運動の傾向性、

「物質性」として捉える。

創造の力は自分自身から気をそらせるだけで弛緩し始め、弛緩するだけで延長する。延長すれば、数学的秩序が現れてそこに判明に区別された諸要素の配置を司り、また動きのとれない決定性がそれらの要素を結びつけて、創造的行為の中断を顕在化する（679-80）。

「数学的な秩序」は物質の運動傾向に内在したものとして考えられる。こうして「物質の理念的発生」を見届けることでベルクソンは、物質と知性との相即的な適応関係を説明していくことになる。

緊張の中断としての弛緩が、物質の運動傾向であることをベルクソンに実質的に確信させたのは、熱力学の第二法則であるだろう。「物理法則中最も形而上学的な法則」（701）としてベルクソンはエントロピーの概念を評価している。その概念は「物理変化は低落して熱になる傾向」を有すること、さらに「熱そのものは均等な仕方で諸物体間に配分されていく傾向」を有することを示している。ベルクソンは『物質と記憶』で、感覚的諸性質が意識の一瞬間に異質性として現れることと、その同じ現象が実証科学的分析においては莫大な数にのぼる等質的な諸振動へと分解されていることとの「関係」を、記憶が後者を意識の瞬間に縮約していると考えていた。この関係について、カルノーの原理は、改めて後者の運動の傾向性からベルクソンに捉え直させるものである。「目に見える異質的な変化はだんだんと不可視の等質的な変化に薄まっていく」（701）。「一つの動的連続性」としてすでに『物質と記憶』第四章でその実在を垣間見られていた物質は、ここでその運動の傾向性を「自己解体する」*se défait* という観念から捉えられる（703）。

動態的形而上学、自己解体と自己創造の連帯

縮約としての記憶に意志を見出す『創造的進化』第三章に、『物質と記憶』第四章から「形而上学入門」に渡って構想されてきたベルクソンの形而上学の頂点があるだろう。意識の緊張の極限には、「純粹意志」あるいは「純粹な創造」が見出される。「形而上学入門」では、われわれそして諸他あらゆる持続の「凝結」として、持続の存在論における一方の極限は概念化されていた。『創造的進化』ではこの「凝結」が動性において捉えられる。「湧出の連続」の観念は、あらゆる持続の起源としての純粹持続の動性を、尽きることなく繰り返し沸き上がる運動として捉えるものだろう。生命進化の原理、「生命のエラン」*élan de*

vie は、この湧出という傾向性が物質的世界に限定されたものである。エランはあらゆる生物を行動に向かわせている意志であり、「創造の要求」 exigence de création である (708)。

生命のエランは絶対的には創造し得ない。物質に、すなわち自らの運動とは反対の運動に直面するからである。しかし生命はこうした必然そのものとしての物質を掴まえて、そこに可能な限り多くの不確定性と自由を導入しようとする (708)。

エランという生命の持続の動性が「創造の要求」であるのは、必然性のなかに自ら現れ出ようとする傾向性にある。生命と物質、「自己創造」と「自己解体」という持続の極限の二傾向は一つの過程を形づくる。それを表現するのが、「自己解体しながら創造する動作」(705)、あるいは「解体するものを貫いて生成する一つの実在」(705) という観念である。持続の形而上学の両極限は、一つの過程において時間過程として生起する。それを示すのが「具体的時間」であるだろう⁸³。

「時間は発明 invention であるか、でなければまったく何ものでもない」(784)。発明は「思考が具体化するにつれて変化する進展」であり、生命が物質と一つの過程を為しているこの現実的世界の持続の創造性を意味する (782)。生命と物質という二つの極限概念はこうして持続を現実態にもたらず。それが「具体的現実」réalité concrete (703) としての「生の様態」、「有機体」である。

これら二つの流れのうち物質は生命に逆らうが、それでも生命は物質から何かを獲得する。そこから両者のあいだにある生の様態modus vivendiが生じ、これが有機体に他ならない (707) 。

「生命は物質から何かを獲得する」。その「何か」をベルクソンは太陽エネルギーとして考えていた。それ自体としては漸減していくばかりの物質エネルギーが、植物の葉緑素によ

⁸³ 「精神の習慣を掘り下げること、次章で分析するような先入観に行きつくだろう。それは唯物論者にもその反対者にも共通な観念、現実的に働く持続は存在せず、また絶対は、一物質であれ精神であれ一具体的時間のなかに、すなわちわれわれの生命の生地そのものと感じられる時間のなかに、場所を占めることができないという観念である。この観念から、全体が一挙に与えられることになり、すべてを永遠とするか、物質そのものを多様性とするか、あるいはその多様性を創造する行為を神的本質のなかにひとまとめに与えるか、いずれかを立てなければならなくなる。一度この先入観を根絶させれば、創造の観念はもっと明瞭になってくる。というのもそれは発展の観念と一つになるからだ。しかしそうすると宇宙をその総体において語ることはもはやできないだろう」(699)。

って保留され、貯蔵される。ベルクソンは葉緑素の反応を植物による光の外部知覚であるかのように捉えている⁸⁴。ここにカルノーの原理によって定められた物質の自己解体は遅延することになる。そしてこの遅延において、具体的時間の展開が始まる⁸⁵。植物によって貯えられたエネルギーは動物に摂取され、解発される。物質エネルギーの生命による蓄積と解発。植物と動物の連係が、爆発という生命の進化過程を表わす概念となる。植物は太陽エネルギーを蓄積することで爆薬を用意し、動物がそのエネルギーに感覚—運動系のなかで火花をつけ、行動へと解発し消費する⁸⁶。物質の自己解体を生命が「遅延させる」ところで具体的時間が生じ、その時間性は爆発的拡散化として理解されることになる。こうして持続の形而上学のいわば中間に生物の時間性が生起することで、形而上学全体は動態化し、生命進化がその現実的生成の場となる。

4 意識一般について

ベルクソンは生命進化の展開を「宇宙の連続的発展」として理解するのだが、それを時間過程としての一つの持続として担うのが、「宇宙的生」と共外延的であるような「意識一般」*Conscience en général* である (653)。ベルクソンは生命進化の全体を大文字の「意識」*Conscience* が進展しつつ増大していく過程と見做している。生命進化の実景が示す種の多様性は、「意識」が未分化なまま潜在させていた莫大な諸傾向が物質化された諸形態と見做される。意識一般が潜在的諸傾向を物質的世界のなかに諸種として、諸個体として分岐的に存立させていき、その歩みとともにすべての出来事を保存しつつ増大発展していくとベルクソンは考えている。

すでにこの著作第一章の冒頭から、われわれの意識の持続と生命の連続性は類比的に考

⁸⁴ 「植物で動物の感覚性に対応するものは葉緑素の光に対するまったく特殊な感受性である」 (592)。

⁸⁵ 「事實は、生命は有機体に釘づけにされ、有機体は生命を無機物の一般法則に従わせている。しかし一切の経過からいって、生命はこうした法則から逃れるためにできる限りのことをしているかのように見える。…生命には物理変化をカルノーの原理で決まる方向から逆転させる力はない。…生命は物質変化の歩みを止めることはできないけれども、それを遅らせるところまではいける」 (704-5)。

⁸⁶ 「あたかも (生命の基底にある) 努力はただ自由に使うことのできる既存のエネルギーをできる限り利用することを目指すかのように見える。その努力に成功する手段は一つしかない。それは可能なだけこうした潜在エネルギーの蓄積を物質から獲得し、あるとき引き金を引いて、行動に必要な働きを得ることである。努力そのものはこの火ぶたを切る能力でしかない」 (592-3)。「生命の、動物と植物に渡る全体のその本質的なところは、エネルギーを蓄積し、次いでこれを柔軟で変形可能な溝に解放し、それらの溝の先端で限りなく多様な仕事を成し遂げる努力であるように思われる」 (710)。

察されていた。まず有機体の生殖における連続性が、われわれの意識の持続と重ねて理解される。有機体は一般に個体化の傾向を持つ。しかし個体はむしろ生命にとって媒体に過ぎない。個体を媒介して「胚から胚へ」と受け継がれていくことに生命の連続性はある。そしてこの連続性をベルクソンは意識における記憶の構造と類比的に理解している。

ところで、こうした生命の連続性に注意を向けるにつれていよいよ分かるように、有機体の進化は意識の進化に近いものである。意識では過去が現在に押し迫り、来歴からは共約不可能な新しい形態をそこから湧出させる（517）。

生命は生殖において「胚から胚へ」と移行しつつ連続性を形成し、新たな個体を出現させていく⁸⁷。一つの連続的な流れとしての生命と、それとともに生み出されていく新たな個体との関係は、われわれの意識における過去と現在の構造と比較される⁸⁸。そしてベルクソンは生命事象全般について、種の発生、個体発生、さらには「生命形態のいかなる瞬間についても」、われわれの意識の構造と同じ仕方で理解できると主張する（519）。

ただこの著作第一章の考察においては、生命はわれわれの意識の構造と類比的に理解されるに留まっていた。ベルクソンの考察において、個体的な意識が生命進化過程のなかで生命原理としての意識一般の現れとして理解されるのはこの著作第二章である。そこで生命原理は「意識」そのものであることが示されることになる。つまりわれわれの意識自体も、「意識一般」が局所化した部分であるようなものとして考えられるのである。その考察は感覚―行動系についての議論のなかで示されている。そこで意識と行動の関係についてベルクソンは考察の観点を転換し、「意識一般」を、生物すべてに渡って共有される一つの巨大な潜在的記憶として立ち上げていく。そこに至るまでのベルクソンの叙述を簡単にまとめておこう。

⁸⁷ 胚の発達過程への着目は、生命が「自己分裂」によって自らを展開するものであることをベルクソンに喚起し、また個体の発生過程と種の発生過程とが比較しうるものであることを示唆する（514）。

⁸⁸ ベルクソンは、意識の持続のモデルによって生命現象における新しい個体の出現を、それが真に新しい出来事の表れであることを、「有機化」organisation という構造から考察する。この「有機化」は『試論』において内的自我に認められていた持続の流れを、メロディのように形成する構造である。メロディの構造は次のような全体性として理解される。そこに新たに加わる音は、それまでに流れてきた過去の諸音全体との組織化のなかでしか新たな音として加わることはなく、また新たな音は全体の効果においてしか出現し得ない。これがメロディをメロディとして全体的に進展させる構造である。こうした構造が記憶における時間化の構造であり、過去と現在の共存における新しいものの到来を可能にする。

ベルクソンの創造の観念、「解体するものを貫いて生成する一つの実在」という観念は、『進化』第二章において、生命の進化過程として展開される。「原物質」*matière brute*に「エランヴィタル」が「創造の要求」として入り込むことから生命進化の叙述は開始される。生命は「限り無い多様をその分割不可能な統一の内に含んでいる」。そしてそれに対して「抵抗」として現れる物質との接触において、生命は「さまざまに分岐した諸方向を創造する」(579)⁸⁹。その過程は爆発を続ける砲弾の軌道として理解される⁹⁰。爆発に含意されるのは新種の出現の偶然性、未決定性である。物質的障碍とともに生命それ自体に潜在する諸傾向は偶然的な仕方では分化し、諸種を拡散的に現実化していく。

ベルクソンは生命の根本的な傾向を、すでに述べた物質エネルギーの蓄積と行動への解放という二つの傾向に見出している。この傾向性が最初の分岐を決定する。太陽エネルギーを蓄積する植物と、そこに蓄えられたエネルギーを運動に費やし解発する動物(585)。そして動物において生命進化はさらに二つの方向へ分岐する。この方向を決定するのは、本能と知性という認識能力である(608)⁹¹。そして動物における感覚—行動系の出現とともに、ベルクソンは改めて意識について言及していく。その議論は行動と可能的行為としての知覚との考察によって為される。

生命の進化過程における意識の出現と意識一般

『物質と記憶』においてすでに、意識は行為とともに認められるものであった。その第

⁸⁹ ベルクソンは種への分散化の過程をわれわれの意識と比較し、人格形成との類比によっても描いている。幼い頃にはさまざまな性格が潜在し共存しているものだろう。しかしいずれにせよわれわれは一つの生をしか生きることではない。成長するにつれてそれらの性格のあるものが伸びあるものは半ばにして捨てられていく。

⁹⁰ 「砲弾はやがて破裂し破片へくだけたが、それらの破片自体も一種の砲弾になっていて、こんどはそれが破裂して破片になった。ところがこの破片がさらにまた破裂する」(578)。

⁹¹ 本能は共感の能力であり、生命的、直観的なものである(645)。本能的な認識行動において動物は自らの関心の対象を「内側から」掴む(例えば、青虫の神経中枢を正確に刺すアナバチ)。この認識能力は生得的であり、直接的に対象に赴くものである。しかし本能に閉じ込められている限り動物は本能の教える対象から身を離すことはできない。生命的であるとともに、それにしたがって生きる動物は一つの円環に閉じ込められることになる。本能的な認識に基づく行動は「行為の表象が行為の遂行そのものに妨げられている」ようなものである(617)。

対して知性は人間とともに見出される。知性は物質に働きかけそれを利用して道具を作ることによって発達した能力である。それは知覚において提供される諸事物の「固体性」、「非連続性」、「不動性」に基づいて、「無機的な道具を製作し使用する」ものである。この能力の発達とともにわれわれは自然を利用し増殖してきたのだが、知性は生命をそのものとして把握しうる能力ではない。だが知性の発達は本能の指示する対象から身を離すことを可能にし、また言語による内省を可能にする。それとともに自らの内に漠然とした「量」として残る生命へと思考を飛躍する可能性も開かれるのだが、その飛躍は知性のみによっては為され得ない。すでに見たようにベルクソンは意志を手がかりに生命との共感へと思考を飛躍させている。

一章での意識的知覚の成立は、われわれを含めた有機体が行動の不確定性の諸中心として物質的世界に認められることで説明される。意識的知覚は、有機体に行動の選択可能性を提起する。この選択に躊躇の時間が認められ、そこに初発的な意識が認められていた。

『創造的進化』第二章において、意識は生命の進化過程のなかでその出現を再考される。それは行動とともにである⁹²。意識は「行為からの表象の独立」において現れ出る。「行為と表象の不適合がこの場合まさしくわれわれが意識と呼ぶものである」(617)。第二主著と同様にベルクソンは、来るべき行為の表象と行なわれる行為との齟齬に意識の出現を認める。そしてそれとともに無意識の観念が再考される。

ベルクソンは無意識的状态について、意識が存在しないとは考えない。それは意識に発現する機会が与えられていない状態と見做される。植物の世界は太陽エネルギーを葉緑素に貯える機能において動物界と分岐したものと考えられていた。植物には栄養補給のための行動の必要がなく、多くは不動化している。そこで行動を伴わない植物には意識が目覚める機会が与えられないと考えることができる。対して感覚—行動系においてエネルギーの解発を行なう動物において意識はそれとして現れることになる。そして動物における行動と意識の関係について、ベルクソンは意識を、行動に選択を与えることで発達したものと見做すこともできるが、むしろ行動の原因として意識を考えることもできると主張する。

意識は行為を取り囲む潜在的な地帯 *zone de virtualités* を照らす。それは行なわれること *ce qui se fait* と行なわれることもできたこと *ce qui se pourrait se faire* との隔たりを測る。そこで外から見るならば、意識を行動をたんに補佐するものと取ることもできるし、行動がその火を灯す光、可能的行動に対する現実的行動の軋轢から湧出するはかない火花であると受け取られるかもしれない。しかし注意を要することがある。意識が仮に、結果ではなく原因であるとしても、事は正確に同じ様に運ぶだろう。この場合は、最も原始的な動物においてさえ、意識は、権利上は、広大な領野を覆っており、ただ事実としては、万力のようなもののなかに圧縮されているのだと想定してよいだろう。神経中枢の発展は、有機体にますます多数の行動のなかからの選択を与えることで、現実を取り囲みうる潜在的なものに呼びかけるだろうし、こうして万力を緩めることで、意識をいっそう自由に通すことになるだろう (647)。

⁹² 「この意識は創造の要求であり、創造が可能なところでなければ自身に対して意識として現れない」 (716)。

行動と行動の表象が齟齬することで意識は進化の過程のなかで現れることになる。ベルクソンはここで見方を変える。むしろ行動が創造の要求としての生命の現れであり、意識は行動の結果ではなく原因と捉えられる。ベルクソンはエランヴィタルの根底に「意識一般」の存在を想定し、それがすべての生命種、個体に記憶の様に臨在していると見做すことになる。この様に考えるとき「行為を取り囲む潜在的な地帯」としての記憶は、個体的な記憶を超えて、進化の過程とともに蓄積、保持されていった「意識一般」としての生命全体に渡る一つの純粋記憶のようなものであるだろう。「意識」は「最も原始的な動物においても」、そして意識が眠っているとされる植物においても、潜在的な仕方では存在していることになる。ただそれは物質的世界という必然性のなかに、「万力のようなもののなかに」限定されている。そこで動物における行動の不確定性を表現するものとしての神経系統の発達、必然性の支配を緩めるものとして理解される。そこにおいて意識一般はいっそうの自由を拡大していくと考えられるのである。

こうしてわれわれの意識の持続との類比から理解されていた生命と意識との構造的類型性は、大文字の意識という視点から同一のものと理解されることになる。つまり原理的には、「神経系統」によって表される生物個体に認められる意識は、意識一般が物質的に局在化されたものと考えられることになる。

次いでわれわれは神経系という生物の感覚—行動系が表現しているものを、身体における現在の時間的構造として、『進化』の議論のなかで明らかにすることを目指す。感覚—行動系は現在の生成としていままさに進展しつつある持続の現実的な流れの場である。その構造を「時間とのかかわりにおいて」展開することで、必然性としての物質的世界に限定された生物としてのわれわれの身体的経験の構造を明らかにしたい。そのためにこの著作第一章における視覚と眼についてのベルクソンの考察を確認する。

視覚と眼

『創造的進化』第一章でベルクソンは進化論諸説の検討とともに生命進化の原理としてエランヴィタルを提唱する。この説は進化論諸説に対する検討と批判のなかで展開される。その際ベルクソンはそれら諸説に対して、生命進化の諸線上に複雑な器官が構造的に類似して現れていること、この事実を合理的に説明しうるかと問いかける。具体的に挙げられる例が脊椎動物と軟体動物における眼の構造的な類似である。

まず進化論諸説に対するベルクソンの検討と批判の論点を簡単にまとめておこう。ダーウィニズムは胚に内属する変異に着目している。この点は評価すべきであるが、微小変異の蓄積から上記の事柄は説明できないだろう。偶然性に余りに多くの余地を残すことになる。対してアイマーの仮説は、変異の遺伝に方向性を考えている点で理解できる。しかしこの方向性の動因が生物に対して外的な影響関係に求められている。機械論的な因果性に基づいた解釈を行なっているが、何らかの「内的な方向原理」を考えない限り、眼の収斂現象は説明できないのではないか。そこで新ラマルク派が注目されることになる。その説は「定向進化」を「ある種の努力」と関わるものとして認めている。この点にベルクソンは自らの考えとの親近性を見出している。しかし、獲得形質の遺伝は例外的なものであり、また個体に内的な努力を念頭に置いている点は認め難い。

こうして諸説の一長一短を加味しつつ、ベルクソンはエランヴィタルを自らの生命理論として提出する。ある一定の方向に生命が複雑化していくのは、生命に対して外的に働く機械論的な原因によるものではない。それは「内的推力」によるものである。「生命はその起源以来、同じ単一のエランが進化の多様な諸線に分裂しながら続いてきたものである」(540)。「このエランこそは進化の諸線に分有されながら保存され、諸変異の、少なくとも規則的に伝えられ積み重ねられて新たな種を創造する諸変異の原因である」(570)。生命進化の全体に働く「内的推力」を原理とする進化論解釈は目的論的なものとなる。しかしベルクソンの目的論は実現すべき到達目標としての「調和」あるいは「統一」を目指すものではない。エランという原理は生命進化の全体を調和的統一として描くものではなく、爆発的拡散として理解させる起源としての一性である。そしてこの説の理論的妥当性が議論されるのが、軟体動物と脊椎動物とにおける眼の構造の類似である。

眼という器官は極めて複雑な構造を持っている。しかし視覚、見ることはそれ自体単純な機能である。機械論も目的論もその器官にしか目を向けていない。機械論は眼の器官の形成について、外的環境への適応を原理としつつ、器官における部分的要素の序列化を説明しようとする。対して目的論は器官の形成を、要素的部分に内在する製作モデルに基づいた組み合わせとして表象している。しかし機械論も目的論も、部分的要素の組み合わせと累加にのみ着目して考察している点で変わりはない。いずれも有機体の器官形成を、部分からの全体の構成として考えている。しかし生命現象そのものに注目すれば胚の発達に明らかなように、有機化は全体の「分離」と「分化」によって進行している。

有機体の器官形成については思考の枠組みを原理的に転換しなければならない。ベルクソンは自らの生命原理からそれを考察する。エランヴィタルに推された生命の行動が、物

質のなかを通過していく一つの過程として眼の器官形成は構想される。ベルクソンは自らの概念を、手がやすり屑のなかを横切っていく過程として描く。このイメージによってエランヴィタルが原物質のなかで「有機化された機械」machine organiséeを形成していく過程が描かれる。手に仮託されるのは、生命の行動でありそれを動かしているのはエラン、創造の要求である。やすり屑は物質が行動に対して抵抗として現れる様子を示している。

私の手が鉄のやすり屑を通り抜けなければならないと想像しよう。鉄屑は私が進めるに応じて圧縮され抵抗を増すであろう。ある瞬間に手はその努力を使い果たし、まさにその瞬間に、やすり屑の粒はある限定された形態に併置され調整されていることだろう。その形態はまさに停止した手と腕の一部そのものである(575)。

眼という器官の形態をやすり屑の配列と考えるならば、機械論はやすり屑一粒一粒の相互的影響関係からその配列が調整されていったと考えるだろう。対して目的論は、やすり屑の粒に内在する計画にしたがってその配列が構成されていったと考えることになる。しかしベルクソンにとっては、その配列はたんにやすり屑を通り抜ける手の運動によって「こなされた障碍の総体」を示すに過ぎない。それは原物質を通り過ぎた創造の要求の痕跡である⁹³。

こうした議論は、『物質と記憶』第一章における知覚論を進化論のなかに移したものである。ベルクソンはそこで外部知覚論を行動の不確定性を原理として構想していた。知覚は物質界における生物の可能的な行動の反映である。『進化』においてベルクソンは再び行動の不確定性から、眼の形態形成過程を説明しようとする。

けれども、視覚への歩みなどと言えば、古い合目的性の概念に戻っていることにはならないだろうか。この歩みが、到達すべき目標の表象を、意識的にか無意識的にか、必要としているならば、間違いなくその通りであるだろう。しかし真相は、視覚への歩みは生命の根源的エランによって行なわれ、この運動そのものに含まれているのであって、だからこそ進化の独立した諸線上にその歩みが見出さ

⁹³ ベルクソンはこうした事情を運河に準えてもいる。物質的世界に挿入された生命の視覚は、「運河化された視覚であり、視覚装置は運河化の仕事をついに象徴しているに過ぎない」(575)。眼と視覚の関係は、運河とそこを通る行動の関係から理解すべきである。でき上がった運河にだけ注目すればそれはどこまでも分割可能であり、また分解されることでわれわれは要素的部分の構成に驚くこともできる。だがその構成の調和の見事さは「实在の過程に部分がない」のだから、そのネガティブな表現に過ぎない。

れもするのである。では、視覚への歩みはどうして、またどの様にそこに含まれるのだろうか。そう尋ねられるならわれわれは応えて、生命は、何よりもまず、原物質に働きかける傾向なのだと言おう。この行動の方向は予め決定されてはいない。そこから、生命は進化の途上に、諸形態の予見不可能な多様性 *imprévisible variété des formes* をまき散らすことになる。さて、この行動はいつも偶然性の性格を多少とも高い度合いで示している。少なくとも、選択の基礎がそこには含まれている。ところで選択は、いくらかの可能的行動の先回りした表象を前提とする。すなわち行動の諸可能性が行動そのものよりも前に生物のために描き出されていなければならない。視覚的知覚はこのものに他ならない。物体の見える輪郭は、それらの物体に対するわれわれに起こりうる行動 *action éventuelle* の素描なのである。したがって視覚はさまざまな程度で、種々の動物に見出され、そして同じ強度に達したところでは、至るところで同じ構造の複雑さで現れるだろう (577-8)。

ベルクソンの進化理論は見るために器官が作られたとする目的論になりはしないか。こうした見解に対して「さて」と始められる箇所にベルクソンの外部知覚論の本質がある。視覚は可能的行動であり、「生まれかけの行為」である。見ることは行動との相関において考えられなければならない。

行動は偶然性を含んでいる。つまり選択が為されている。選択には躊躇があり齟齬がある。選択があるということは、そのもとになるものとして知覚が、行動に先回りして表象されているということの意味する。視覚は、生命の行動が物質的狀態を通ることで、行動が歩む道を予め描く。それにより行動には選択の余地が与えられる。視覚を行動への生成において考察するこの観点から、視覚器官の形態についてベルクソンは次の様に考えることになる。

視覚は行動の不確定性の程度と相関しているのだから、眼の器官もちょうど視覚とコインの裏表の様にして、視覚の広がりと同じ程度で複雑化しているだろう。つまり視覚器官の複雑性は行動の不確定性を物質的に表現しているものと考えられることになる⁹⁴。そこで

⁹⁴ 行動を起点にして、生命の諸形態の同一性と多様性を説明するこうした議論に対して、「なぜ」と問われるならベルクソンは、われわれを含めた生物はいつもすでに生きようとして行動しており、そうした傾向として存在していると答えるものである。生命は「原物質に働きかける傾向」として理解される。ベルクソンは意志が、個々の意志ではなく全体としての生命の意志が、あらゆる種において共有されていると考える。そして「どのように」と問われるなら、エランは

「セルプル」の眼も「アルキオパ」の眼も鳥類の眼も、そしてわれわれの眼も意識一般が物質的世界のなかで分岐しつつ多様化し、拡散していった結果を表わしていることになる。それぞれの器官の複雑性は、そこで行動が自由になっている程度を現していることになるだろう。生物の身体は、意識一般に潜在する諸傾向が物質的世界という障碍とともに分岐することで「諸形態の予見不可能な多様性」を進化の諸線上に分散させる一つの過程の存在を理解させるのである。

5 時間が自らに未来を与える

眼の器官形成についてベルクソンは生命の行動という観点から問題化している。視覚を可能的行動と見做すことで、生命進化における視覚器官の出現が考察される。そこで知覚は「行動の諸可能性が先回りして描き出されていなければならない」ものとして説明される。しかし生成の過程としては感覚が行動を準備するものであり、行動への躊躇を生むのは行動に選択の基礎を提供する諸感覚である。

「生命の根源的エラン」によって行動は衝力を得ている。では生物の外部知覚において、それはどこに位置づけられるだろうか。エランが衝動として理解されていることから考えれば、それは感覚的性質を生物に知覚として現出させている記憶の働きとして考えることができる。そしてそれは『物質と記憶』第四章において、縮約という記憶の働きから理解されていたものである。

ベルクソンの哲学における感覚—行動系の時間的構造は、『物質と記憶』第三章の議論に基礎を持つ。前章で確認してきたようにベルクソンは、現在という時間性を絶えざる生成として定義していた。現在は身体についての意識である。身体は感覚—行動の連結線であり、身体の構成から現在は直接的過去と直接的未来に分けられる。この『物質と記憶』の議論でベルクソンが念頭に置いているのはわれわれの身体である。そしてわれわれは身体において生物として存在する。

生物は身体において、感覚—行動として同様の構造の下に現在の生成を展開するものだろう。その生成もまた直接的過去と直接的未来とに分たれて理解される。縮約としての記憶によって感覚という直接的過去が形成されるのであれば、行動を不確定にする選択に基盤を与える働きとして、エランヴィタルはそこで働いていると見做すことができるだろう⁹⁵。

一つだが行動の進む方向は未決定であり、出会われる障碍とともにそれ自身が潜在させている諸傾向を分岐させる仕方では進展を続けた結果である、と答えることになる。

⁹⁵ 本章第三節でわれわれは、縮約としての記憶を意志の力と見做すこと、このことを基軸にベルクソンによる生命原理の直観を理解してきた。過去一般を人格へと凝縮させている記憶の働き

神経系における感覚—行動の連結線の構造を時間とのかかわりにおいて捉えるなら次の様に考えることができる。縮約としての記憶が感覚的諸性質を現出し、それとともに直接的未来の行動は不確定になっていく。その行動は「非連続的跳躍」⁹⁶として物質的世界へ解放されていくことになる。こうした過去から未来への移行そのものが、生物が展開している現在の生成である。縮約としての記憶とともに未来は物質的世界のなかで未決定性として確保される。

生物における感覚—行動系はこうした生成を展開するものとして理解される。意識一般としての生命進化全体の持続は、物質的世界のなかで生物が展開する現在の生成において、自らに未来を与えていく。生物が高低さまざまに展開する諸持続の多様性は、意識一般という実在的持続の局在化された諸点であり、またその一つの尖端で生成を続けるものがわれわれの身体であることになるだろう。

結論

『創造的進化』において持続の形而上学は、生物をその現実態として見出し、生命進化の過程として動態化する。この過程は意識一般が「実在の一つの生」を物質的世界のなかで展開することにおいて、一つの持続として理解される。この「意識」が自らを現すのは、まず動物における感覚—行動系の発達においてである。生物の感覚—行動系は、実在的持続が現在の生成として現実的なものとなる場所であり、その一つの尖端に私の身体は位置している。私の身体も生物として生命の進化過程のなかで生成を続けるものである。

ベルクソンにとって未来は、起こりうる可能性として考えられる表象を意味しない。未来は何か「続いて起こる」succéderということである。「生命進化の前方には、未来の扉

にわれわれの自由の可能性の条件があるのなら、過去を縮約している力にわれわれ意識的存在の行動の起源はある。この理解から立ち戻って、生物の外部知覚における縮約としての記憶の働きについて、それをエランの働きと見做すことができる。それは創造の要求であり、創造の要求は物質という必然性のなかに不確定性を挿入しようとする努力である。

⁹⁶ 「本質的なことについては、われわれはまだ暗に述べたに過ぎなかった。つまり生命がその進化に沿って、非連続的跳躍 sauts discontinus により細部に至るまで創造する諸形態の予見不可能性 imprévisibilité des formes についてである。純粹機械論あるいは純粹目的論の立場に立つとすれば、両者いずれの場合においても、生命に関するさまざまの創造は、予め決定されている。未来は現在から計算によって演繹可能であり、あるいは、観念の形で現在に描かれる。したがって時間は無効になる。純粹経験はそのようなことは何も思い浮かばせない。衝動でもなく魅力でもない、と純粹経験は言うように見える。エラン élan はまさしくこの種の何ものかを暗示しうる。そして、エランについて内的に感じられるものの分割不可能性と外的に知覚されるものの無限可分性を通して、生命の本質的属性である有効な実在的持続をも、われわれに考えさせる」（1072）。

がいくつも大きく開いている。それは最初の運動によって終わりなく続けられる創造である。この運動が有機的世界の統一を為す。多産な統一 *unité féconde* であり、限りなく豊かで、どんな知性が夢見うるものにも優っている」(584)。有機的世界の統一が多産なものであるのは、まず意識一般が物質的世界のなかで生物として分散化することで、過去を未来へ転化する場を得るということにある。

これまでの議論を通してわれわれは、砂糖水の溶解に待たされる経験に身を置く意識について、そこで外部知覚を経験するわれわれの身体について、それは時間とのかかわりにおいてどのような場であるかを確認してきた。次いでわれわれの身体と砂糖水の溶解という物質的事象とが連帯する場としての「具体的全体」において、そこで時間が継起することについての解釈を試みる。それをもって本稿全体の結論にかえたい。

結 論

『物質と記憶』における外部知覚論についてのわれわれの問題意識はイマージュの持続という観念に要約することができる。そしてこの観念について、縮約という記憶の働きを手がかりに、二通りの仕方では考えることができる。

一方では、イマージュの現出は生成の始まりである。イマージュとして現れている知覚がその先に向かう持続。ベルクソンにとって知覚は「生まれかけの行為」であり、イマージュの多様な現れは、そこから始まる生成の起点として、現在の持続を指示するものとなる。意識の一瞬に物質的事物の諸瞬間が収縮されているのは、生物が行動において物質的世界に現れ出るためであった。生物は「行動の不確定性の諸中心」として、イマージュの総体のなかで個々のイマージュを浮き上がらせていく。物質的世界を感覚的諸性質としてわれわれの意識に現出する縮約という働きは、それに引き継がれる行動を準備する。

他方では、縮約しているという事実の理解から、そこに収縮されている「諸事物の内的な歴史の莫大な期間」について、その存在をわれわれの意識とは異なるリズムを持った持続として考えることができる。この様に考えるとき、われわれの知覚は諸他の持続の弛緩した時間性を緊密化して受容しているものと見做される。空間的区別に代えて、時間とのかかわりにおいて知覚するものと知覚されるものを捉えるならば、それらの区別は緊張のリズムの程度において理解される。そしてこの様に考えることで、あらゆる事物を自ら自身の持続を展開するものとして理解する思考の端緒が開かれる。

しかし外部知覚についての『物質と記憶』第四章での考察は形而上学的なものであり、われわれが身体において諸他の持続とともに存在していることを、現実的経験のなかで示すには至らない。ベルクソンの『物質と記憶』の問題は心身関係の問題の解決にある。しかしわれわれの意識とその諸他の事象を現実的な多様性として考察することはベルクソンのリズムとして追求すべき一つの問題であるだろう。

外部知覚がリズムの異なる持続が関係する場であることを示す経験は、『創造的進化』の砂糖水の比喩のなかに示されている。それは砂糖水の溶解に「待たされている」というわれわれの意識の経験として提示される。この待たされるという時間性はいままさに進行しつつある現在の時間経験であり、その経験は物質的事物がわれわれとは緊張の程度の異なる持続として存在しうることをわれわれに告げている。

待たされているという事実はず、私の現在の生成が限定されていることを示している。

砂糖水の溶解は、物理法則によって決定された仕方では展開し、われわれはその展開をどうすることもできない。しかし決定された仕方でありながらも、その溶解は継起する。ベルクソンはこの継起するというもののなかに、物質系の時間について「全体が一挙に展開される仕方」で与えられているわけではないことの確証を求めていた。つまり砂糖水の溶解に私の意識が待たされるということは、それ自身において持続するものとして物質的事物の存在を示すものであることになる。

ただ問題が残る。ベルクソンは物質性を自己解体の傾向性として理解していた。そして意識がそれと相反する自己創造の傾向性として理解されることを考えれば、ベルクソンは物質的事物に持続を認めることはできないことになる。これは無機物と有機物を峻別するこの著作の一つの限界であるだろう。解体性として定義される物質性は、権利上は瞬間的にその展開を終えるものと見做される。つまり物質はそれ自身持続するものとして考えることはできないことになる。

しかし、ベルクソンは物質系を孤立化させて捉えるのではなく、「全体」のなかで捉えるならば、物質系に持続を認めることができることも述べていた。この様に述べるベルクソンの思考を可能な仕方では展開することで、「具体的全体」の観念のなかに持続の存在論を、持続の現実的多様性において理解することができるだろう。そのために本稿第三章の議論を通して、この経験に立ち会う意識について、生物の身体の時間性を通して理解することになった。砂糖水の溶解に待たされる意識の経験はわれわれの外部知覚の経験であり、その経験はわれわれの生物としての身体における生成の経験である。生成の構造は、縮約としての記憶に基づく行動の不確定性の解放として理解される。

こうした理解を下に、砂糖水の溶解と私の意識が連繋する時間過程について、私の身体の内側から、縮約としての記憶を導きの糸にして解釈することができるだろう。

待たされているという経験は、外部知覚における時間の継起の意識への現れである。そして私の身体における現在は、縮約としての記憶により現出する感覚的性質に基づいて、われわれが行動へと移行していく生成である。砂糖水の溶解に「待たされる」ことは、われわれがそこに展開されているある時間性を、絶えず感覚へ縮約することで成立している。ベルクソンはこの持続の経験について「物質の流れを遡るremonter生命の持続」として示していた。遡るというのは、砂糖水として溶解を続ける「事象の内的歴史の莫大な諸期間」を、意識の一つの瞬間に縮約しているということである。そこで砂糖水の溶解が私を待たせるのは、その時間性を凝縮することで絶えず不確定性としての未来が開かれていることを意味する。

他方、縮約としての記憶はその事象が外部知覚において存在するその場所に認められるものであった。われわれは砂糖水の溶解という物質的事象の持続を、凝縮して知覚しているだけである。縮約という記憶の働きから考えるならば、われわれはそこに凝縮されている事象の時間性を、それ自体において持続するものとして、「われわれの持続に類比した存在形式」を持つものとして考えることができるだろう。感覚的諸印象の継起として与えられている砂糖水の溶解は、具体的事象の持続を示している。われわれはその持続を収縮させているに過ぎず、そこで未来の未決定性は、砂糖水の溶解それ自体においても認められることになる。

そこで「具体的全体」の観念について、次の様に考えることができるだろう。生物はそれぞれに緊張の程度の異なる持続として生成を続ける。その一つである私の身体の外知覚には、物質的諸事象が感覚的性質として現れている。この感覚的性質の知覚は、そこに縮約されている物質的事物の持続の存在を告げる。われわれの身体、生物の身体、そして物質的事象がさまざまに持続し連帯するこの現実的世界の総体が「具体的全体」である。生物の身体が行う縮約—跳躍としての生成のなかに、物質的事物の持続を認めるとき、砂糖水の溶解に待たされるわれわれの意識についての省察は、「生成一般の深化」であるだろう。

こうした観点に立つことで、私の意識が砂糖水の溶解に待たされていることが示す時間の継起は、この現実的世界が現在において持続し続けることを示す一つのイマージュとして理解しうるのである。

文献表

ベルクソンの著作

ベルクソンの主要著作の引用は生誕百年記念版著作集から行ない、その頁付けを本文中に記した。

Œuvres, Paris, 1959.

Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889.

Matière et mémoire, 1896.

Le rire, 1900.

L'évolution créatrice, 1907.

L'énergie spirituelle, 1919.

Les deux sources de la morale et de la religion, 1932.

La pensée et le mouvant, 1934.

Mélanges, Paris, 1972.

Durée et simultanéité, 1922.

邦訳は以下のものを主に参照した。訳者の方々に記して感謝する。なお訳文は適宜変更を加えてある。

『時間と自由』ベルグソン全集1，平井啓之訳，白水社，1965年

『時間と自由』中村文郎訳，岩波文庫，2001年

『意識に直接与えられたものについての試論』合田正人・平井靖史訳，ちくま学芸文庫，2002年

『物質と記憶』ベルグソン全集2，田島節夫訳，白水社，1965年

『物質と記憶』合田正人・松本力訳，ちくま学芸文庫，2007年

『創造的進化』ベルグソン全集4，松浪信三郎・高橋允昭訳，白水社，1966年

『創造的進化』真方敬道訳，岩波文庫，1979年

『精神のエネルギー』ベルグソン全集5，渡辺秀訳，1965年

『道徳と宗教の二源泉』ベルグソン全集6，中村雄二郎訳，白水社，1965年

『思想と動くもの』河野与一訳，岩波文庫，1998年

『持続と同時性』ベルグソン全集3，花田圭介・加藤精司訳，白水社，1965年

『世界の名著53 ベルクソン』中央公論社，1969年

参考文献

- Alexis Philonenko: *Bergson*, Paris, 1994.
- Alain de Lattre: *Bergson une ontologie de la perplexité*, Paris, 1990.
- Bento Prado: *Présence et champ transcendantal*, OLMS, 2002.
- Camille Riquier: *Y a-t-il une réduction phénoménologique dans Matière et mémoire ?*, in: *Annales bergsoniennes II*, Paris, 2004.
- Cours de Victor Goldschmidt sur le premier chapitre de *Matière et mémoire*, in: *Annales bergsoniennes I*, Paris, 2002.
- Édouard Le Roy: *Une Philosophie nouvelle*, Paris, 1914.
- Frédéric Worms: *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, Paris, 1997.
- : La conception bergsonienne du temps, in: *Philosophie numéro 54*, Paris, 1997.
- : *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, 2004.
- Georges Canguilhem: Commentaire au troisième chapitre de *L'évolution créatrice*, in: *Annales bergsoniennes III*, Paris, 2007.
- Gilles Deleuze: *Le bergsonisme*, Paris, 1966.
- : La conception de la différence chez Bergson, in: *Les études bergsoniennes vol. IV*, Paris, 1956.
- : Cours inédit de Gilles Deleuze sur le chapitre III de *L'évolution créatrice*, in: *Annales bergsoniennes II*, Paris, 2004.
- : *Différence et répétition*, Paris, 1968.
- Henri Gouhier: *Bergson et le christ des évangiles*, Paris, 1961.
- Henri Hude: *Bergson I*. Éditions universitaires, 1989.
- Jakub Čapek: Les apories de la liberté bergsonienne, in: *Annales bergsoniennes II*, Paris, 2004.
- Jean Hyppolite: *Figures de la pensée philosophique t.I*, Paris, 1971.
- Jean-Louis Vieillard-Baron: L'intuition de la durée, expérience intérieure et fécondité doctrinale, in: *Bergson la durée et la nature*, Paris, 2004.
- John Mullarkey: *Bergson and philosophy*, Edinburgh University Press, 1999.
- (ed.): *The new bergson*, Manchester University Press, 1999.
- J.-P. Sartre: *L'imagination*, Paris, 1936.
- Vladimir Jankélévitch: *Henri Bergson*, Paris, 1959.

Yvette Conry: *L'évolution créatrice d'Henri Bergson*, L'harmattan, 2000.
Paul-Antoine Miquel: *Bergson ou l'imagination métaphysique*, Paris, 2007.
—————: De l'immanence de l'élan vital à l'émergence de la vie, in: *Annales bergsoniennes III*, Paris, 2007.
Paul Naulin: Le problème de la conscience et la notion d'«image», in: *Bergson naissance d'une philosophie*, Paris, 1990.
Pierre Montebello: Les lectures croisées de Deleuze: Spinoza, Nietzsche, Bergson, in: *Annales bergsoniennes III*, Paris, 2007.
Renaud Barbaras: Le tournant de l'expérience, in: *Philosophie numéro 54*, Paris, 1997.

石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社, 2001年
金森修『ベルクソン』NHK出版, 2003年
杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社, 2006年
檜垣立哉『ベルクソンの哲学』勁草書房, 2000年
—————「ベルクソンとドゥルーズ」, 『ベルクソン読本』法政大学出版局, 2006年
守永直幹『ベルクソン生命哲学 未知なるものへの生成』春秋社, 2006年
渡辺慧『時』河出書房新社, 1975年